

國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報

Annual Report of the Institute for Japanese Culture and Classics
Kokugakuin University

第 6 号



平成 25 年 (2013) 9 月発行



2012 年度国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐって—」



恐山（青森県むつ市）

撮影：平藤喜久子



吉田麻子『知の共鳴』書評会（第3回国学研究会）



京都府立総合資料館

國學院大學研究開発推進機構
日本文化研究所年報

第6号

目次

【プロジェクト活動紹介】

- 「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」 井上 順孝…… 1
「『國學院大學国学研究プラットフォーム』の構築」 遠藤 潤…… 5

【2012年度のトピック】

- 国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐって—」 …… 7
2012年度のCERCの活動について …… 10
宗教文化の授業研究会 …… 13
共催事業報告「教派神道六派特立一三〇周年」記念公開シンポジウム …… 16
「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の現状と今後 …… 17
第3回国学研究会 吉田麻子著『知の共鳴：平田篤胤をめぐる書物の社会史』書評会 …… 20
ハーバード大学への派遣について 星野 靖二…… 23
南フランス出張報告 平藤喜久子…… 27
南カリフォルニア大学における国際会議 井上 順孝…… 31
北京での日中3か国フォーラム報告 井上 順孝…… 34
ベトナム調査報告 井上 順孝…… 35
日本文化研究所・研究開発推進機構と私 遠藤 潤…… 37

【研究論文】

- 宗教の境界線—学生に対する意識調査から 井上 順孝…… 40
宗教文化教育の到達目標に関する一考察—第1～4回宗教文化士試験問題の分析から—
塚田 穂高…… 67
神社年中行事の成立過程について—二十二社・一宮の農耕行事に焦点をあてて—
鈴木 聡子…… 84

【スタッフ紹介】 …… 97

【出版物紹介】 ……106

【テレビ放映・番組紹介】 ……109

カバー写真：富士山。2013年に「富士山—信仰の対象と芸術の源泉」として世界遺産（文化遺産）に登録された。 撮影：ノルマン・ハイヴンズ

「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

プロジェクト責任者 井上順孝

1. プロジェクトの概要：「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」から「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」へ

本プロジェクトは2010年度から2012年度まで3年間にわたって実施された。最終年度である2012年度の成果の概略を示し、最後に後継プロジェクトとして2013年度から開始された「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」プロジェクトの計画についても付け加えておく。

本プロジェクトは大きく二つの目標をもつが、その一つは、2009年から運用が開始された「國學院大學デジタル・ミュージアム」(<http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/>) について、研究開発推進機構内の諸機関や図書館などと連携しながらその円滑な運営を図り、システム面の整備・改良を進めることである。もう一つは、本プロジェクト独自の調査・研究等を進めることである。

さらに本プロジェクトは、プロジェクト代表者である井上順孝を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」(2011～2014年度)、ならびに「宗教文化士」資格の認定制度の運営を担う「宗教文化教育推進センター」(CERC、サーク、本研究所内に設置)との緊密な連携のもとに実施されるものである。

2012年度のプロジェクトメンバーは次のとおりであった。

責任者 井上順孝

分担者

(専任教員) 平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高

(兼任教員) ノルマン・ハイヴンズ、黒崎浩行、斉藤こずゑ

(客員研究員) 市川収、カール・フレール

(PD研究員) 市田雅崇、李和珍、ヤニス・ガイタニディス、加藤久子

(研究補助員) 今井信治

(客員教授) ケイト・ナカイ、土屋博、星野英紀、山中弘

(共同研究員) 天田顕徳、キロス・イグナシオ、小堀馨子、齋藤知明、エリック・シッケタンツ、高橋典史、マシュー・チョジック、ジャン＝ミシェル・ビュテル、村上晶、山梨有希子

2. 2012年度の成果

(1) 「國學院大學デジタル・ミュージアム」の運営

デジタル・ミュージアムについては、基本的な公開ならびに運用体制についてはすでに確立がなされているため、アクセシビリティの改善とコンテンツの充実の側面に力を注いだ。

機構内他機関の担当者・システム担当者、ソフト提供会社の担当者等とともに、「デジタル・ミュージアム・ワーキンググループ」会議を定期的開催して、課題の共有と改善案の検討を行った。

2012年度には特に、デジタル・ミュージアム本体の改善のみならず、そこへのアクセス経路を改善するべく、大学・各機関ウェブ

サイトの構成の整備・改善案等を、各機関ウェブ担当者とともに検討した。

また、教材開発の推進の観点からは、動画コンテンツならびにスマートフォンアプリ開発と公開のための基盤構築について重点的に検討した。問題点を把握するとともに、新たなコンテンツ開発というよりも、これまでに開発・蓄積したものを活用するという方針を確認した。

なお、いくつかのデータベースについては、機構内他機関の担当者からの要請を受けて、入力・公開や改善作業の支援を行った。

全体として最終年度をむかえ、後述する本研究所作成の新規データベースも含め、各機関のデータベース類が一通り出揃う形となり、それぞれの基礎が構築された状況を整備することができたと言えよう。

(2) プロジェクト独自の調査・研究等

◇国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐる—」の開催

2012年9月29日に、國學院大學学術メディアセンター1階の常磐松ホールにおいて、本研究所と科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」ならびに宗教文化教育推進センターの共催によって、国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程」が開催された(本号トピック「国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐる—」」を参照)。

同フォーラムでは、13時から18時の5時間にわたり4つのセッションと総合討議が行われた。発題者とタイトル、コメントは次の通りである。

・第一セッション

発題：ロベルタ・ストリッポリ (アメリカ、ニューヨーク州立大学ビンガムトン校)「古典文学のなかの宗教」
コメント：加瀬直弥 (國學院大學)

・第二セッション

発題：有田英也 (成城大学)「運命に抗う人びと—宗教で読むカミュの『ペスト』—」
コメント：伊達聖伸 (上智大学)

・第三セッション

発題：小池寿子 (國學院大學)「『死の舞踏』に見るキリスト教的死生観」
コメント：平藤喜久子 (國學院大學)

・第四セッション

発題：マーク・マックウィリアムズ (アメリカ、セント・ローレンス大学)「イエスの再生—映画、マンガ、アニメにおける救世主のポップカルチャー的変容—」
コメント：小原克博 (同志社大学)
司会：井上順孝 (國學院大學)

同フォーラムには85名の参加があり、フロアからも活発な発言がなされ、議論された。

なお同フォーラムの様子は、精神文化映像社の撮影により前編60分・後編45分の番組に編集され、衛星放送「スカパー」216chの番組として2012年10月～2013年3月にわたり複数回放映された(本号「テレビ放映・番組紹介」を参照)。

◇EOSの拡充

2012年度には、英文のオンライン神道事典 Encyclopedia of Shinto (EOS) の充実・改善作業が継続して進められた。

すでにアップロードされている本文の内容をチェックし、統一性・整合性を確保する作業については、年度を通じて実施され、かなりの部分の改善作業がなされた。

また、「Appendixes 付録」として、「神名索引」「記紀神系譜」「記紀神名対照表」の3項目が新たに追加され、その翻訳作業を完了させた。

数年にわたり課題となっていたEOS旧サイトからの機能と内容の引き継ぎ作業も並行

して進められ、大部分が完了した。

EOS 本文の一部の韓国語への翻訳も進められ、「第八部 流派・教団と人物」の翻訳がほぼ完了し、公開を開始するための校閲作業に取りかかった。

◇双方向論文翻訳

本プロジェクトでは、神道・日本文化に関する優れた研究を国際的に発信すべく、また海外の研究を日本に紹介すべく、日本語から外国語、外国語から日本語への「双方向論文翻訳」を行って、ウェブで公開する事業を進めている。

2012 年度には、次の 4 論文を選定して翻訳を行った。日本語から英語へのものが 2 点、英語から日本語へのものが 2 点である。

(1) 日本語から英語へ翻訳された論文

・平山昇「明治期東京における「初詣」の形成過程—鉄道と郊外が生み出した参詣行事—」

(英訳 The process of establishment of *hatsumōde* in Meiji Tokyo : A practice of worship at the intersection of the railway and the suburbs 翻訳者：GAITANIDIS, Ioannis)

・山田岳晴「神社玉殿の起源と特質—安芸国の玉殿を中心として—」

(英訳 The Origin and Characteristics of Shrine *Gyokuden* (Innermost Sanctuaries): Evidence from the Western Hiroshima Region 翻訳者：NAKAI, Kate W.)

(2) 英語から日本語へ翻訳された論文

・PORCU, Elisabetta, “Observations on the Blurring of the Religious and the Secular in a Japanese Urban Setting”

(邦訳：「日本の都市社会における宗教性と世俗性のゆらぎに関する考察」翻訳者：加藤久子)

・McPherson, Sean “National Agendas and Local Realities: Festive Material and Ritual Culture, Nationalism, and Modernity in the

Chita Region of Japan”

(邦訳：「国家のアジェンダと地域の現実—知多半島における祭礼資源と儀礼文化、ナショナリズム、近代性—」翻訳者：小堀馨子)

なお 2012 年度には、デジタル・ミュージアムのなかに「Articles in Translation 双方向論文翻訳」データベースを構築した。ここでは、これまでに翻訳された論文 27 本を、「English → Japanese」「Japanese → English」「Japanese → Korean」の 3 カテゴリーに分けてタイトルの一覧性を高めるとともに、各論文の書誌情報等を整備することで、利用者の使いやすさを大幅に改善した。

◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化と公開

これまで本研究所で収集してきた教派神道（神理教・神道修成派など）ならびに神道系新宗教関係の大量の文書資料については、継続的にデジタル化作業を進めてきた。2012 年度には、神道系新宗教関係のものを中心にデジタル化作業と公開に向けたメタデータ整備作業が進められた。

デジタル・ミュージアムのなかには「教派神道関連資料データベース」が構築され、神理教関係の資料から公開が始められた。

◇現代宗教に関する資料・データの収集とデータベース構築ならびに公開

宗教文化教育推進センター事業ならびに前述の科学研究費補助金基盤研究 (B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」と連携する形で、主に宗教教育・宗教文化という観点から、現代宗教に関する資料・データの収集とデータベース構築が進められた。

具体的には、宗教文化について学べる国内の 30 博物館の所在地・特色・提示資料・URL の情報を掲載した「博物館と宗教文化」データベースの構築と公開、「宗教文化を学

ぶための基本書案内」ページならびに「世界遺産と宗教文化」データベースの充実化の作業を集中的に行った（いずれも宗教文化教育推進センターのサイト(<http://www.cerc.jp/>)を参照)。

◇科学研究費補助金基盤研究 (B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」との連携
本プロジェクト責任者の井上順孝を研究代表者とする本科学研究には、本プロジェクトメンバーの黒崎浩行、平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高が研究分担者・連携研究者となつて、連携を強化している。本学神道文化学部の西岡和彦、学術資料館の加瀬直弥も連携研究者となつており、教員間でのネットワーク形成を進めている。

また2012年度には、同科研ならびに「宗教と社会」学会の「宗教文化の授業研究」プロジェクトと連携して、4月15日には東洋文庫ミュージアムにて、12月22日には龍谷大学龍谷ミュージアムにて、研究会が実施された。詳細は同科研サイト (<http://www2.kokugakuin.ac.jp/erc/index.html>) を参照されたい。

3. 2013年度の研究計画など

最後に2013年度からの新規プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」の概要を付記しておく。

・「國學院大學デジタル・ミュージアム」の運営

2013年度からのプロジェクトでは、コンテンツの教育への利用を推進することと、動画素材その他、新たなコンテンツの開発とその公開方法の検討が重視されることになる。旧・日本文化研究所が開催した学術講演会の録画・音声データなどのデジタル化も進んでいるので、それをどのような形で公開ないし

学術利用していくかなども検討される。スマートフォンアプリを活用した公開も進められる予定である。

・EOSの拡充

EOS本文の統一性・整合性の確保・改善作業は、新プロジェクトでも継続して行う。

年表については、簡易版と詳細版の内容と公開形式を検討し、年度中のアップロードを目指す。

「第八部 流派・教団と人物」の韓国語訳についても、校閲を完了させて年度内のアップロードが予定されている。

新プロジェクトでは、教育への活用を念頭に、EOSと神道入門用サイト Images of Shinto : A Beginner's Pictorial Guide の内容を下敷きとした日本および海外の学生や初学者が学ぶのに適した日英二言語表示のコンテンツ構築を構想している。本年度はその内容についての検討と準備作業を進める。

・双方向論文翻訳

神道・日本文化に関する論文の相互翻訳については、新プロジェクトにおいても継続する。これまでの翻訳論文の蓄積を広く周知する方法についても検討を進めるとともに、ファイル情報の管理の改善を行う。

・教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化と公開

デジタル・ミュージアム内に構築された「教派神道関連資料データベース」のコンテンツの充実化を進める。

・教育への活用の重視

教育への活用に関しては宗教文化教育推進センターと協力しての教材作成と公開を進める。科学研究 (B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」との連携も継続する。

◇国際研究フォーラムの開催

2013年度は、本学で開催された日本宗教学会との共催で、9月6日に公開学術講演会「ネットワークする宗教研究」が開催されることとなった。

『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築』

プロジェクト責任者 遠藤 潤

1. 事業概要

本研究事業（期間：2011～2013年度）は、日本文化研究所の二つの研究部門のうち、「神道・国学研究部門」の研究事業として行われるものである。同研究所では、創立以来、神道の基礎的研究、神道・国学関係人物研究、神社史料調査などの活動を継続的に行ってきた。本事業は、こうした成果に立脚しつつ、国学に関する基礎的研究を進めるとともに、学内でさまざまに行われている国学研究のプラットフォームを構築し、ひいては学外との研究交流の基点たらしめようとするものである。実施内容は次の通りである。

I 国学研究の基礎的データ構築

- (1) 『古史伝』 版本のデジタル化とそれにもとづく研究。デジタルデータをデジタルミュージアムで適切な形態で公開するとともに、精読のための研究会を開催し、テキストについての基礎的な研究を進める。
- (2) 国学者の地域拠点の研究。幕藩制下の神社政策の把握、藩と国学者の関係についての研究、門人組織の把握（大平門、気吹舎、神習舎など）、地域組織の把握（地域リーダーの把握とともに）などを行う。得られた成果については、国学関連人物データベース（研究開発推進センター）へフィードバックする。

II 国学に関する研究連携のための組織づくり

国学研究会を運営し、学内（学部・大学

院）の国学関係の研究プロジェクトや研究者の参加を呼びかけ、異なるプロジェクト間での研究関係情報の共有を行う。

代表者 遠藤潤（准教授）

分担者 松本久史（兼担准教授）、林淳（客員教授）、小林威朗（PD 研究員）、三ツ松誠（PD 研究員）、武田幸也（研究補助員）、一戸渉（共同研究員）、小田真裕（共同研究委員）

2. 2013 年度の実施計画

I 国学研究の基礎的データ構築

- (1) 『古史伝』 版本のデジタル化とそれにもとづく研究

・『古史伝』 版本の読書会、注釈の蓄積

精読のための研究会を今年度も隔週で行う。研究にあたっては、デジタル撮影済の本学所蔵『古史伝』 版本をもととし、『古史伝』 草稿本（秋田県公文書館蔵）を適宜参照して、版本の形態になる以前の加筆・訂正などの編集作業についても配慮しつつ読解を進める。

研究会の成果については、記録の形で蓄積をし、公開にふさわしい内容については、デジタル・ミュージアムでの本文に付加できる形へと編集する。

- (2) 国学者の地域拠点の研究

・薩摩藩などの神道・国学関係資料の調査

藩と国学者の関係についての研究に関して、平成 25 年度は薩摩藩を中心的な対象とし、前年度までに扱った加賀藩、紀州藩も継

続しつつ、今後の研究の可能性を含めて調査・研究する。薩摩藩については、薩英戦争後のイギリスと国学者の関係を考察し、幕末維新期の神仏分離や廃仏毀釈の動きに対する国学者の実際の関与を再検証するという問題関心のもと、メンバー全員の参加によって調査・研究を進める。具体的にはすでに活字化された史料の検討を進めた上で、鹿児島県立図書館および鹿児島県歴史資料センター黎明館などの所蔵資料について神道・国学研究の観点からの調査を行い、藩の神社政策や国学者の位置づけについて考察する。

加賀藩と紀州藩については、平成25年度は基本的に研究事業としての実地調査は行わず、平成24年度までの調査をふまえて文献調査や関連する研究動向を把握することを主要内容とする。

また、これまで読解を進めてきた高玉家宛平田鋳胤書簡については、出版に向けた内容の最終確認を進める。

II 国学に関する研究連携のための組織づくり

国学研究会を数回開催する。

また、3年間の研究事業の成果の総括のために、近世・近代の国学研究に関するシンポジウムを開催する。

この事業によって、国学研究に関する基礎情報を共有可能な形態で蓄積する方法を模索するとともに、学内のさまざまな国学研究の間の連携を可能にする。将来的には、学外の国学者にとっての研究交流の場としての役割を果たすことを目指している。

3. 2012年度の成果

2012年度の成果については『日本文化研究所年報』今号の記事、「[國學院大學 国学研究プラットフォーム]の現状と今後」や「第3回国学研究会」でその詳細を紹介しているので、ここでは概略を述べるにとどめる。

I 国学研究の基礎データ構築

(1) 『古史伝』 版本のデジタル化とそれにもとづく研究

『古史伝』 版本の精読のための研究会を定期的に開催し、書物のあり方や内容について、草稿本や諸本との比較・検討を行った。比較検討の資料として、前身の研究事業で撮影していたデジタル資料についてプリントアウトおよび製本をするなど、利用環境を整備した。研究会の成果については、記録の形で本文と結びつけて整序した形で記録した。

(2) 国学者の地域拠点の研究

これまで扱った各藩に関わる神道・国学関係資料の整理・検討を行った。

鈴屋および気吹舎の地方門人の活動の分析については、これまでの調査結果について整理・検討を加えた。

幕末・維新期を中心とした京都での国学関係者の活動および『古史伝』の諸本などについて、京都府立総合資料館ならびに向日市部文化資料館などで関係資料の調査を行った。

II 国学に関する研究連携のための組織づくり

第3回国学研究会では、平田国学の出版活動を明らかにした吉田麻子『知の共鳴』について、著者を迎えて書評会を行った。

国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐる—」

平成24年9月29日（土）に日本文化研究所主催、科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者 井上順孝）、宗教文化教育推進センター（CERC）の共催により、国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐる—」を開催した。

宗教文化は、宗教学に関わる研究領域（宗教社会学、宗教心理学、宗教民族学、宗教民俗学、宗教哲学、宗教現象学、宗教地理学など）以外にも、文学、美術、建築、音楽、映画、法律、経済等々、広い学問領域と関わっている。日本および外国の宗教文化の理解を深めるための宗教文化教育の教材を考えたとき、こうした宗教文化の広がりを踏まえる必要があるだろう。

このような問題意識のもと、2009年には宗教文化教育の教材の一つとして映画を位置づけたときに、どのような可能性、利用法があり、また問題点を孕んでいるかを議論する国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」を開催した。それにつづく形で、今回は文学、美術（アニメやマンガも含む）を中心とし、それぞれの分野の研究者に、授業や研究において宗教文化に関わるテーマをどのように扱っているかを発題してもらい、宗教文化教育の教材として文学や美術を活かすためには、どのような方法があるのか、文学や美術を学ぶために必要な宗教文化の知識とはどういったものか、などの点を議論することとした。

本フォーラムは四つのセッションを設け、各セッションでは、発題に対しコメンテーター

がコメントを加え、フロアを交えての質疑応答を行なった。最後には総合討議が行なわれた。各セッションの発題者、タイトル、コメンテーターは、次のとおりである。司会は井上順孝がすべて行なった。

第1セッション

ロベルタ・ストリッポリ Roberta Strippoli (Binghamton University SUNY, USA) 「古典文学のなかの宗教」

コメンテーター 加瀬直弥（国学院大学）

第2セッション

有田英也（成城大学）「運命に抗う人びと—宗教で読むカミュの『ペスト』」

コメンテーター 伊達聖伸（上智大学）

第3セッション

小池寿子（国学院大学）「『死の舞踏』に見るキリスト教的死生観」

コメンテーター 平藤喜久子（国学院大学）

第4セッション

マーク・マックウィリアムズ Mark MacWilliams (St. Lawrence University, USA) 「イエスの再生—映画、マンガ、アニメにおける救世主のポップカルチャー的変容」

コメンテーター 小原克博（同志社大学）

各セッションの内容を次にまとめる。

第一セッションのストリッポリ氏は、日本の中世文学を専門とする立場から、アメリカ

の大学で日本の古典を教える際の問題点や工夫について発題した。学生は多様な民族的背景を持ち、宗教についての認識もそれぞれ異なっている。そうしたなかで、源氏物語や平家物語などを教える難しさを、ディスカッションによって乗り越えようとする試みなどが紹介された。たとえば「菅原伝授手習鑑」の「寺子屋」では、主筋を救うために、我が子を犠牲にする話が語られ、それが日本文化への偏見となりがちであるが、ディスカッションのなかでは、聖書のアブラハムとイサクの話などを提示し、比較対照させることを試みたという。この発題についてのコメントとしては、アメリカの状況は日本においてもさほど変わらず、文学研究者の宗教文化理解が求められている現状などが指摘された。フロアからは、古典理解の場合に天皇の存在について伝える難しさをどう克服しているかなどについて質問が出た。

第2セッションの有田氏は、東日本大震災以降、日本でも言及される機会が増えたカミュの『ペスト』について、現代フランス文学、思想を専門とする立場から取り上げ、論じた。伝染病という不条理な悪に立ち向かう人々を描いたこの作品を、時代背景や文化的背景に即して読み解く試みをとおし、授業での伝え方を実践した。この発題に対し伊達氏は、非キリスト教圏であり、なおかつ震災を経験した日本において、『ペスト』がどのように受け止められるのかという問いかけをした。

不条理に襲い来る伝染病、そして人を選ばず訪れる死が、その宗教文化のなかでどのように受け止められ、表現されていくか、またそのことをどう伝えていくかという課題は、次の第3セッションにもつながっていった。

第3セッションで小池氏は、西洋美術史の立場から、15世紀から16世紀にかけてヨー

ロッパで流布した「死の舞踏」という死者が行列や輪舞によって生者を墓地、すなわち死へと誘う姿を表現した図像を取り上げた。この図像の流行の背景には、疫病ペストの流行があったといわれている。発題では、この図像が、実際には世俗的性格をもった舞踏として、当初は上演されていたとする説を論じながら、その舞踏が道德教訓的性格を意図的に強化され、キリスト教的救済史観に組み込まれてゆくプロセスを明らかにした。この発題に対し、平藤は、「死のポルノグラフィ化」という近代化の議論とのかかわりや、また死の舞踏が持つ道德教訓的性格の内容などについてコメントをした。

第4セッションでは、ポップカルチャーと宗教について研究を進めてきたマックウィリアムズ氏が、アメリカと日本におけるイエス像について発題した。具体的にはメル・ギブソンの『パッション』(2004)や中村光のマンガ『聖☆おにいさん』、宮崎駿のアニメ『風の谷のナウシカ』を取り上げた。『パッション』については、そのイメージの源流にあるイエスの絵を紹介し、映画が描く「男らしいイエス」が「神の子」である超人としての神々しさを強調しているとした。宮崎アニメのナウシカは、それとは真逆の少女の救世主である。そして『聖☆おにいさん』は、イエスが現代日本での生活を楽しむことで、「神の子」であるという典型的なステレオタイプをからかうような描き方となっている。この発題に対し、小原氏は、伝統的な表現媒体というよりも、ポップカルチャーがイエスのイメージを創出していることを指摘し、その上で、こうした表象が文化の枠をこえて受容されるのかどうかという問題を提起した。

以上のセッションを踏まえ、総合討議ではフロアからの質問や意見を受けて活発な討議

がなされた。イスラームが専門の小田淑子氏（関西大学）は、今回のフォーラムのようなテーマの場合、イスラームの宗教文化についての議論が入らないのではないかという問題を指摘した。そこから、多様な宗教文化を持つ学生がいる場合の配慮の必要性という課題が議論された。また、土屋博氏（宗教文化教育推進センター長）からは、「死の舞踏」という表象が、現代にも意義を持つだろうかという問いや、ポップカルチャーが創出するイエス像は、キリスト教の発展にどう関わるのかといった問いかけがなされた。

発題者のマックウィリアムズ氏とストリップポリ氏からは、アメリカの学生がそれほど宗教についての知識を持っているわけでもなく、保守的な傾向があるわけでもないという

説明がなされた。

今回のフォーラムでは、宗教そのものというよりも宗教を背景とした文化的な営みを取り上げ、それぞれの分野の専門家と宗教研究者がディスカッションをするという形となった。「死」や「災害」を描く文学や図像、神を描くポップカルチャー、異文化で伝える古典など、多様なテーマではあったが、教育の場を想定することにより、参加者の議論が生産的になったと思われる。

なお、本フォーラムは精神文化映像社のご協力により、前後編と2部制でスカパー！216ch ベターライフチャンネルで放映された。今後は、フォーラムの映像の活用方法や、出版物としての公開なども検討していく予定である。（平藤喜久子）

2012年度のCERCの活動について

日本における宗教文化教育の質的向上を目指して2011年1月9日に設置された「宗教文化教育推進センター」(通称CERC)は、その規定にあるように「とりわけ大学教育において日本や世界の宗教文化についての基礎的素養及び理解力を養うことを目的」としてしている。そのために行う業務は大きく二つに分けることができる。まず一つ目が、「宗教文化士の認定に関わる」もの、すなわち年2回実施される宗教文化士認定試験の実施である。2011年11月13日(日)に全国6つの大学(北海道大学・東北大学・國學院大學・皇學館大学・関西学院大学・天理大学)を会場に行われた第1回の宗教文化士認定試験では92名もの受験者が集まり(うち58名が合格)、2012年度も2回にわたって実施した宗教文化士認定試験で、のべ100名近い「宗教文化士」を輩出した。

そしてもう一つが「宗教文化教育の充実に関わる」ものである。こちらは2011~2014年度科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」(研究代表者 井上順孝國學院大學教授)と密接に連携しており、宗教文化士認定試験受験者から寄せられたアンケート結果をもとに宗教文化を学ぶ人々に使いやすかつ価値のある教材の開発を日々進めている。

以下では、CERCのこれらの活動について報告したい。

1. 宗教文化士認定試験の実施

第2回認定試験は6月24日(日)、東北大

学・國學院大學・皇學館大学・関西学院大学・龍谷大学・天理大学の全部で6つの大学で行われた。受験者総数44名、合格者は23名であった。この回から新たに龍谷大学が試験会場に加わっているが、これにより従来から指摘されていた宗教系の大学を多く擁する京都における宗教文化教育の場の広まりが予想されるだろう。

次の第3回認定試験は11月11日(日)に実施され、受験者は28名、そこから16名の新たな宗教文化士が誕生している。

2. 宗教文化士へのサポート体制

「宗教文化士」にはその資格の性質上、資格取得後も変化し続ける世界および宗教文化についての知見をアップデートし続けることが求められる。そのため、CERCでは宗教文化士に対してさまざまなサポート体制を整えてきた。まず、その中でも特筆すべきは年4回発行される「サークメルマガ」であろう。これはCERCと業務提携を結んでいる宗教情報リサーチセンターが発行する『ラク便り』から、宗教に関連する国内外の記事をピックアップし、それぞれに解説を付したメールマガジンである。これにより宗教文化士は直近に起きた宗教に関わる出来事について、常に新しい情報を得ることが可能になる。そしてまた、それを元にしてさらに自分で興味のある分野を深めていくことが宗教文化士には期待されている。

しかし、興味ある分野について情報を収集するとき、とりわけ宗教に関するものについ

てはある程度のリテラシーが必要となるだろう。また、生きた宗教情報を得るには制限があることも多い。そのようなときに役立つのが CERC の HP (<http://www.cerc.jp/>) に設けられた「宗教文化士専用掲示板」である。宗教文化士からの質問に対し、専門家が適切な解答を寄せるという構造になっているが、宗教文化士がどのような問題意識を持っているのか、あるいは社会で今現在宗教をめぐってどのようなことが話題となっているのかを伺い知れる場ともなっており、資格保持者にもそして宗教文化教育を推進するわれわれにとっても非常に貴重なものとなっている。

その他にも、協定を結んだ機関における「優待」制度を CERC では設けている。資格取得者には「宗教文化士認定証」を発行しているが、それを各博物館等で提示すると入場料が無料（施設によって異なる）になるなどの便宜を受けることができるのである。これは認定試験受験者を対象にしたアンケートでも非常に期待が大きく、今後提携機関を増やしていく予定となっている。これまでに提携協定を結んだ機関は、天理大学附属天理参考館、東洋文庫ミュージアム、宗教情報リサーチセンター、そして國學院大學研究開発推進機構資料館であるが、これらの機関が企画した展示・講演会などの情報はサークルマガを用い宗教文化士に提供されている。

3. 宗教文化教育推進のための事業

CERC では、宗教文化を学ぶために有益な情報を収集・精査しデータベース化したうえで、HP で公開している。また、宗教文化士認定試験を受ける人のみならず、広く一般にも宗教文化について興味を持ってもらうために、随所にさまざまな工夫を凝らしている。以下、個々にその内容について説明をしておく。

①「宗教文化を学ぶための基本書案内」

宗教学一般からユダヤ教・キリスト教・イスラム教・仏教など個別の宗教まで、初学者に適当なテキストを網羅したデータベース。現在 50 冊ほどの書物が紹介されている。

②「映画と宗教文化」

映画は『映画で学ぶ現代宗教』（井上順孝編、弘文堂、2009 年）の「はしがき」で編者の井上が述べるように、「宗教の教えや儀礼だけでなく、生活の中の宗教、あるいは生きた宗教文化を感じ取る上で、きわめてすぐれた素材」である、という認識は多くの大学教員が共有していることだろう。映画で描き出される日常生活のひとつコマはまさに「生活の中の宗教」を鮮やかに映し出してくれる。

「映画と宗教文化」データベースはさまざまな使い方が可能である。各映画には、関係する宗教、関連する地域・国が明記されているのみならず、たとえば「巡礼」について知りたいと思ったら、キーワードからそれを題材にした映画を探し出すこともできるようになっている。また、自分が観たことのある映画がデータベースで検索してみると、実は「キリスト教」をベースにしていたという気づきを後から得ることもあるだろう。現在までに 537 の映画情報がデータベースにおさめられており、うち 133 については解説もなされている。

③「博物館と宗教文化」

データベース自体には 700 を超える博物館・美術館が登録されているが、規模や宗教文化との親和性を図り、30 の博物館・美術館について、簡単な特色と特徴的な展示資料、そして HP のアドレスが紹介されている。

④「世界遺産と宗教文化」

CERC が提供するさまざまなデータベースの中でもトップのアクセス数を誇るのがこの

「世界遺産と宗教文化」である。こちらでも600近いデータベースが用意されており、そのうちこれまでに63の世界文化遺産について解説が付けられている。その解説内容は単なる概説とは異なり、宗教学的見地からならではのものとなるよう配慮がなされており、さらに研究者が現地で撮影した画像も豊富に掲載されるなど、これ自体が貴重な資料にもなっている。それが外部からのアクセス数の多さにつながっているのだと考えることができるだろう。

また、解説文で用いられている「基本用語」には、次に紹介する「宗教文化に関する基本用語クイズ」とリンクが貼られ、解説を読みつつ宗教文化に関する知識を楽しみながら得られる工夫が施されているのも特徴である。

⑤「宗教文化に関する基本用語クイズ」

宗教文化を身近なものとして親しんでもらえるようCERCでは3択クイズを多数用意している。これは宗教文化士認定試験の準備にも有効ではあるが、宗教文化を学ぶ入口として、難易度は低めに、しかし基本的なポイントは押さえられるものになっている。

4. 展 望

最後に、認定試験受験者によるアンケート結果から見えてきた今後の課題をまとめておきたい。

これまでに行った認定試験は3回を数えたが、数を経るごとに受験者の在籍する大学が広がりを見せてきていることが分かっている。試験会場は全部で7か所用意されており(北海道大学・東北大学・國學院大學・皇學館大学・龍谷大学・関西学院大学・天理大学)、それぞれが宗教文化士認定試験に関して担当教員を擁する大学であるが、その枠を超えて第3回認定試験の時には、20校近く

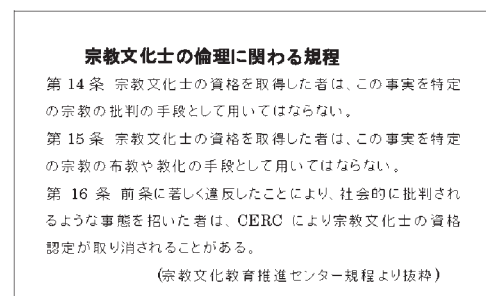
の大学から受験者があった。これまでも行ってきたことではあるが、ポスターやパンフレットを作成し周知を図ることによって資格の認知をさらに広めていく必要があるだろう。

また、「試験対策用のテキストが欲しい」という意見は毎回多く出されるものであるが、この認定試験は概説的な宗教に関する知識のみならず、現在に应用可能な知見を測るものであるがゆえに、テキストが書籍として刊行されることに馴染まない側面があるのも事実である。それだけに、より一層CERCのHPで公開している、先にも紹介した「教材」としてのデータベースの充実が求められる。アンケートに答えた受験者の約8割がHP上にある「教材」の存在を認識しており、そのうちの6割強がそれを活用して試験対策を行ったという事実からも、その重要性に疑う余地はないであろう。

(山梨有希子)



宗教文化士認定証 (例・表)



宗教文化士認定証 (例・裏)

宗教文化の授業研究会

本研究会は、現在「宗教と社会」学会のプロジェクト（2010年～）と科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表：井上順孝・國學院大學）によって運営されている。もともとは2009年に科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表：星野英紀・大正大学）の教材研究の試みとして発足したものである。

2012年度は、東洋文庫ミュージアム、龍谷大学龍谷ミュージアムといった博物館を会場として2度研究会を行ない、教材としての博物館の利用についても議論を行なった。そのほかキリスト教の大学での宗教文化教育の現状や、e-learning教材の紹介、教団見学なども行なった。それぞれの内容を下記に記す。

「宗教文化教育の教材研究会」

【日時】2012年4月15日（日）11時～17時
（研究会は13時～17時）

【場所】東洋文庫ミュージアム

発表者：

宮嶋俊一「宗教学の授業における学問史・学説史の扱いについて」

櫻井義秀「調査志向の宗教社会学—北海道大学の学部・大学院ゼミを事例に2011—」

コメント：寺戸淳子、司会：河野訓

東洋文庫ミュージアムを会場とし、午前中には博物館部分の見学を行ない、メンバーで教材としての可能性を検討した。博物館では、「東インド会社とアジアの海賊」という企画展示が行なわれており、かつての古地図や日本を描いた絵画、またそのほかシーボルトの著作など、貴重な資料が公開されていた。

午後には研究会として、宮嶋氏と櫻井氏が発表を行なった。宮嶋氏は、ヴァイマル期を中心としたドイツ宗教学、宗教思想の専門家である。授業では宗教学の概論の授業を担当している。その際の流れとして、比較宗教学、宗教史、そして各論へと進むよう組み立てていると報告があった。また宗教学の学説や学説史のなかでどのような研究者、概念を取り上げているかを具体例を挙げながら論じた。

櫻井氏は、宗教社会学を中心とする授業を担当しており、それぞれのシラバスや授業構成、前提としていることなどを論じた。そのなかで、自分が学んだ当時の宗教社会学と、現在求められている教育内容の違いや社会調査士という資格取得のことなどが述べられた。



真如苑 総本部

「宗教施設見学会」

【日時】2012年9月21日（金）13時～17時

【場所】立川市 真如苑

新宗教の真如苑の総本部と応現院（いずれも立川市）を見学した。学生は、国学院大学、東京大学、東北大学等から20名ほどが参加した。施設や、施設内での展示の見学を行なった後、真如苑の方々との質疑応答の時間も設けられた。そこで真如苑が東日本大震災で行なったボランティア活動、復興支援活動の内容や反応についての質問があり、宗教の社会貢献、また新宗教の地域との関わりなどについて議論が展開した。

「宗教文化教育の授業研究会」

【日時】12月2日（日）13時半～15時半

【場所】国学院大学学術メディアセンター5階 会議室06

発題者：伊藤悟「青山学院大学でのキリスト

教教育」

伊藤氏は、青山学院大学で宗教部長を務めており、また教育人間科学部の教授でもある。その立場から、青山学院大学でどのようにキリスト教が教えられているのかを科目表を提示しながら紹介した。大学で行なわれるチャペルでの礼拝の参加者や大学のなかでの位置づけ、学生の意識など、広い視点からキリスト教文化教育が行なわれていることなども述べた。

「宗教文化教育の教材研究会」

【日時】2012年12月22日（土）

14：00-16：00

【場所】龍谷大学龍谷ミュージアム1階多目的室

【発表者】

入澤崇「龍谷ミュージアムでの学び—新たな宗教文化教育をめざして—」



龍谷ミュージアム（撮影は2012年5月）

龍谷大学の博物館である龍谷ミュージアムを会場とし、その館長で仏教学科の教授を勤めている入澤氏に発題をいただいた。

龍谷ミュージアムは、実際にさまざまな授業の場として活用されている。入澤氏は専門としているアジアの仏教文化交流史を踏まえ、授業でどういった活用をしているのかを授業内容を再現するような形で詳しく述べた。その後入澤氏の案内でミュージアムを見学し、授業実践の様子を実見した。龍谷ミュージアムは、仏教文化に関する博物館であるが、大谷光瑞による西域調査と深く関わっており、仏教だけではなくさまざまな文化が交差したアジアの文化交流について知ることができるきわめて教育効果の高い博物館であることが確認された。

「宗教文化教育の教材研究会」

【日時】2013年2月28日(木) 午後1時～5時

【場所】國學院大學学術メディアセンター5階 06会議室

【発表者】

井上順孝氏（プロジェクト概要紹介、日本宗教）

井上まどか氏（ユダヤ教）

富澤かな氏（インド宗教）

八木久美子氏（イスラーム）

企業用に作成した宗教文化のe-learning教材（パワーポイント）の紹介をおこなった。もともと企業で働く人を対象にして作成された教材ではあるが、学生向けにも使用できるものであるとのことであった。研究会では上記四つのテーマについて報告がなされ、質疑応答が行なわれた。（平藤喜久子）

共催事業報告

「教派神道六派特立一三〇周年」記念公開シンポジウム

1882（明治15）年は、神道教派7教派が特立した。神道教派のうちもっとも特立が早かったのは1876年の黒住教と神道修成派の2教派であるが、それに次ぐのがこの7教派である。こうなったのには理由がある。詳しくは拙著『教派神道の形成』（弘文堂）を読んできたいが、ともかく2012年はこれら7教派のうち、6教派にとって特立130周年にあたる年となる。7教派ではなく6教派となるのは、1882年に特立した教派のうち、神宮教は1899年に財団法人神宮奉賛会となったので、のちのいわゆる神道十三派に含められないからである。

当初は個々に教派が記念事業をやる予定であったようだが、合同でやったらいかがでしょうかと提案したら、そのように企画が進んだという経緯がある。そして出雲大社教、御嶽教、実行教、神習教、神道大成教、扶桑教の六教派で神道六教派特立百三十年記念事業実行委員会を組織し、記念事業が2012年6月5日に國學院大學で開催された。國學院大學の前身である皇典講究所の設立とこれらの教派の特立には深い関わりがある。この年に一派特立した教派の一つの扶桑教の創設者は宍野半であるが、彼は皇典講究所の設立にかかわった人物でもある。そうした関わりもあるので、この記念事業は研究開発推進機構の共催とした。

記念事業の趣旨は、実効委員会により作成されたパンフレットに次のように述べられている。

「私共神道六教派は明治一五年五月に特立を受け本年特立一三〇年の佳年を迎えました。記念となる年にあたり、立教の精神と先

人達の思いを改めて心に刻みつつ、未来に向けて教派神道の役割と将来を展望する機会と致したく、六教派合同で記念シンポジウムを開催する運びとなりました。」

「神道六教派特立百三十年記念公開シンポジウム」と記念式典は、常磐松ホールで行われた。またその後有栖川宮記念ホールで祝賀会が催された。以下には記念シンポジウムの概要を紹介しておく。

基調講演は私が「二十一世紀の教派—百三十年を踏みしめて」というタイトルで行った。私はまた引き続き行われたシンポジウムのコーディネーターも務めた。

基調講演では明治期の神道教派の形成の事情、その後の展開、そして二一世紀の課題といったことに触れた。なお講演の内容は記念会が作成したDVDに収録されている。またそれをもとに若干手を加えたものが『國學院大學研究開発推進機構紀要』第五号に収録されている。

パネルディスカッションでは、神習教管長の芳村正徳氏が「教派神道と人生儀礼」、また御嶽教管長の村鳥邦夫氏が「教派神道と自然崇拜」と題して、それぞれ発題を行った。芳村氏は教派神道と葬儀（神葬祭）との関わりなどについて言及した。また村鳥氏は、昨今の「山ブーム」に言及しながらも、本来の厳しい山岳修行の意味について触れた。その後、コーディネータの私が加わり、3人で討議がなされた。

なお、式典の様子等は『研究開発推進機構ニュース』6-2に紹介したので、割愛する。

（井上順孝）

「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の現状と今後

日本文化研究所の研究事業である「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」は、平成23年度に開始され、事業期間は3か年である。

平成23年度の事業の概要については、平成24年度刊行の『日本文化研究所年報』第5号にて既報であるので、ここでは平成24年度の事業の概要の紹介をもって現状報告とし、今後の展望についても簡単に述べたい。

1. 内部研究会

この研究事業で最も頻繁に行われているのは、週1回（原則として死木曜午後）開催される内部研究会である。事業で行われている分野のうち、主たるものは国学基本テキストの読解と国学関係史料の整理・読解であり、それぞれ隔週で行っている。平成24年度は国学基本テキストとしては平田篤胤『古史伝』を重要なテーマに関わる箇所を中心にメンバー全員で読み進め、平成25年度も継続中である。秋田の草稿本を参照しながら読んでいる点は他にはない特色であろう。

国学関係史料としては、高玉家宛平田鋳胤書簡の読みについて難読箇所を中心に確認を進めた。これも平成25年度にも持ち越している。旧日本文化研究所の近世社家文書研究会以来、継続して翻刻を進めてきており、紀要類に翻刻を掲載してきたが、改めて本文の翻刻を確実なものとし、基本事項に注を付して、全体を一冊の本として刊行することを目指している。

3. 第3回国学研究会

第3回国学研究会は、平成25年2月8日（金）、吉田麻子『知の共鳴 平田篤胤をめぐる書物の社会史』書評会を実施した。詳細については「第3回国学研究会 吉田麻子『知の共鳴 平田篤胤をめぐる書物の社会史』書評会」を参照していただきたい。

4. 京都出張報告

今回の資料調査は、神葬祭・靈魂観を中心に社家出身国学者の思想的背景を探ることを目的として、平成25年3月17日（日）から20日（水）の4日間実施した。神葬祭は、資料調査で対象とした荷田春満・大西親盛の稲荷社、六人部是香の向日社などの社家出身者にとっては克服すべき課題であり、研究のモチベーションともなったため、見逃すことはできない問題である。

まず、3月17日は、向日市文化資料館において小林・三ツ松・武田の三名で調査を行った。まず、向日市の向日神社にて正式参拝の後、向日神社から向日市文化資料館への寄贈資料の閲覧・撮影許可をいただいた。その後、向日市文化資料館にて向日神社社家、六人部家の寄贈資料の仮目録を精査し、所蔵されている平田篤胤関係の資料、『古史伝』や『靈能真柱』等を確認し撮影を行った。六人部家に気吹舎から『古史伝』の写本が送られていることは、渡邊金造の著書等で明らかにされていたが、その実物と思われる『古史伝』が確認された。その本文には板本以前の

内容が含まれている。これは、秋田県公文書館に所蔵されている篤胤自筆稿本の本文修正箇所が反映されたものである。しかしながら頭注等の書き込みで反映されていないものもあり、六人部家所蔵本と自筆稿本を比較する事により『古史伝』形成過程が、より明確になるものと考えられる。

3月18日は、京都府立総合資料館にて午前中は小林・三ツ松・武田の三名、午後からは松本が合流し、四名で調査を行った。京都府立総合資料館においては、伏見稻荷大社の旧社家である大西家文書(乙)を中心に調査を行った。まず、仮目録の精査を行った後、『日本書紀神代卷』、『六月晦日大祓』等の書誌情報を確認した(書誌情報については別添資料を参照)。これらの文献から、大西親盛の学問への関心の深さがうかがわれる。こうした親盛の学問を考察していくため、東丸神社所蔵の文献等との比較検討が必要と考える。

3月19日は、松本・武田は京都府立総合資料館にて、小林・三ツ松は向日市文化資料館にて引き続き調査を行った。

京都府総合資料館では、主に葬儀関係の資料を閲覧し、仮目録を一部複写した。葬儀関係資料からは、稻荷社において部分的であるが、神葬が行われている事が注目される。一瞥したところによれば、大西家当主の葬祭のみならず、18世紀以降の氏人・妻女を含めた稻荷社の葬祭の方式であったと考えられる。また、東羽倉家史料においては葬儀関係の史料がほとんどなく、日記などで推測していた点が、大西家の史料を比較する事によって、春満の没前後において神葬祭が実施されていたであろうとした推測がほぼ正しかった事が証明されたと考える。向日市文化資料館では、17日の延長として六人部是香関係の資料を調査し撮影を行った。六人部是香の著作である『古道本義伝』は本居宣長の『古事記伝』と平田篤胤の『古史伝』を比較して著

された文献であり、17日に調査した史料とあわせ、重要な文献と考える。また、旅日記を含む六人部の日記類には平田篤胤が京都を訪れた文政六年のものもあり内容を精査する必要がある。また、向日市寺戸墓地内にある六人部家の墓を参拝し撮影を行った。六人部家の墓は向日神社から約1キロのところにある寺戸墓地にあり、代々の神主は小ぶりの墓にそれぞれ埋葬されている。特に文久3年に逝去した六人部是香の墓には「豊秋津彦建甕魂命之墓」とあり、神葬祭であった可能性が高いように思われる。

3月20日は、松本のみにより、京都市立右京中央図書館(京都市右京区太秦下刑部町12)にて、資料調査を実施した。主に、地方自治体発行の地方史を中心に閲覧しつつ、昨日までの史料調査を整理した。神葬祭の問題は荷田春満・大西親盛の稻荷社、六人部是香の向日社などの社家出身者にとっては克服すべき課題であり、研究のモチベーションともなったため、見逃すことはできない。稻荷と同様に上七社の一である賀茂社(上賀茂社)の場合、寛文・延宝期以降、次第に神葬祭が実施されるようになると思われるが、その形態は稻荷同様に寺院・僧侶が関与する折衷的なものであったことが窺われる(京都府愛宕郡役所編『愛宕郡志』の上賀茂村の項(『洛北誌』大学堂書店 昭和44年 pp.191-192、所収)。但し、上賀茂の場合、僧侶が墓前で焼香・念仏を行う点が、これに関与しない稻荷とは異なる。これらの事実は、近世中期において、上七社クラスの神社の葬儀のあり方に一定の方向性があったことを推定させるものである。なお、村上紀夫『近世勧進の研究—京都の民間宗教者—』(法蔵館、2011年)の第I部第二章「近世における松尾社の本願」によれば、松尾社は十九世紀初期に本願が退転する。本願との争論が幕末まで続く稻荷と、さしたる問題の生じなかった上賀茂との中間形態を示している。松尾社の葬儀形態

についても、今後調査が必要であろう。

5. 今後の展望

「國學院大學国学プラットフォーム」のこれまでの活動は、基本的に国学に関する基礎的研究を予算規模や人的組織の規模の限りにおいて、蓄積するという形で続けられてきた。平田篤胤の『靈能真柱』（全文のHTMLファイル）や『古史伝』（全文の画像データおよび部分的な注釈データ）といった、これまでの成果については、今後さまざまな調整を経たうえでデジタル・ミュージアムでの公開の可能性と方法を考える必要がある。

また、平田高玉家宛平田鋳胤書簡については、現段階では研究者の間では書籍としての利用のニーズのほうがデジタルデータよりは大きいという性質をもつものであり、すでに述べたように刊行に向けた具体的な青写真を作成する必要がある。

学内外の国学研究者の交流のためのプラッ

トフォームという点では、まだ途上にあるという感が強い。参加している若手研究者が研究業績を重ねてきているものの、人的ネットワークの広がりには学内についてすら、まだ不十分である。ただし、平成26年度は学内における共同研究である21世紀研究教育計画委員会研究事業「古事記に関する国際的・学際的研究」と連携して行う国学研究の観点からの古事記研究史の研究が主たる課題となる予定であり、古事記研究という具体的テーマを核にして、学内外の国学研究者のネットワークを現在以上に広げることになる。ここ数年の人員の異動に伴って、平成25年度は国学部門によるこの研究事業は、研究開発推進機構の専任教員が関与しない事業となっているが、平成26年度以降は専任教員の主体的参加を含めて、事業の内容と運営方法を検討しつつ、さらなるネットワークの拡大と充実に向けて進まなければならない。

（遠藤 潤・武田幸也）

第3回国学研究会

吉田麻子著『知の共鳴：平田篤胤をめぐる書物の社会史』書評会

平成23年度から3か年の研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」では、学内でさまざまに行われている国学研究が相互に交流できる拠点の構築を目指しており、この中で、学内・学外の国学研究者および関連分野の研究者のあいだでの研究交流や情報共有を目的として国学研究会を開催している。今回は、その第3回研究会として、2012年7月に刊行された吉田麻子氏の著書『知の共鳴：平田篤胤をめぐる書物の社会史』について、著者を招いての書評会を行った。当日の概要は次の通りである。

日時：平成25年2月8日(金)13:30-17:30
場所：國學院大學学術メディアセンター5階会議室06

報告者：松本久史（本学神道文化学部准教授、本機構准教授〔兼担当〕）—国学史から、一戸 渉（金沢大学准教授、本機構共同研究員）—書誌学から、小田真裕（一橋大学大学院、本推進機構研究補助員）—地域史から、小林威朗（本機構PD研究員）—神道史から、三ツ松誠（日本学術振興会特別研究員、本機構共同研究員）—思想史から、遠藤潤（本機構准教授）—宗教社会史から

リプライ：吉田麻子氏

司会：武田幸也（本機構研究補助員）

このように、今回の研究会では、本研究事業に関わるメンバー（専任・兼任教員、PD研究員、研究補助員、共同研究員）がそれぞれの立場から評者および司会を務めた。

松本は、冒頭で自らの研究のスタンスを紹介し、荷田春満から賀茂真淵までの国学の展開を中心に進めてきた自らの研究で留意して

きた点として、(1) 同時代性を重視すること、(2) 受容の立場を重視することをあげた。そして、これらの点において吉田氏の研究とまさに「共鳴」し合う部分は多いとした。

このような観点から吉田氏の業績を検討するならば、画期的な点としては、平田国学における書物出版と受容者の意図の関係を明らかにした点をあげることができ、本書出現以降の平田篤胤および平田国学の研究は、篤胤の著述について、版本／写本の区別や刊行時期の特定、また具体的な普及のあり方などを参照せずに進めることはできないとした。さらに篤胤以外の国学研究の方法に対しても益するところが大きいと指摘した。

その上で、課題としては、著述そのものの内在的理解を目指す立場から、どのような方法を採用していくのかということが残されているとした。すなわち、篤胤の思想の内実を吉田氏が具体的にどのようにとらえているのか、という点について質問を提示した。また、平田派と他の門流との関連性が見えてこない点が気になるとし、この点についても現段階での吉田氏の見解を問うた。

一戸は、企画者から課せられた「書誌学」という視点について、自らの立場を日本文学と措定した上で、文学研究の視点からの書誌学的知識の必要性和意義について最初に説明をした。その上で、吉田氏による本書は、書物をとらえる重点を〈表現主体〉から〈受容主体〉へ移していることにおいて、ロマン主義的な作家・学者像と訣別し、知の媒介物として書物をとらえているとした。また、吉田氏による篤胤関係の諸本調査については、今

日を近世文学研究で最初に行うべき文献学的検証がここでも適用されていると指摘した。また、吉田氏が篤胤の著書に関する木活字本の無断刊行を考察している点に関連して、中野三敏が木活字本の特性と利点として、板木が残らないこと、それゆえ営業形態としての出版を構成せず、出版条例が適用されないことを指摘していることに触れ、吉田氏による紹介はこうした中野の指摘を裏づける具体例として貴重であること、また、刊行の統制について、幕府あるいは書物仲間ではなく、気吹舎が行っている点が興味深いとした。近世における国学と出版の密接な絡み合いについて、一戸が自著『上田秋成の時代』の中で指摘するように、それは18世紀後半から顕著になり、特に宣長において明確だとした。

疑問点としては、気吹舎の出版物がとった形態や摺りに関する気吹舎と摺り師のあいだの違いなどについて質問した上で、より根本的には、平田派の特徴として私家版を貫いた点があげられるが、それは状況に強いられた要素が強く、「知の共鳴」は結果的に生じた草莽のものだったのではないかと問うた。

小田は、自らが地域史研究の視点から地域指導層の学問受容を研究しており、フィールドとしては下総・筑前を扱っていること、また方法としては書物研究と地域社会研究の双方を意識した研究方法を採っていることを紹介し、本書が、下総というフィールドおよび「書物の社会史」という方法の両方で自らの研究と重なりと述べた。そして、こうした重なりが特に濃い第一部第一章および第三部第一章について吉田氏の論を詳しくまとめた上で、吉田氏独自の「書物の社会史」は書物・出版に着目した近年の研究動向にインパクトを与えるものであるとした。また、テキストの内在的理解という方法については、松本と同じく、現時点での戦略を問うた。

他方、課題としては、地域からの思想史あるいは地域への思想史として、思想・学問を

めぐる地域社会の状況の総体との関係や平田国学の展開の以前・以後の状況も顧慮する必要があるとした。さらに、「知の共鳴」というとらえ方は平田国学以外にも有効なのか、書物に特化した分析の有効性とそこから欠落する要素は何か、また、受容主体に注目する際に、その要求を考えるためにはどう読んだかを考えることが有効なのではないか、などの点を論点として提示した。

小林は冒頭で、自らの根本的関心は神葬祭にあり、それに関わって神道における靈魂観を考えるために『靈能真柱』を研究したところから自分の平田国学研究が発端したが、前後して岡熊臣や維新期に宣教使として活躍した人物にも関心を持っており、今回の書評に際しては、「書物を中心にした気吹舎の活動と明治維新宣教使の活動の連続性」という視点を設けたと述べた。この視点からすれば、本書の重要な点は、(1) 篤胤・鋳胤の巡遊、(2) 気吹舎の出版構造、(3) 門人拡大と講義、(4) 学問形成過程、の各点にあり、それぞれ自らが示唆を受けた点を示し、気吹舎の書物中心の活動と明治の宣教使の活動との間に連続性が認められるのではないかとした。

三ツ松は、吉田氏による本書刊行の意義について、近年の平田国学研究を牽引してきた同氏の業績が参照しやすい形にまとめられたこと、近世文学研究者の吉田氏が思想史研究に踏み込んだことをあげ、気吹舎関係史料の調査にもとづく思想史研究の開始を示すものとして本書を位置づけた。その上で、吉田氏は史料調査にもとづく研究を必須とする一方で、著者独自の全体像が提示されていないのではないかと指摘した。また吉田氏による篤胤の著書の具体的理解について、思想史的観点からまがつひ神の問題や「御民」「みよさし」論について疑問を提示した。

遠藤は、冒頭で「書物の社会史」の内容について、ロジェ・シャルチエの所論のうち、書物が著されてからモノとなって読者の元に

届き読まれるまでの全過程が「意味が構築される空間」だとする視点の重要性を指摘した。その上で、これまでの自らの平田国学研究をふまえつつ、篤胤や鏡胤を評価する際には、同時代において神社・神職に関わる社会的位置にいたことを重視すべきであり、純粹な言論としてだけでなく、吉田家や白川家との関係においてその思想内容を考えることも必要だとした。また別の例として、篤胤の仏教批判の言説は、篤胤に対する仏教系からの反批判のとの相互関係において理解しなければならないことを示した。このように、社会史をふまえた篤胤の「学問」の内在的理解について、方法論的な問いをも投げかけた。

著者の吉田氏は、当初妖怪や奇談への関心から平田国学研究へと歩みを進めたこと、また現代の出版活動に触れる機会が多く、書物の成り立ちに関心があったことなどから、本書に結実するような研究傾向へと進んでいったことを説明し、各評者の問いに答えた。

平田国学の受容者の問題に関して、読者が実際にどのように読んだかという点については、直接的な感想文のようなものがないと詳細には把握できず、具体的に論じることはなかなか難しいとした。これに関連して、「書物の社会史」という方法は他の国学者にも適用できるだろうかという質問があったが、吉田は、対象とは別個に方法論が先に立ったのではなく、平田神社に所蔵されていた約10,000点もの史料を前にして篤胤を研究する過程でこういった方法をとることになったと説明した。吉田は、方法の問題から内容へと説明を進め、この膨大な史料を網羅的に見ていくなかで、研究に求められるのは、従来の思想史研究でともすると見られるような「上から目線」で平田の思想を裁断することではなく、当時の当事者には実感として（周囲にあるものとして）神や妖怪あるいは奇談

があるということ、対象に寄り添って理解し位置づけていくことであると考えに至った、それゆえ、自分の研究は宣長・篤胤の思想史的位置づけをめぐる論争に加わるというより、篤胤にとっての神の実感はどのようなものなのかを明らかにすることを意図している、とした。吉田は『鬼神新論』の自らの分析を例としてあげ、神観に関する宣長との対比ではなく、篤胤の特徴を捉える必要があったのであり、その結果『鬼神新論』における篤胤の神観にはある種の原始性（幼児のように素直なもの）を見出したと述べた。今後も、複数の著作の記述をつなぎ合わせて篤胤像を仮構するのではなく、個々の著作の文脈を意識して分析する必要があるとした。

三ツ松は、政治意識の観点から、民俗に対する篤胤の関心は排外意識や差別につながらないのだろうか、と問いかけ、また「御民」意識の理解をめぐって、吉田が本居宣長撰述の林崎文庫碑文設置に関する交渉過程を検討して、屋代弘賢のような幕府関係者にとって「御民」概念が排除すべき危険なものだったと説明したのに対し、弘賢は「御民」の語を否定せず、むしろ宣長門人が師を「御民」と呼びたがらなかったのではないかとの説を述べた。これに対して、吉田は前者については篤胤に排外意識がなかったとはいわないが、それだけで結論づけても篤胤の思想を理解したことにはならないのではないかと反論した。また、後者については、史料の具体的な検討ができないこの場で議論することはできないとした。

また、篤胤の思想を同時代にどのように位置づけて理解するか、という点については、吉田は篤胤による旅先などでの奇談の記録と、それと同じ時期に各地で編纂された地誌への奇談の採用・収録との関連性を指摘した。（遠藤 潤・三ツ松誠）

ハーバード大学への派遣について

星野靖二

はじめに

執筆者は、国学院大学とハーバード大学ライシャワー日本研究所との研究協定に基づき、2011年4月より2013年3月にかけての2年間、国学院大学より派遣されて同研究所に客員研究員として滞在して研究する機会を得た。派遣の目的は大きく二点あり、第一点は北米における日本研究、特に文化・宗教に関する研究状況の調査、第二点は19世紀後半から20世紀初頭にかけてニューイングランド地方で学んだ日本人留学生についての調査である。第一点については別稿にまとめる予定となっているため、以下では第二点目の調査結果に言及しながら、執筆者の現地での活動の概要について報告する。

ライシャワー日本研究所について

最初にライシャワー日本研究所 (E. O. Reischauer Institute of Japanese Studies) について簡単に紹介しておきたい。ライシャワー日本研究所は (以下「研究所」) は、その名の通り日本研究に焦点をあてた研究機関であり、もともと1973年に日本研究所 (Japan Institute) としてハーバード大学内に設立された。その設立に尽力し、所長も務めたエドウィン・O・ライシャワー氏を記念して1985年に改称して現在の名称となっており、本年2013年に40周年を迎えることとなる。

研究所と本学との研究協定についていえば、研究所側からは北米における神道・日本

宗教研究の第一人者であるヘレン・ハーデカ氏に特に助力して頂いている。執筆者の滞在中にも色々とお気配りして頂き、また研究上でも有益な示唆を受けたことを、ここに感謝と共に記しておく。

研究所の通常の活動としては、客員研究員やポスト・ドクター研究員を受け入れながら、独自に研究事業を推進し、また定期的にシンポジウムやフォーラムを開催している。独自の研究事業の例として、例えば東日本大震災の直後から日米の他の諸機関・グループと連携を取りつつ構築している2011年東日本大震災デジタルアーカイブ (参照: <http://jdarchive.org/ja/home>) を挙げる事ができる。同アーカイブは現在進行形で整備されているが、特にアンドリュー・ゴードン氏 (2011~12年度の所長) は同事業を積極的に推進している。

また、学期中には毎週金曜日の午後に講師を一名招いてジャパン・フォーラムという小規模なフォーラムを開催している。講師は研究所のポスト・ドクター研究員から他の大学機関における日本研究者まで多岐に渡っており、また聴衆側を見てもハーバード大学学内からの研究者・学生はもちろん、近郊の大学からも研究者や学生が聞きに来ていた。同フォーラムは1974年から続く伝統あるものであり、講師として招かれるのは名誉なことであると聞いた。それもあって同フォーラムは研究所が北米の日本研究者間にネットワークを形成するのに貢献しているという印象を受けた。

研究所に学生は所属していないが、研究所

所属の教員達はハーバード大学内の教養学部／大学院 (Faculty / Graduate School of Arts and Sciences) や東アジア言語文明学科 (Department of East Asian Languages and Civilizations) 等にも関わっており、連携しながら教育活動にも従事している。これに関して、執筆者は滞在中にハーデカ氏のゼミ・講義を聴講する機会に恵まれた。これについては後述する。

活動報告

以下、時系列に沿って現地での活動の概要を記す。

2011 年春学期

ハーバード大学の学年暦は9月が年度の始まりで、9月から12月までが秋学期、2月から5月までが春学期となっている。故に執筆者が着任した4月は春学期の半ばであり、またハーデカ氏が研究休暇中であったこともあって、この学期は特に講義の聴講はせず、毎週のように行われるシンポジウムやセミナーなどに参加し、また6月末に台湾で行われた国際仏教学会にてハワイ大学のミシェル・モール氏が企画したパネルに参加し、“‘Rational Religion’ and the Shin Bukkyo [New Buddhism] Movement in Late Meiji Japan 明治後期の新仏教運動における「合理的宗教」”という題で、近代日本の仏教改良運動とそこに見られる「合理性」について発表した。

2011 年秋学期

秋学期にはハーデカ氏の大学院ゼミを聴講することにした。ゼミの題目は“Secularism Beyond the West 非西洋地域における世俗主義”であり、チャールズ・テイラーの『世俗の時代』——テイラーは自らの議論が「西洋」に限定されるものであると明言している

——を読んだ上で、他の世俗主義についての研究を読み合わせ、テイラーらの議論がどこまで非西洋地域において適用され得るのかについて論じるものであった。読書速度も言語運用能力も高度なものが要求され、どれだけついていけていたのか心許ないところはあるが、ゼミとその延長戦——しばしばクイーンズヘッドという大学内のパブで行われた——は良い刺激となった。ちょうどこの時期は、国学院から出版助成を頂戴した拙著の校正作業と並行してのゼミ聴講であり、また派遣の第一の目的と関連して幾つかの学会に参加したりもしたが、忙しくも充実した日々であったことが思い出される。

2012 年春学期

この学期には、ハーデカ氏の神道の講義に加えて、ダン・マクカナン氏の19世紀のユニテリアン・ユニバーサリスト思想という講義と、デビッド・ホール氏のアメリカ宗教史の講義を聴講した。しかしながら、4月に他の大学で発表する機会を二度頂いたため、その準備に時間を取られ、講義の理解が中途半端になってしまったことが心残りである。最初の発表はプリンストン大学の仏教研究ワークショップでのもので、これは以前国学院の日本文化研究所に勤務し、現在同大学の博士課程で学んでいるジョリオン・トーマス氏の力添えによる。次の発表はアマースト大学のアジア言語文明学部でのもので、同大学の教員であるトレント・マクシー氏によって企画されたものであった。発表題目は“Why New Buddhism? Modernity and the Buddhist Reform Movement in Modern Japan なぜ新仏教なのか——近代日本における仏教改良運動と近代性”とし、明治後期の『新仏教』へとつながっていく明治中期以降の日本の仏教改良運動について概観した。討議ではやはり他の地域における仏教伝統との比較が話題となった。

2012 年秋学期

渡米後から滞在中に研究所で一度発表を行うということでハーデカ氏と調整しており、それがこの9月の学期開始直後に設定された。前述したように派遣の目的の一つが日本人留学生についての調査であったため、これについて発表することとし、ハーバード大学のアーカイブにおいて調査を行った。当初は日本における宗教学の成立に大きな役割を果たした岸本能武太（ハーバード大学神学部と大学院に1890年から1894年にかけて在籍）に焦点を合わせるつもりであったが、調べていくうちに岸本と同時期に在学していた小崎成章という人物の存在が判明した（小崎は神学部と大学院に1890年から1893年にかけて在籍）。

この小崎は、1891年6月24日に行われたハーバード大学の卒業式において、神学部から選出されて「Influences Bearing Upon Christian Thought In Japan 日本においてキリスト教思想に影響を与えるもの」という題で卒業演説を行っている。これに留学生が選ばれるのは珍しいことであったようで、この件は当時の新聞記事となって何紙かに報道されていた。この小崎について、現地で見ることができる範囲での日本側の先行研究——ハーバード大学の燕京図書館は北米有数の日本語蔵書を誇っている——ではほとんど言及がなかったが、しかし同時代資料から同志社の二代目総長を務めた小崎弘道の実弟であること、また後に旧制七高で英語教授となることなどがわかった。なお、執筆者は帰国後も引き続き小崎について調査を続けている。

アーカイブとオンライン・データベースでの調査の結果、前述小崎の卒業演説を含めて、小崎や岸本が英文で発表した論説を数編入手することができたので、それらに見られる宗教理解に焦点を合わせて内容を検討し、9月に“Envisioning the Future Religion : Japanese Intellectuals and American Reli-

gious Liberals in the Late 19th Century 将来の宗教の構想——19世紀末における日本の知識人達とアメリカの自由主義的な宗教者達”という発表を研究所で行った。発表後、ハーデカ氏とも相談し、講義の聴講はせずにこの学期は更に調査を進めることとし、10月にはアマースト大学で開催されたアジア学会ニューイングランド支部会でも発表を行った。いずれの発表でも、日本人留学生側の事情に加えて受け入れ側である米国の自由主義的な宗教者達の思惑についても触れ、討議でも興味深い論点であるという話になった。この、より広くは米国宗教史上における日本宗教理解といった論点につながる問題については、今後掘り下げて検討していきたい。

2013 年春学期

1月に前述した東日本大震災デジタルアーカイブとの関係で“Opportunities and Challenges of Participatory Digital Archives: Lessons from the March 11, 2011 Great Eastern Japan Disaster 参加型デジタルアーカイブの活用と課題：2011年3月11日東日本大震災からの教訓”というシンポジウムが開催されることになり、そこに本学の黒崎浩行氏が参加して“Relief Activities by Religious Organizations 宗教団体による救援活動”という題で発表した。

これと関連させて、国学院側からの企画として、研究所において「國學院大學における日本宗教研究の最先端」と題する小規模なワークショップを行うこととなった。目的は、ハーバード周辺の若手日本研究者に国学院における日本研究の状況を知ってもらうというもので、今後のより充実した研究交流につなげていきたいという考えがあった。国学院からの参加者は菅浩二氏・大東敬明氏・黒崎氏に執筆者の四名であり、それぞれ「東日本大震災における宗教者の支援活動と研究者の後方支援」（黒崎氏）、「神道史における仏

教儀礼」(大東氏)、「『国家神道』概念の有効性について——日本の研究の現状から」(菅氏)、「19世紀末米国における日本宗教の提示」(執筆者)という発表を行った。参加者は何らかの日本研究に関わる大学院生が中心であり、発表後に意見交換を行って交流を深めることができた。

おわりに

思い起こせばあっという間の二年間であったが、様々な方面で良い刺激を受けることが

できた。特に、ハーデカ氏のゼミへの参加は大変有益な経験であり、今後の教育・研究に生かしていきたい。また、アーカイブでの日本人留学生についての調査で、小崎成章についての資料を発見したことは想定外の喜びであった。関連資料を未だ十分に検討できていないが、いずれ何らかの形でまとめたいと考えている。

最後に、今回の派遣を支えて頂いた國學院大學の関係者の皆様に感謝の意を記して、この稿を閉じたい。

南フランス出張報告

平藤喜久子

2013年3月1日から31日までの1ヶ月間、南フランスのトゥールーズ・ル・ミライユ大学（Université de Toulouse 2 le Mirail）に招聘教授として滞在をした。ここでは出張報告として大学での講義や滞在中に訪れた宗教施設等を紹介する。



トゥールーズ・ル・ミライユ大学校舎
ここで日本語の講義などが行なわれている

トゥールーズは、フランスの南西部、ミディ＝ピレネーの中心都市である。エアバス社の本社もある工業都市で、近隣のスペインからの移住者も多く、国際色の豊かな街である。そのトゥールーズにあるトゥールーズ・ル・ミライユ大学（日本ではトゥールーズ大学と呼ばれることが多い）は、7万人以上の学生を有するフランスでも屈指の規模を誇る大学である。

このトゥールーズ大学の日本学（section japonais）に、かつて Encyclopedia of Shinto のイントロダクションのフランス語訳を下させた Yves Cadot 氏が教員として勤めておられる。その Cadot 氏から、近

年フランスでは日本のポップカルチャーについて関心を持つ学生が多く、神話や神道への関心も高いため、関連する講義をして欲しいとの依頼があり、今回の招聘となった。滞在中は、次の授業を行なった。

「神道入門」（対象：2年生）

「日本人の結婚式」（対象：2年生）

「学生の宗教意識」（対象：4年生、大学院生）

「占いと日本人」（対象：4年生、大学院生）

「神、神道とポップカルチャー」（対象：全学年）

なお、滞在中、以前に日本文化研究所で共同研究員をして下さっていた Arnaud Brotons 氏の招きにより、エクス＝アン＝プロヴァンスにある Aix-Marseille 大学でも、「神話とポップカルチャー」と題する講義を行なった。

大学での講義は2時間だが、そこには質疑応答の時間も含まれている。この質疑がかなり活発で、依頼にあったように、たしかにフランスでは日本文化への関心が高いということを実感した。

たとえば「神道入門」という神道の基本的な考え方や神社、参拝方法を学ぶ授業では、なぜ手のほかに「口」を清めることが求められているのか。「口」が象徴しているのはなにか。狛犬は獅子なのか、犬なのか（英語では Korean Lion と訳されることが多い）。といった事柄から、神職や巫女になるための条件、就職状況などについて詳しく知りたいと

いう質問もあった。

「日本人の結婚式」については、クリスチャンは少ないのにキリスト教式がもっとも多いという点には関心を抱いたようだが、それよりも、日本人と結婚したときに生じる義務や、その間に生まれた子どもの教育、さらには離婚後の国籍のことなど、結婚式というよりも「日本人との結婚」に関心が高いようであった。ポップカルチャーについては、日本神話に関連するゲーム「大神」の人気の高いことがあらためてわかった。また、妖怪に



関する作品も多く知られており、日本人の神と妖怪についての意識の違いなどに質問が寄せられた。「神道入門」の授業では、希望者に巫女の装束を着てもらおう試みをしたが、予想以上に希望者が多く、とても好評だった。

海外の大学で一回だけではなく、複数回の講義を担当するのは、初めての経験であった。質問というよりも、議論をしたがる学生との授業は、意外な発想に驚いたり、うろたえたりしながら、とても楽しいものであった。

滞在中はトゥールーズの街中はもちろんのこと、近隣の宗教施設についてもできる限り訪問をした。いくつか訪問先を紹介したい。

ピレネーの麓であるトゥールーズは、世界遺産サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路上に位置する。サン＝セルナン大聖堂がその教会で、フランス南部のロマネスク様式を代表する建築となっている。トゥールーズは建築物の多くがオレンジがかった赤茶色をしていることから「バラ色の街」と呼ばれるが、この大聖堂もまさにバラ色をしている。



トゥールーズ、サン＝セルナン大聖堂

奇跡を起こすという「ルルドの泉」で知られるルルドは、トゥールーズから電車で3時間ほどにある。1858年にベルナデットという少女が川の近くの洞窟で薪を拾っていたときに聖母マリアが出現し、そこに水が湧いた。その水を飲んだ人々の病が癒えたと伝えられ、それが奇跡として知られるようになり、カトリックの聖地となった。現在ではその洞窟の上に巨大な聖堂が建てられ、水を飲み、水を浴びるために世界中から人々が訪れている。訪れたときは3月の上旬で、巡礼のハイシーズンではなく、わき水もまだ冷たかったが、水浴の時間には人々の行列ができていた。



教会の右下がマリアが出現しとされるマッサビエルの洞窟

トゥールーズを中心とするフランス南部は、11世紀から13世紀にかけてカタリ派（アルビジョワ派）の信仰が盛んだった。民衆運動であったカタリ派は、禁欲を重視し、カトリックの聖職者の優雅な暮らしを墮落と責めたこともあり、異端と認定され、ローマ教皇によって組織されたアルビジョワ十字軍に攻められた。カタリ派は砦に籠もって戦い、最後に立てこもったモンセギュールが陥落すると、改宗を拒んだ多くの者たちが火刑に処せられたという。今回は、このカタリ派ゆかりの地をいくつかまわることができた。

アルビジョワ派の名前の由来となっているアルビは、十字軍の後、司教が支配する「司教都市」となり、カトリックの偉容を示すような大聖堂が建てられた。2世紀かけて建造された中世ゴシック様式の大聖堂のなかには、見事な最後の審判の壁画がある。



右手奥がアルビの大聖堂



ローマ時代からの城塞都市であるカルカソンヌは、トランカヴェル家の支配下にあった11世紀にカタリ派が根付いた地である。しかしアルビジョワ十字軍によって攻められ、降伏すると、フランス王領となった。現在は「歴史的城塞都市カルカソンヌ」として世界遺産にも登録され、フランスを代表する観光地となっている。悲惨な記憶であるカタリ派は、観光資源となり、土産物屋にはカタリ派関連の本などが多く積まれていた。



カタリ派が立てこもった砦がある地域は Pays cathare（カタリ派の里）と称され、廃墟となった城砦がいまも残っている。ケリビュス、パイルペルテューズ、モンセギュールと3カ所の城砦跡を訪れたが、いずれも切り立った崖のようなところにあり、岩に手をかけながらよじ登るようなところもあった。その内部に100人を超える人々が籠城をしたことも信じがたいが、またそれを下から攻めたという事実もまた信じがたいほどであった。異端とされながら、火刑を恐れずに信じ抜いた人々の強さを感じるとともに、それを許さない「正統」を自認する人々の執拗さについても思いを巡らせる機会となった。



山頂にあるのがモンセギュールの砦



モンセギュール砦の北側。この側から十字軍はよじ登って攻めた。

法王庁が一時おかれたアヴィニョンやサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路「ル・ピュイ」の道のモワサックの修道院付属教会など、ほかにもいくつか興味深い宗教施設を訪れることができた。その写真や動画については今後宗教文化教育の教材として、一部は「世界遺産の宗教文化」のサイトなどで公開していきたい。

このような宗教施設を見学するだけでなく、滞在中には、ローマ教皇の選出選挙であるコンクラーベが行なわれていたが、決まるまでずっと中継を続けるテレビ番組を見て、さらに決定後に教会のミサに参加したりすることをとおし、あらためてフランスにおけるカトリック文化の影響の強さを感じた。

大学での講義だけではなく、このように限られた紙面では書き尽くせないほどの得がたい体験をすることができた。この機会を与えて下さった Cadot 先生と一ヶ月の不在をお許しいただいた日本文化研究所のスタッフの方々にも心より御礼申し上げたい。

南カリフォルニア大学における国際会議

井上順孝

2012年4月27日と28日の両日、南カリフォルニア大学で「公共圏における宗教—日本と世界」(Religion in the Public Sphere: Japan and the World)をテーマとするシンポジウムが開催された。南カリフォルニア大学の日本宗教文化センター(USC Center for Japanese Religions and Culture)と日本学術振興会の共催によるものである。

日本からは他に東京大学の島藪進氏、神戸学院大学の森孝一氏、上智大学のマーク・マリンス氏が招待された。私を含めた4人の演題はそれぞれ次のとおり(講演順)。

島藪 進：“Post 3-11 Religion in Japan”

井上順孝：“Religion in Films and Religious Culture Education in Contemporary Japan”

Mark Mullins：“A Place for Religion in the Public Sphere? Some Postwar Japanese Responses to Secularization”

森 孝一：“Religious and Citizenship Education in Public Schools in Japan: A Comparison with the United States”

私の講演の概要は以下に述べるが、これにコメントを述べる役に当たっていったのは、かつて日本文化研究所に研究員として在籍したトーマス・ジョリオン(Jolyon Thomas)氏であった。また、当時ハーバード大学ライシャワー日本研究所に客員研究員として在籍していた星野靖二氏もボストンから駆けつけ、シンポジウムに参加した。私の発表内容を以下に概略示したい。

戦後の日本において、宗教に関する教育は、それが扱う内容に関して大きな対立を生

んできた。それはとくに宗教情操教育をめぐってである。日本では宗教教育が知識教育、情操教育、宗派教育の3つのカテゴリーで考えられてきた。宗教系の学校における宗教教育はすべてが可能で、公立の学校でも知識教育は問題ない。しかし公立学校で宗教情操教育が行えるかどうかについては、可能であるという立場とそれはなすべきではないという立場が、戦後ずっと対立してきた。

論点は大きく2つあった。1つは宗教情操の名のもとに国家が特定の価値観を強要することへの警戒である。これは戦前の国家神道問題が関係している。もう1つは個々の宗教の価値観とは別に「一般的な宗教情操」というものがあるかどうかをめぐる議論である。もし一般的な宗教情操というものがあるとすれば、それを公立の学校でも教えればよいという主張が生じる。

解決が見出されないまま、とくに中等教育においては宗教についての実際的な教育を避ける傾向が強まった。その結果、伝統的な宗教についての基礎的な知識も乏しくなり、宗教が現代世界で果たしているという認識を得る機会が少なくなってきた。さらにオウム真理教に代表されるような、いわゆる「カルト問題」が社会的に話題になっても、教育の場ではそれを扱える教員がいなくなっている。

つまり歴史的な事実として記憶することはあっても、実際に宗教や宗教文化がそれぞれの国でどのような役割を果たしてきたか、あるいは現代社会でどのような役割をはたしているのかというような視点が大きく欠如するこ

とになった。

しかし、グローバル化や情報化が急速に進行する社会にあっては、宗教についての教育が、こうした状況のままではいけない。そこで宗教情操教育に関して生じた行き詰まりを乗り越え、かつ現代の状況を正面から見すえる視点として提起されたのが、宗教文化教育である。個々の宗教についての基礎的知識を得ることを中心に据えながら、実際の宗教の儀礼や修行の様子を観察したり、教団などを見学したりして、生きた宗教について学び理解する態度を養うものである。

こうした教育が現代社会においても意義については、日本宗教学会と「宗教と社会」学会の委員会が合同で3年にわたって調査・研究を行った。その具体的方法について検討するとともに、国内外の実情も調査した。両学会は2011年1月に設立された宗教文化教育推進センターの連携機関となった。

日本の宗教文化の歴史や特質を理解し、また国外の宗教についての基礎的な知識を得ることが、宗教文化教育にとっては、もっとも基本的なステップの一つとなる。それゆえ、これを具体的に実施するには、どのような方法があるかの検討を継続していかなければならない。教材と教育法を根本的に見直すことが必要であるので、そのためのプロジェクトを実施していることを紹介した。

そのうえで、急速に発展している情報ツールを宗教文化教育にどう取り入れていくべきかを中心に議論を提起した。他の多くの国と同様、日本における学校教育も、次々とイノベーションされる情報ツールと格闘している。それは学生よりも、むしろ教員側の問題だからである。デジタル情報を扱う能力の格差を示すデジタルデバイドの問題は、教員にのしかかっている。

中等教育においても、また高等教育においても、教科書とサブテキストを用いながら板書を中心とする。場合によって写真やテレ

ビ・ビデオを教材として利用する、というのが1990年代までの普通のやり方であった。しかし、21紀にはいつからインターネットの広まり、またそのブロードバンド化、情報機器のモバイル化など、情報環境はいつそう展開し、それは教育の方法に大きな変革を要求している。とりわけ映像の撮影、加工、利用に関する簡便さの飛躍的向上は、それを研究・教育に用いていくことを容易にすると同時に、その扱いについてのリテラシーを教員と学生がともに深めることを求めている。映像が提供する情報は、画像に比べてはるかにリアリティをもっている。教わった側に与えるインパクトもずっと大きいと考えられる。また自作の映像であると、マスメディアが提供する映像に比べて、専門的な観点から提供できるが、その衝撃に対する責任もまた個人が負うことになる。

宗教文化教育においては、国内外のさまざまな宗教現象についての映像を使用することになる。その場合、情報環境の変化が以前とは異なった条件を生み出していることを考慮している。教員と学生との関係に限っても、それは以下の3つの点で新しい方法を要請している。教員と学生との相互関係、教員相互の関係、そしてこの双方におけるグローバルなパースペクティブである。

さまざまなSNSが広まり、モバイル性が高まってくると、情報はあっという間に思わぬ方向へも拡散する。教室で発信された情報も同様である。教育に用いた映像をコピー可能な状態にすると、どのように二次利用されるか想像がつかない。そのような条件を考慮しながら、教育方法を構築していかなければならない。

日本における宗教の位置づけと、日本の宗教研究の特徴は、当然日本独特なものがある。日本では若い世代は、依然として宗教はアブナイと感じる人が多数派である。宗教をもっていることを隠したがる傾向もある。他



会議の様子

方、圧倒的な社会勢力となっている宗教もないので、宗教についての言説はかなり自由である。この日本的な状況から考えるべき宗教文化教育の問題もある。

しかし他方で、他の国とも共通する側面もある。とくに情報化やグローバル化が進行する過程で、自分たちの国における主要な宗教文化だけでなく、外国のさまざまな宗教文化

についての理解を養う必要性は多くの国に共通する課題である。その意味で、現在の日本における宗教文化教育の展開が、国際的にどのようなモデルを提供しているのかも今後考えていきたいという点を、締めくくりとして述べた。

なお会議の前日、マリズ氏、森氏とともにロサンゼルス近郊のメガチャーチを複数見学する機会を得た。非常に発展している教会もあれば、巨大な建物を設立しながら、すでに閉鎖されていた教会もあった。消長の激しいことがうかがえた。また滞在先のホテルの近くにあるカトリック教会の礼拝を見学したが、ヒスパニック系の人たちの姿がけっこう目立った。

個人的にはロサンゼルスを訪れるのは、1981年に日系人の宗教調査をして以来31年ぶりであった。久しぶりに訪れた日本人町などは非常に懐かしかった。



クリスタル・カテドラル（すでに閉鎖されていたメガチャーチ）

北京での日中3か国フォーラム報告

井上順孝

2012年8月31日に北京の国際交流基金北京日本文化センター（SK大廈3階）で、日中米3か国フォーラムがあり、その文化セッションの議長として会議に参加した。このフォーラムは、日中国交40周年記念行事の一つであり、主催は日本企業（中国）研究院、また後援は国際交流基金（Japan foundation）の北京日本文化センターなどであった。

会議は在華日本国大使館特命全権公使の堀之内秀久の挨拶によって始まり、政治セッション、経済セッション、文化セッションの3つのセッションが行われた。私が議長を務めた文化セッションでは、上海日本人学校運営委員会委員長で芝浦工業大学の前理事長である小暮剛一氏が「東アジアにおける国際教育の課題」として発表した。中国からは中国美術館副館長の胡偉氏が、「20世紀以降の中国画と日本画」として発表があった。

コメントに次いでフロアを交えての討論がなされた。文化セッションは残念ながらアメリカからの発表者がおらず、日中のみの発表となった。発表のテーマが美術と教育という異なった分野にまたがったので、やや焦点を絞りにくかった。

また討議のなかで私が宗教文化の問題についてコメントし、それについての意見も出されて議論は多岐にわたった。最後のセッションということもあって、政治セッション、経済セッションにおける議論に関わる意見も出された。

政治・経済と文化とは本来切り離すことができないものであり、こうしたフォーラムで政治・経済・文化の相互の有機的関係につ

て議論する時間ともう少し必要だと感じられた。

翌日、北京市内にあるラマ教の擁和宮と孔子廟を見学した。宗教文化教育の教材とすべく写真撮影等を行った。



擁和宮



孔子廟

なお、この会議出席と調査は科研費基盤研究（B）宗教文化教育の教材に関する総合研究」によるものである。

ベトナム調査報告

井上順孝

「デジタルミュージアムの運営と関連分野への展開」のプロジェクト遂行の一環として、2013年2月17日より22日まで、ベトナムのホーチミン市、及びタイニン省でベトナムの宗教文化に関する調査を実施した。

18日はタイニン省に車で赴き、ベトナム土着の宗教であるカオダイ教の本部を訪問した。「カオダイ教」は漢字で表現すると「高台教」であるが、正式には大道三期普度教という。1926年にレ・ヴァン・チュンを指導者として設立された。現在はタイニン省を中心に200万人以上の信者がいるとされている。

儀礼は男女分かれてなされ、繰り返し祈禱を行う。儀礼の間は本部の正面は通行が禁止される。

教会の正面には天眼と呼ばれる大きな左目が青色の大きな球に描かれている。これはカオダイを象徴している。

礼拝の様子は見学者も中で見ることができる。興味深いのは、はいるときは男女別々の入り口がもうけられているのであるが、中にはいってしまうと、男女が分けられているわけではないことである。

タイニン省にはカオダイ教の支部の建物をあちこちでみかけた。外観が似たようなつくりになっているので、すぐそれと分かる。

19日には、ホーチミン市内のカトリック寺院、仏教寺院の永厳寺を訪問し、信者の礼拝の様子などを撮影した。

仏教寺院では生きものを放生して供養するという光景が見られた。雀のような小鳥が籠にいっぱい入れてあり、それを参拝者が買っ

てから放つのである。亀が用いて同様のことをやっている寺院もあった。これにより功德が得られるという信仰である。ベトナムの仏教は南部に一部上座仏教の寺院があるが、大半が大乗仏教である。ベトナムはかつて漢字を使用していた時代があり、中国宗教の影響を強く受けているからである。

ホーチミン市の郊外にある霊山仏石寺も車で見学にでかけた。ここはちょうど日本の浅草のような雰囲気もあって、人々の日常生活に溶け込んだ信仰のあり方を感じ取ることができた。いろいろな仏像の中に、観音像があった。この像にはピンクの衣が着せられており、これに触るとご利益があると考えられていて、参拝者がひっきりなしに衣で手や顔などをぬぐっていた。当然のことながら、やがて衣は黒ずんでくるのだが、ときおり真新しい衣に着せ替えていた。

20日は、ホーチミン市内の博物館を見学したが、ベトナム戦争がベトナム宗教に与えた影響についての資料もあった。

21日は、ホーチミン市内のヒンドゥー教寺院とモスクを訪問し、それぞれの施設の管理にたずさわっている人に設立の経緯を聞く機会を得た。また礼拝の様子、施設等について撮影を行った。

ヒンドゥー教寺院は、それほど大きくはないが、一般の人も自由に参拝できる。寺院を管理しているらしい女性にいくつか質問をしたが、気軽に答えてもらった。

モスクは200~300人程度はお祈りできそうな大きさであった。男性が礼拝する部屋と女性が礼拝する部屋が別々になっていた。数



カオダイ教本部



カオダイ教の礼拝の様子



ホーチミン市内のモスク



仏教寺院

人のムスリムがすわっていたが、礼拝しているというよりは休息しているという感じであった。ムスリムは礼拝の前に身を清めることになっている。このモスクの前には、そのためのプールのような設備もあった。

訪れた時期はちょうど旧暦での新年（テト）が終わったばかりのときであった。その名残りの飾りなどが町中でいくつか見られたが、日程の都合でテトの様子そのものが見ら

れなかったのが非常に残念である。

なお現地では本学の大学院に留学生として在籍していたファム・レ・ハイ・イエンさんに通訳をお願いした。イエンさんは、日本の民間信仰とくに祖霊信仰と、ベトナムの民間信仰の比較研究に関心を持っている学生であったので、非常に丁寧な説明を受けることができた。

日本文化研究所・研究開発推進機構と私

遠藤 潤

私は、この4月に研究開発推進機構から神道文化学部へ異動になり、学部での研究・教育を主たる仕事とすることとなりました。この機会に「日本文化研究所」との関わりについて何か文章を記すようにというお話を機構長・研究所長である井上先生からいただきました。二種の「日本文化研究所」、すなわち、研究開発推進機構の前身である日本文化研究所、また、現在研究開発推進機構内に機関として設置されている日本文化研究所の二つに関わってきた者として、きわめて個人的な思い出しか書くことはできませんが、ここに一文を記します。

私が旧制度下の日本文化研究所の兼任講師となったのは1995（平成7）年4月である。井上先生からお声をかけていただいたことのであった。それ以前、『神道事典』のいくつかの項目を執筆させていただき、また井上先生が開いていた神仏関係研究会に出席させていただいていたが、まさか研究所に呼んでいただけたとは思っていなかったため、とても驚いた記憶がある。

当時の國學院大學は渋谷再開発の前で、若木エリアには鉄筋コンクリートの校舎や旧図書館が並び、神殿前には噴水があったがすでに水が出ることはなかったかと思う。若木エリアで、当時の建物で現在でも残っているのは神殿と百周年記念館のみである。

常磐松エリアには何棟かの建物が立ち、その中でも最も高い建物は6階建の常磐松2号館で、その6階のフロア全体が日本文化研究所であった。

その頃の研究所では専任の先生を含めて、複数の人で一つの研究室を使用することになっており、私は入所初年は井上先生の部屋であった第4研究室で、翌年から第3研究室で机と棚を使用させていただけることとなった。

入所の直前まで大学院生だった自分にとって、研究機関で棚と机を使用できるというのはとてもうれしかった。また、仕事時間の大半は、共同スペースであるセミナー室の一部に設けられていたPCのスペースで過ごしていた。ここでは別の研究室の人たちと顔をあわせる機会も多く、先生方や先輩若手研究者からの耳学問はとても楽しかった。

担当したプロジェクトは「神道人物総覧の編集・刊行」で、やがて刊行物の名称は『神道関係人物研究文献目録』と決定されて、その編集・刊行のプロジェクトとなった。

このプロジェクトでは、自分は阪本先生とともに国学関係の人物を担当するとともに、全体の連絡係となった。阪本先生のもとで国学者について調べ記事を書くというのは、自分にとって身の丈を大きく越えた仕事であったが、日本文化研究所がすでに刊行していた『和学者総覧』や先行の辞事典の記事から出発して、自分の力の及ぶ限り論文を捜索するなどして、何とか記事を書いた。この文献目録に収められた国学関係者は、おおよそ200人程度であったかと思う。記事の内容は、基本的に研究文献の目録が中心で、人物の略歴の紹介はわずか数行だったが、この数行のためにいろいろと苦労した。生没年月日が典拠によって異なっていたり、そもそも先行の文

献に典拠が示されていなかったりして、そうした基礎事実を確認するのに、予想以上の時間と手間がかかった。とはいえ、最初のうちは比較的時間の余裕があったので、こういう作業も楽しく、もしかすると自分にはこうした地味なことが合っていたのかもしれない。この作業の中で、人物の生没年月日など基本的な事実はできるだけ正確にすべきこと、また、論文でいろいろな事柄を記すときに典拠は明確にしておくことが大切だと思い知り、後から調べる人のためにも、自分の行動規範とすべきだと考えるようになった。学位論文をもとに2008年に刊行した拙著『平田国学と近世社会』には典拠を示した年表を付してあるが、それはこのような日本文化研究所の研究プロジェクトで学んだことを、自分なりに試行してみたものである。

このような作業に役立ったのは、日本文化研究所のプロジェクトのために集められた本のつまった研究所の図書室であり、ここはかけだしのポストドクであった自分には本当に勉強になった。神道・国学や宗教に関して基本的に何を読んでおかなければならないのか、図書室の本のラインナップは、無言のうちにその内容を示していた。それほど大きな図書室ではなかったが、神道・国学や宗教の研究をするために頻繁に使う必読文献は揃えられていて、出入りして棚を見ているうちに学んだことは大きかった。

2000年の『神道関係人物研究文献目録』のプロジェクト終了とともに、私は日本文化研究所を退かせていただくこととなった。博士論文の執筆など、自分の研究に集中する期間を作ろうと考えたためでもある。

ところが、2002年秋のCOEプログラム採択とともに、井上先生からお声をかけていただき、再び日本文化研究所での仕事に従事できることとなった。2003年春から日本文化研究所の助手として、COEプログラムおよび研究所のプロジェクトに参加することと

なった。COEプログラムのうち、井上先生をグループリーダーとする第3グループでは、神道・日本文化国際シンポジウムの実施や神道事典の英訳などが行われた。このうち、『神道事典』の英訳では、平藤さんとともに私は訳者からの質問に答える担当となった。この仕事は今から振り返っても強い印象を残している。

『神道事典』の英訳には世界各地の英語話者が参加していたが、インターネットによる一種の掲示板システムが採用されて、訳者が翻訳する際に生じた疑問はこの掲示板に投稿され、それに対して平藤さんや私など日本人スタッフが質問に答える形態をとっていた。また、研究所にもヘイヴンズ先生や非常勤のネイティブの翻訳スタッフがおり、こうした人たちからの質問にも日本人スタッフが答える体制となっていた。

海外から掲示板を通じて送られる質問は、各地の時差もあって、ときには千本ノックさながらのものとなった。日本の夜中はある地域ではまったくの作業時間で、朝、研究所に出勤してみると、掲示板に質問や意見がどっさりたまっているという日も少なくなかった。「世界各地から24時間まんべんなく質問が寄せられる」というのはあまりの誇張であるが、しかし、気分としてはそんなふうに感じる局面もあった。ただ、どんな質問でも答えなければならないという意味で、神道の基礎知識に関するジェネラリストを志向せねばならず、また英訳の場面で初めて明らかになるさまざまな論点があり、神道について広く勉強するまたとない機会となった。

機構内の研究機関としての日本文化研究所では、国際交流・学術情報発信部門と神道・国学研究部門の2部門が立てられ、私は主として神道・国学研究部門の研究事業に従事することとなった。また、伝統文化リサーチセンターでは、皇典講究所・國學院の学術資産に関する研究事業に参加することとなり、大

学院時代に東大の史料調査で接していた宮地直一に、今度は國學院所蔵の史料調査を通じて「再会」することとなった。

機構発足前後は、建物としては、常磐松エリアの本格的再開発の時期でもあった。学術メディアセンターの建設のために常磐松2号館が取り壊されることになって、(旧)日本文化研究所は、若木エリアにまだ部分的に残されていた本館の4階に移った。本館の4階の部屋は、もとは大教室がいくつかあったところで、渋谷再開発に伴う移動のなかで、大教室を改装してスポーツ身体関係の先生方が研究室として使っており、さらにその後日本文化研究所が入ったのであった。学術メディアセンター完成までの過渡的な措置であり、各研究室は大教室を本棚で区切っただけといういかにも仮設的なたたずまいであったが、自分には何だか好ましい不思議な浮遊感を感じさせるものでもあった。常磐松2号館から他の部署も含めて一斉に退去したときには、各フロアにいろいろなものが残されていて、当時の研究所の何人かで各階を回って、電源タップやスタンドなど使える備品をかき集め、それらがこの本館時代の設備のそれなりの部分を支えた。

ここの冷房はフロア全体を一括で冷やす大掛かりなもので、冷房好きの某同僚と冷房嫌いの私との間では、夏のあいだずっと、冷房温度をめぐる熾烈な戦いが繰り返されていた。私が朝高めに温度を設定すると、彼がいつの間にか温度をひどく下げ、また私が彼のすきをみて温度を上げる、限りない応酬がくり返されていたのである。『日本文化研究所五十年誌』は、そのような環境のもとで編集された。

COE終了後の2007年4月、それまでの日本文化研究所は研究開発推進機構に改組転換され、この機構には、共同利用機関として、研究開発推進センター、学術資料館(現・学

術資料センター)、校史・学術資産研究センターとともに、日本文化研究所という名称を継承した研究機関が設置された。また、研究開発推進機構には、「國學院大學21世紀研究教育計画」の具体的事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」を推進するために、伝統文化リサーチセンターが設置され、この事業は平成19年度の文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業に選定された。

学術メディアセンターが完成し、研究開発推進機構の各機関がこの場所に移ってからは、おおよそ現在のような環境となった。最新の建物のなかに教員の研究室や共同研究室が置かれることとなり、本館4階からの環境の変化の大きさには戸惑ったが、やがて充実した図書館の上に「棲んでいる」ことのありがたさを噛みしめることとなった。研究開発推進機構は多くの機関からなり、(旧)日本文化研究所と比べると、その規模は人数の面でも大きくなった。

組織や施設、人員などが充実した研究開発推進機構では、平成24年3月にはオープン・リサーチ・センター整備事業の事業期間も終了し、現在また変化のときを迎えているように思える。機構や日本文化研究所が今後どのような組織になっていくのか私が云々すべきことではないが、自分がこれまで体験してきたことからささやかな希望を申し上げれば、研究開発推進機構や日本文化研究所は、これからも若手研究者が自分の大学院では経験できないことを経験できる場であってほしいと思う。規模の大きい研究プロジェクトへの参加、専門が異なる先生方や若手研究者との出会いなど、ふつうにはなかなか得られないものがここにはある。これまでこのような環境を作り上げ育ててこられた先輩の先生方に心から感謝するとともに、今後もそのような場が國學院に存在しつづけるよう、自分も微力ながらつとめたいと考えている。

宗教の境界線—学生に対する意識調査から

井上順孝

はじめに

現代日本人の宗教を論じる際に、宗教を信じている割合、ないしは信仰をもつ割合に関する世論調査の類がしばしば用いられる。ここ20年くらいは、その割合はほぼ20%と30%の間である。これを根拠に逆に宗教を信じない人は7割以上と表現されたりもする。

だが、「あなたは宗教を信じていますか?」とか「あなたは信仰をもっていますか?」といった問いに対し、同じような時期に聞かれたのであれば、人はつねに同じ答えをするのであろうか。たとえば問うた相手や状況によって本当のことを言う、言わないという違いはないのだろうか。日本のように宗教という言葉自体が必ずしもいい意味ではない社会であると、実際には特定の宗教を信じている、あるいは信仰をもっているということを「隠す」という局面も考えうる。相手がどの程度真剣に問うているかによっても、答が異なる可能性があるだろう。

同じ内容の質問であるにもかかわらず、同一人物の回答に違いが生じうる場合を想定して、その違いを本論では「回答のブレ」と表現しておく。回答のブレは無記名のアンケート調査の場合にも起こりうる。対面状況でなされる質問ではなくても、そもそも誰が作成した質問項目か、どのような目的の調査か、アンケート全体がどのような質問からなるか、といったことが回答に影響を与える可能性があるからである。

一般的にアンケート調査の質問内容は、大きく分けるとその人のいわば固定的事実を問うものと、その人の感想、見解、意見といったものを問うものがある。回答者の属性に関する質問、すなわち年齢、性別、学歴、出身地などといったものは固定的事実を問うものに含まれる。固定的事実を問う質問に対する答えのブレは、回答者が故意に事実と異なる答えを選んだり、記載したりするのでなければ、基本的にきわめて少ないと考えるべきである。

他方、ある政党を支持するかとか、サッカーが好きか、桜の花は好きかといったような質問は、ある事柄に対するその人の感想、見解、意見といったものを問うものである。これらもそのときどきのその人に関する事実と言え事実とみなしうる面があるにしても、回答内容は短期間でも変わりうるもので、固定的事実とは言いがたい。また質問の仕方によって肯定か否定が変わることさえあるのは、調査経験者にはよく知られたことである。短期間で変わりうるというのは、今日ある政党を支持していても、何かのきっかけで明日支持しなくなるかもしれないというような場合を指す。質問の仕方が影響する例は、「桜の花が好きですか?」と言われて「ハイ」と答える人が、「次の花のうち、最も好きな花を選んでください」と聞かれて、桜ではなく菊を選ぶような場合である。「サッカーがとても好きですか?」と「サッカーが好きですか?」でも、答えが「ハイ」となる割合が若干変わりうる。

では信仰の有無を聞く問いは、固定的事実を問うものに属するのか。それとも感想、見解、意見などを問うものに属するのか。少なくとも現代日本人を対象とした調査に限るな

ら、基本的には後者に含めた方がよさそうである。この問いは「〇〇寺の檀家ですか」あるいは「〇〇教団の会員となっていますか」という類の問いとは少し異なる。信仰の有無に関する問いへの回答が、自らの考えや行為への自己認知に依存しているからである。たとえば、「仏壇に手を合わせるのは自分の家の習慣だ」と思っていた人が、「仏壇に手を合わせるのは信仰をもっていることになるのだ」というふうに認知の仕方が変わった場合、自らの信仰について問われたときの回答が異なる可能性が出てくるからである。

見解や意見の類には回答のブレが付きものにしても、信仰の有無に関する問いには、さらに信仰という概念そのものが、現代日本ではかなりの曖昧さがあるということが介在してくる。概念につきまとう同様の曖昧さは、「あなたは幸せですか?」「あなたは日本を愛していますか?」などといった問にも共通してある。問われている概念をどう考えるかは、人によってかなり異なるからである。幸せ、愛といった言葉は通常の会話や文章などでは頻繁に使われるが、これらが具体的には何を指しているかはたいてい棚上げにされている。

信仰の有無の間には、アンケート質問の全体がもっているコンテキストが重要である。これも幸せや愛にもある程度あてはまるが、現代日本において宗教や信仰を問うときに生じる特有のコンテキストがある。幸せや愛という概念が否定的な響きをもつことはまずないが、信仰や宗教はそうとは限らない。場合によってはかなり否定的ニュアンスを含みうる。日本はイスラーム世界などとは違って、信仰や宗教をもつことが人間にとって当然であるという社会ではない。のちに具体的に数値を示すが、学生たちにとっても「宗教はアブナイ」という感覚は少なくない。そうであれば、アンケートへの回答者が自分の現在の状況に対し、それが「信仰をもっている」と言えるのかそうでないのかを判断するに際して、アンケート全体のコンテキストに左右されて回答するということが十分考えられるのである。

質問紙を用いた無記名のアンケート調査の際に、自分の信仰や宗教に関わる回答のズレはどれくらいの幅がありうるのだろうか。またそのずれはどのような要因によってもたらされるのだろうか。10 数年にわたって実施された学生に対する調査結果、及び関連する 2 つの別の調査結果を合わせることで考察を試みる。

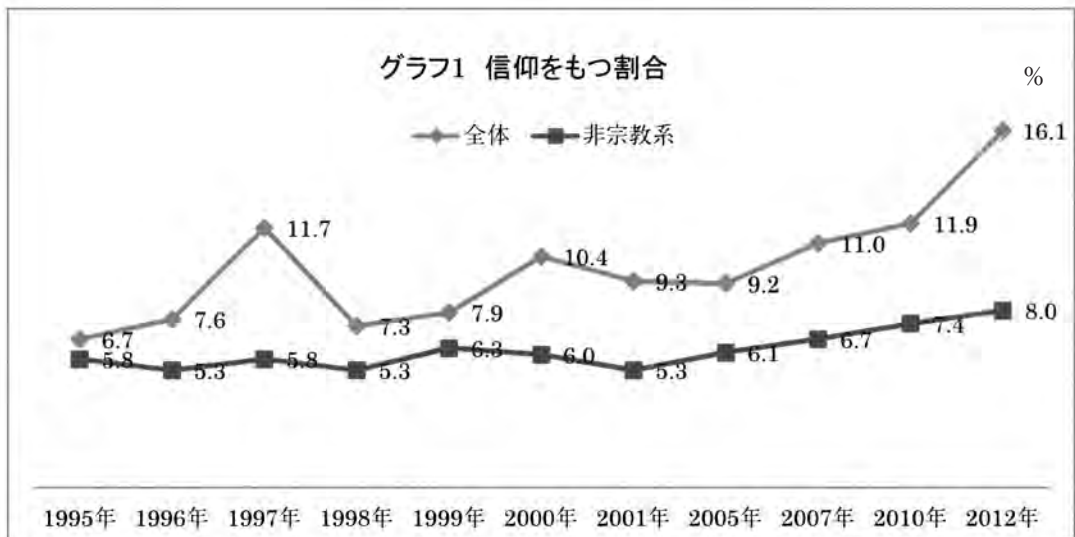
1. 学生に対するアンケート調査に見られた数値の違い

まずとりあげるのは、国学院大学日本文化研究所と「宗教と社会」学会・意識調査プロジェクトが合同して実施し、1995 年から 2012 年までに 11 回を数える学生意識調査である(以下「意識調査」と略)¹⁾。

このアンケート調査では、宗教にどの程度関心があるかという質問を毎回設定している。回答の選択肢は、次の 4 つである。

1. 現在、信仰をもっている
2. 信仰はもっていないが、宗教に関心がある
3. 信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない
4. 信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない

この質問に対し、「1. 現在、信仰をもっている」を選んだ学生の割合は、非宗教系の大学に通う学生のみで集計すると、1990 年代後半から 2000 年にかけては 5～6% 台を推移していた。ところが 2005 年以降少しづつであるが増加傾向が明らかになり、2012 年の調査では 8.0% に達した。2000 年代にはいって、信仰をもつ学生は増える傾向にある。(グラフ 1 参照)



この数値の変化をオウム真理教事件との関係で解釈することも可能である。つまりオウム真理教による地下鉄サリン事件の起こった1995年から数年間は信仰をもつ学生の割合はあまり高くなく、しかもさほど変化はなかった。けれども、21世紀にはいり事件をあまりリアルに受け止めていない世代が大学生になるとともに、少しずつ信仰をもつ学生の割合が増えたということである。この解釈はこれだけでは説得力が弱いのであるが、事件前の1992年に行った国学院大学日本文化研究所の宗教教育プロジェクトによる別の調査²では信仰をもつ学生の割合が95年の倍近かったことや、95年以降の調査で、宗教への印象とオウム真理教による事件との関係について質問したいくつかの項目の回答結果を踏まえると、それなりの説得力を有する³。

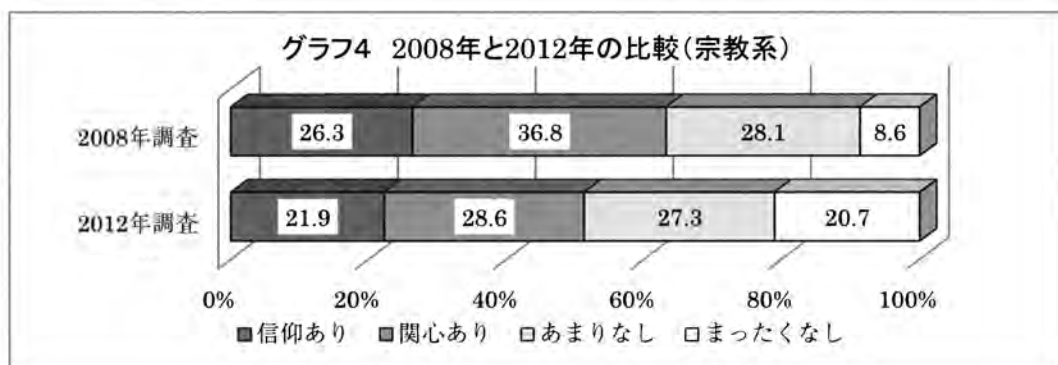
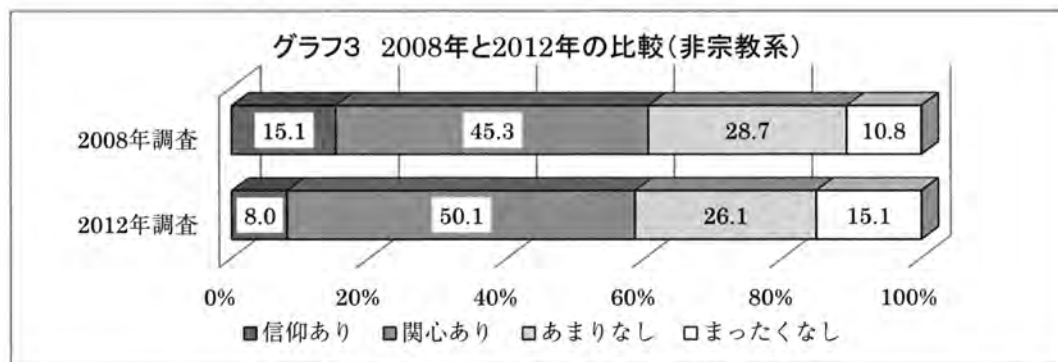
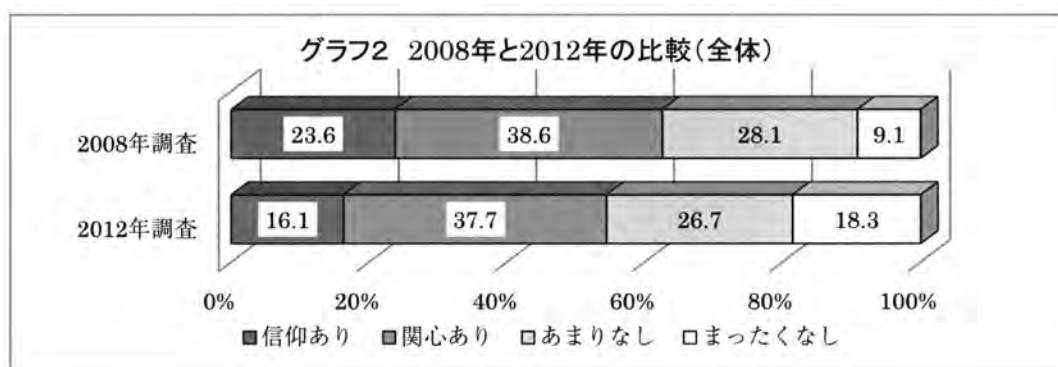
しかし、ここで議論するのは、この間の数値の変化が何によって生じたかではなく、回答のブレを示す数値に関してである。この意識調査とは少し異なった目的をもって実施した2008年の調査（宗教文化教育に関する学生の意識調査）における同様の内容の質問では、数値がこの一連の調査の傾向と大きく異なっている。同じ質問と同じ回答の選択肢であったのに、なぜ2008年の調査で出てきた数値が意識調査の数値の傾向から大きく外れるものとなったかである。

2008年の調査は平成20年度科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表者 大正大学教授・星野英紀）による研究の一環として行われたものであった（以下「科研調査」と略）⁴。このアンケートでは、「意識調査」と同様の質問と回答の選択肢を用意したにもかかわらず、「1. 現在、信仰をもっている」を選んだ学生が非宗教系大学でも15.1%に達したのである。ちなみに宗教系大学を含めた全体では23.6%となり、これも「意識調査」で最も多かった2012年の16.1%よりずっと高い数値であった。

「信仰をもっている」と回答した学生の割合が「意識調査」においては比較的安定した数値をとっているのに対し、その間に実施された2008年の「科研調査」の数値だけが大きな違いを示したということである。これは何に起因するのであろうか。その後実施された2010年と2012年の結果を見るなら、2008年頃から学生の意識が急に変わったと考えるのは

妥当ではない。また調査対象とした学生が所属する大学が、この年だけ宗教に親和性をもつ大学が多かったのでもない。「意識調査」は毎回30～40程度の大学で実施してきたが、実施した大学は毎回少しずつ異なる。常連の大学とそうでない大学がある。したがってそれから生じる数値の揺れということも念頭に置く必要があるが、実際の数値に大きな差はなかった。

2008年の調査も36大学が対象であり、調査メンバーは「科研調査」の調査メンバーとくに大きく変わっているわけでもない。ではなぜこのように2008年だけ突出した数値になったのか。一つ考えられる理由は調査時期である。「意識調査」は毎回4月を中心に行われる。遅いものでも6月である。



いずれも回答者は1年生が最も多く、だいたい4割台を占める。一応4月～6月とはなっているが、大半は初回や2回目など講義の早い段階でなされている。担当教員の影響がまだ少ない時期と考えられる。これに対し「科研調査」は2008年の10月から12月にかけて行わ

れた。受講生は仮にその教員が講義において宗教について触れたならば、その教員の視点なり見解から影響を受ける度合いが高くなると推測できる。つまり大半が4月に実施された調査と、10月～12月に実施された調査という、時期がもたらした差という要因である。講義の内容によっては受講した学生の宗教に対するものの見方がかなり変わる可能性があるのは明らかである⁵。

だが、講義内容が宗教観に影響をもたらしたとしても、それが信仰の有無にまで大きく影響するとは考えにくい⁶。調査を実施した教員の過半数が多少なりとも宗教に関するテーマを扱っているのは、両調査とも同じである。「科研調査」の方は、理科系の学生の意見も聞きたいということで、自然科学系の授業を担当している教員にも調査を依頼した。つまり「科研調査」の方が教員からの宗教的影響はむしろ小さくなる可能性すらある。1つ可能性があるとするれば、実際には信仰をもっていた学生が、学期初めの4月の調査段階では、信仰をもっているとは答えず、いわば信仰をもっていることを隠したのに、10月くらいになると教員の宗教に対するスタンスも了解できて、隠さなかったというようなケースである。こうした例も実際あったが⁷、それが数%にのぼるとも考えにくい。

調査時期の違いだけで、これほどの違いをもたらすとは考えにくいとすると、他の可能性として、「意識調査」と「科研調査」の質問項目全体の構成が明らかに異なるという点がある。意識調査では、生まれた年、性別、卒業した高校の別（公立、私立、宗教系など）、大学・学部の名称、住居形態、家の宗教を聞いたあとに、質問項目の比較的早い段階で回答者の信仰について質問している。そして具体的な信仰を選択肢から選ぶようになっている。神道、仏教、キリスト教、新宗教という区分の他、仏教の主な宗派名、キリスト教ならカトリックとプロテスタントの別など、また新宗教なら創価学会や天理教など主だった教団名が例示されている。つまり具体的な宗教名を連想させる質問になっている。

最初にこうして信仰について質問したあとに、宗教行為や宗教的事柄への意見、宗教に関する時事的な話題などについての質問が続いている。つまり、回答者の立場に立てば、宗教に関するいろいろな事柄を連想し、自分の経験と照らし合わせるなどの心的な営みをする以前に、自身の信仰の有無が問われ、しかも具体的な宗教名、教派・宗派名などが前提とした信仰について問われるのである。

これに対し、「科研調査」は信仰に関する質問は最後である。そして具体的な宗教名は例示されていないし、記載することも求めている。そしてこの質問以前に宗教文化についてのさまざまな意見を求めている。それは具体的な宗教名を前提としたものというより、一般的な宗教文化についての問いかけである。たとえば質問3では次の5つの事柄について「1. はい」または「2. いいえ」で答えるようになっている。

1. 外国人に日本の宗教のことを少しは説明できるようになりたいと思いますか
2. 宗教によっては、食べられない食べ物があることを知りたいと思いますか
3. 国際情勢を深く理解するために、もう少し宗教の知識を増やしたいと思いますか
4. 宗教が関係した事件や紛争の背景を知りたいと思いますか
5. 国ごとの宗教による人々の生活の違いを知りたいと思いますか

この質問の回答の選択肢の1は、日本の宗教を相対的に見る見方が養われていることを前提としたものである。選択肢の2以下で、宗教と食べ物、国際情勢、事件や紛争、生活との関係が提示されている。宗教が日本のみならず、国外のさまざまな出来事に深くかかわって

いることを想起させる内容である。

続く質問の4では、「宗教文化」に関する講義として次の11の選択肢があげられ、このうち大学の講義で履修してみたいものを複数回答で答えるようになっている。

1. 日本の伝統的宗教のしきたり
2. 新宗教と呼ばれている近代以降の新しい宗教の活動
3. キリスト教徒の生活
4. 暮らしの中の仏教
5. ムスリム（イスラム教徒）の戒律と実生活
6. 宗教が文学・音楽・美術・建築・映画などの文化に与えた影響
7. 宗教と観光・文化遺産との関わり
8. 世界の神話
9. 社会の出来事や国際問題と宗教との関わり
10. 現代のカルト問題
11. 生き方や死後の世界などについての、それぞれの宗教の教えの違い

この選択肢から、宗教文化に日本や世界の宗教の他に、文学・音楽・美術・建築・映画、また観光・文化遺産や世界の神話と宗教との関わりが提示されている。この質問によって宗教文化が日常生活のさまざまな面に関わっていることが、いっそう想起されやすくなる。

さらに次の質問では「次の職業のうち、日本や世界の「宗教文化」についての基礎知識があった方がいいと思う職業」を7つの選択肢から複数回答で選ぶようになっている。

1. 小学校、中学校、高校などの教員
2. 官庁や市役所などに勤める公務員
3. ホテル、旅行者など観光関連の職業の人
4. 国外勤務が多いことが予想される会社員
5. 宗教関係（神職、僧侶、牧師、教団職員など）
6. 病院や福祉関連施設に勤める人
7. テレビ局・新聞社・出版社などマスコミ関係の人

この質問もまた、宗教文化の知識がさまざまな職業に関係しうることを想起させる。宗教文化は現代社会において、大きな比重をもつことを実感する学生も出てくると推測される。こうした質問内容が、回答者に宗教ないし宗教文化を考えていく上での一つのフレームを提供したことになる。質問によってにわかにな宗教観が変わるとか、宗教文化への理解が変わるということではなく、宗教が日常生活のさまざまな局面にかかわっており、自分たちにも接点が数多くあることを回答者に連想させるということである。

ここで意識調査と科研調査のそれぞれがもつ質問のフレームの違いを整理してみる。意識調査では信仰に関する質問は比較的初めの方に提示され、しかも具体的な宗教名・教派名等が質問紙に例示してあるので、組織的な宗教を連想させる仕組みになっている。他方、科研調査は信仰に関する質問は最後に配置され、それまでの間は宗教というより広く宗教文化について想起させる内容となっている。

これが回答のブレに影響した可能性がある。ここで回答のズレを考えるポイントは最終的には一つかもしれない。それは自分が信仰をもつかどうかの判断をなすにあたっての「宗教の境界線」が、どこに存在するかである。神社の氏子総代である、ある寺の檀家総代であ

る、あるキリスト教会や新宗教のメンバーであるということをもって「信仰がある」という理解があろう。毎年欠かさず氏神社に参拝する、先祖の供養を熱心に行う、座禅が好きで定期的に通うお寺がある、聖書に惹かれその教えに沿うような生活を心がけている、こうしたことをもって「信仰がある」というふうに考える人もいるかもしれない。

考えなくてはならないのは、各人がもつそうした信仰のとらえ方、つまり宗教の境界線がブレのないものか、あるいは問われるコンテキストによって変わりうるものかである。

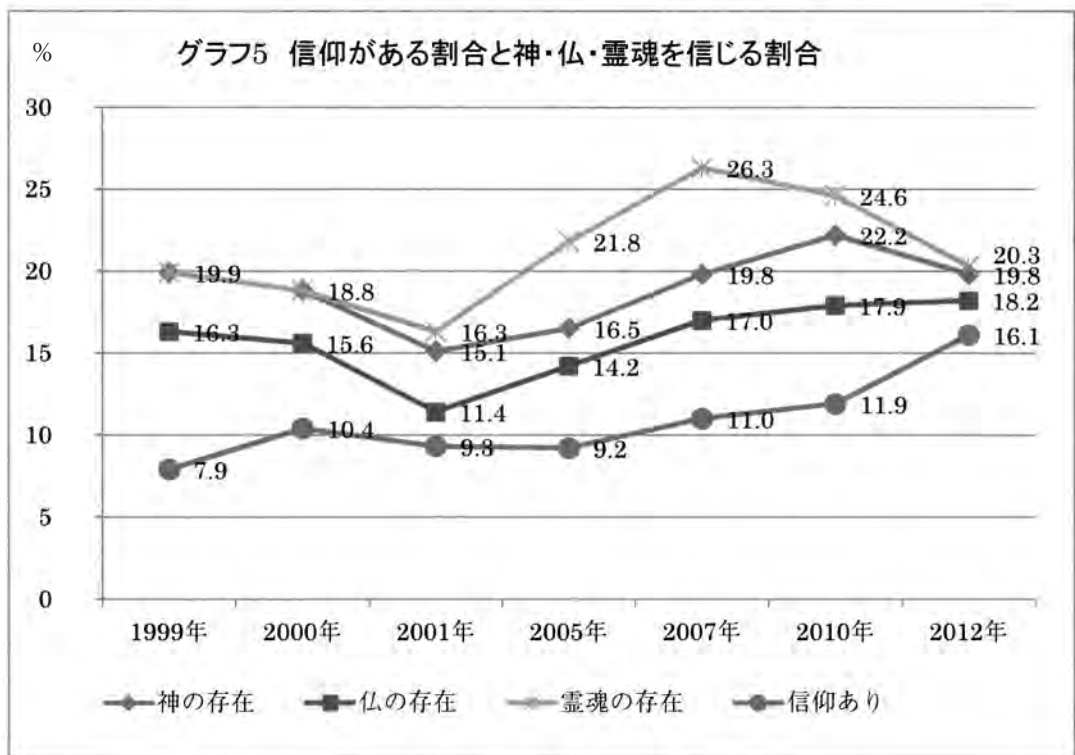
2. 信仰心と神仏の存在を信することとの違い

意識調査の結果をみていくと、問われるコンテキストということに関して、さらに検討すべき数値が出てくる。それは信仰があると答える割合よりも、神仏の存在などを信じると答える割合が常に高いということである。このことと回答のブレとの関係である。

そこで信仰の有無に関わる回答と神仏の存在を信じるかどうかの質問への回答をクロスしてみる。意識調査では1999年の第5回調査から引き続いて7回にわたり、神、仏、靈魂のそれぞれの存在について、信じるかどうかを質問している。回答の選択肢は、「1. 信じる、2. ありうと思う、3. あまり信じない、4. 否定する」の4つである。

「1. 信じる」を選んだ割合は、いずれの調査においても靈魂、神、仏の順に多い。なお、意外かもしれないが、神・仏・靈魂を信じる割合は、信仰の有無における違いと比べて、宗教系の大学と非宗教系の大学との間でたいした違いがない。そこで全体の数値で比較してみる⁸。

グラフ5を見ると分かりやすいが、神仏や靈魂を信じる割合と信仰ありと答える割合が比較的近い年といくぶん開きがある年がある。またその差は靈魂を信じる割合との間で最も変



動が激しい。霊魂を信じる割合と信仰をもつ割合とを比べると、霊魂を信じる割合が、1999年、2005年、2007年、2010年では倍以上である。これが誤差の範囲なのか、それとも調査年に何かその差を大きくさせるような社会的出来事があったのかは判断できない。ただ霊魂の存在を信じることは後に示すように、信仰だけでなくサブカルチャーとの関わりが深いと推測されるので、神仏の存在を信じる割合と比べて変動が大きくなっても、ある程度は説明がつけられる。2000年代になって復活したテレビの霊能者番組の影響、同じ頃高まったスピリチュアルブームやパワースポットブームなどとの関係も想定されるからである。

信仰は何と関係をもつのであろうか。宗教への関心の度合いについての回答を、神・仏・霊魂の存在を信じるかの回答とにそれぞれクロスさせてみる。開きが最も大きかった2007年と最も小さかった2012年においてクロスさせた結果がグラフ6とグラフ11までに示してある。なお、いずれもどちらかに無回答であったものは省いてある。

2007年調査でも2012年調査でも、信仰がある者が神の存在を信じる割合は宗教にまったく関心がない者が神を信じる割合のおおよそ2倍である。そして「信仰はもっていないが、宗教に関心がある」「信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない」「信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない」は、つまり信仰をもっていないわけだが、彼らの間でも神の存在を信じる者は2割近くいることになる。ただし、ここで留意しなければならないのは、この場合にキリスト教的な神と神道的な神の双方がはいっているということである。どちらであるかは、どの宗教を信じていると答えたかによってある程度類推できる。

仏の存在を信じる割合はもっと顕著な結果になった。信仰がある者が仏の存在を信じる割合は宗教にまったく関心がない者が仏の存在を信じる割合のおおよそ4倍以上である。神の存在を信じることより、仏の存在を信じるの方が、信仰をもつと答えることと相関性が高いということを意味する。

霊魂の存在はどうか。グラフ10とグラフ11に示したように、信仰をもつものとそうでないものとの差が、神の存在とに比べてもわずかだが小さい。これは、霊魂の存在を信じるかどうかは、神や仏の存在を信じるかどうかよりも、信仰の有無との関係がより弱いということを意味する。

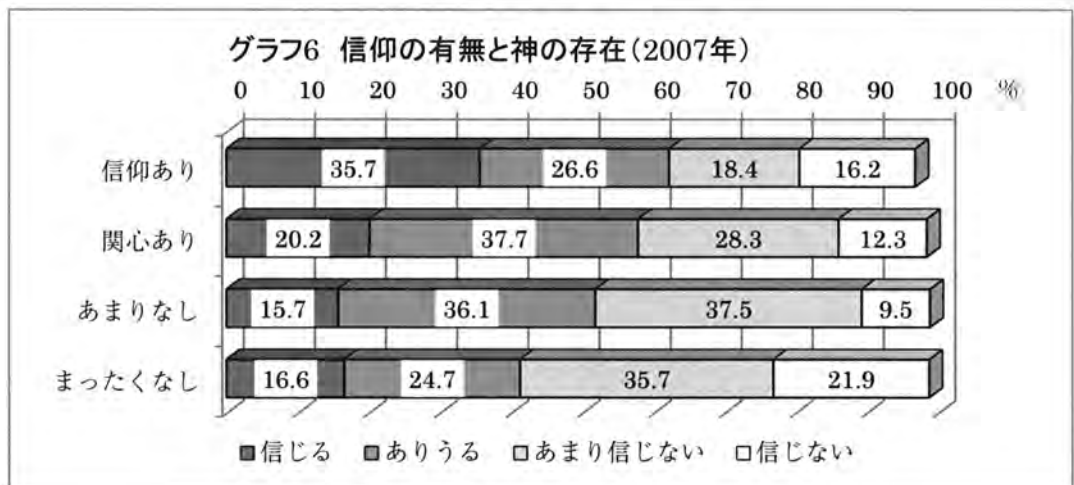
信仰をもっていると答えなくても、神の存在を信じていると答える人は2割近くおり、信仰をもっていなくても仏の存在を信じていると答える人も10数%いる。同じく霊魂を信じていると答える人は2割前後である。ここで明らかなのは、神を信じる、あるいは仏を信じるということと、信仰をもつということとはきれいに重なるわけではないということである。信仰をもつということを、特定の宗教組織（教会、教団、教派、宗派など）への所属としてとらえる人もいるので、こういう違いが出てくるのは当然である。

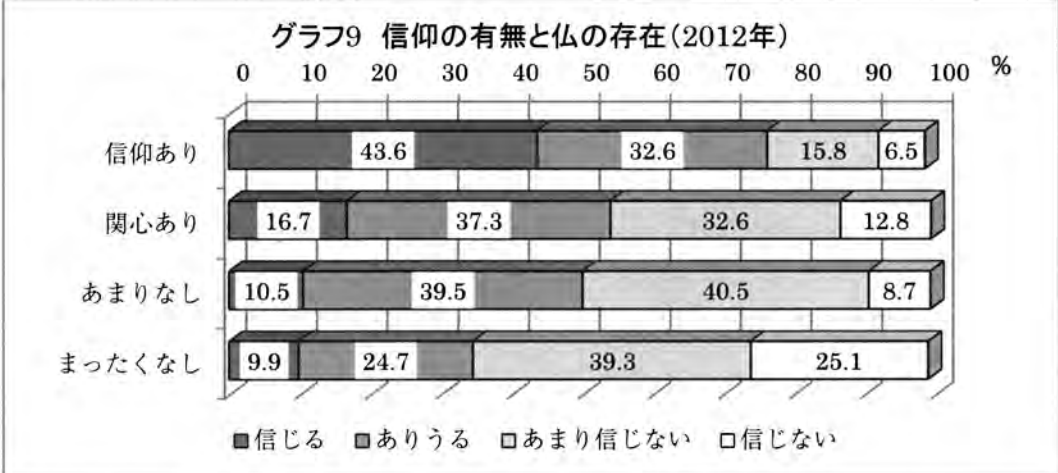
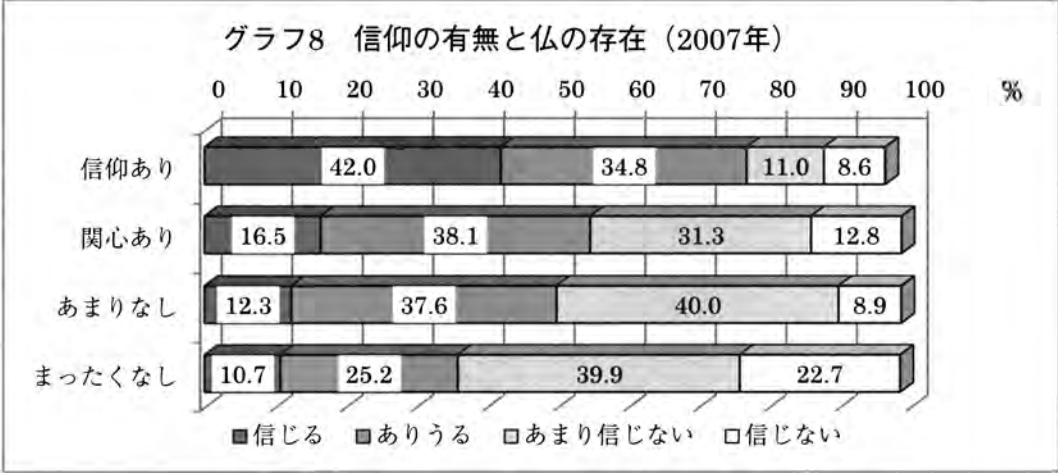
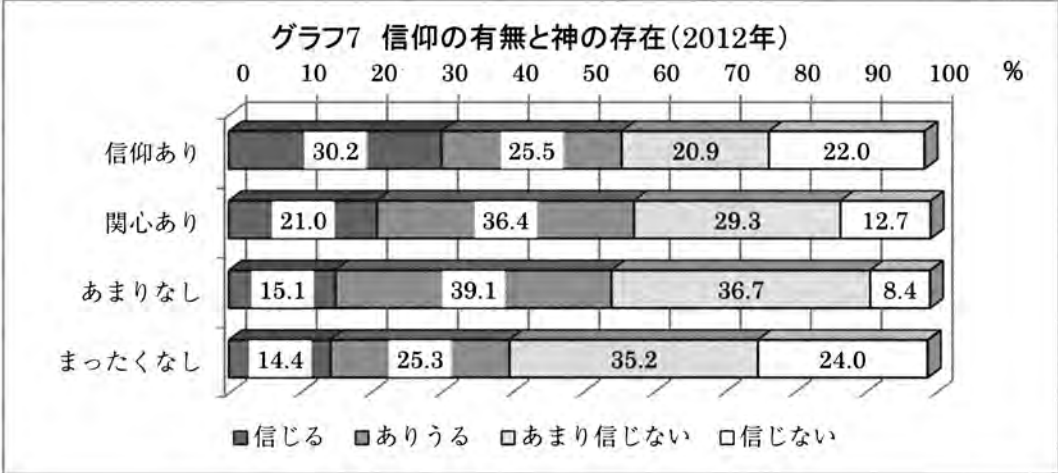
では信仰があるのに、神や仏の存在を信じないと答えた人はいるのか。2012年の意識調査では信仰があるのに神の存在を信じないと答えた人はグラフ7にあるように22.0%である。グラフには示していないが、信仰があるのに、神の存在も仏の存在も信じないという人の割合を調べてみると、さすがに3.9%とかなり減る。さらに、神仏の存在も、霊魂の存在も信じないけれども、信仰はもっているという人を調べると2.6%になる。この人たちは独特の宗教についての境界線をもっていると考えることも必要かもしれないが、あまり真面目に回答しなかった人もいる可能性を考えると、この数値を過大評価しない方がいいのかもしれない。

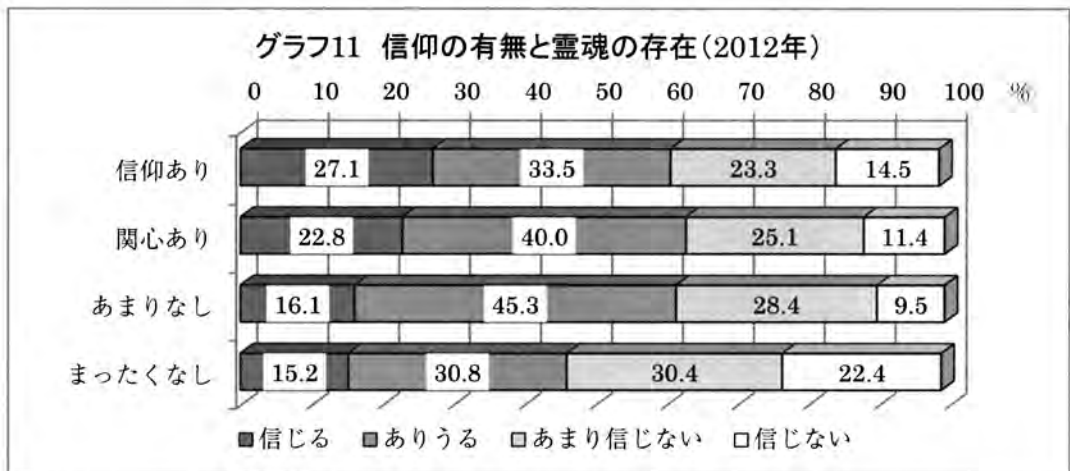
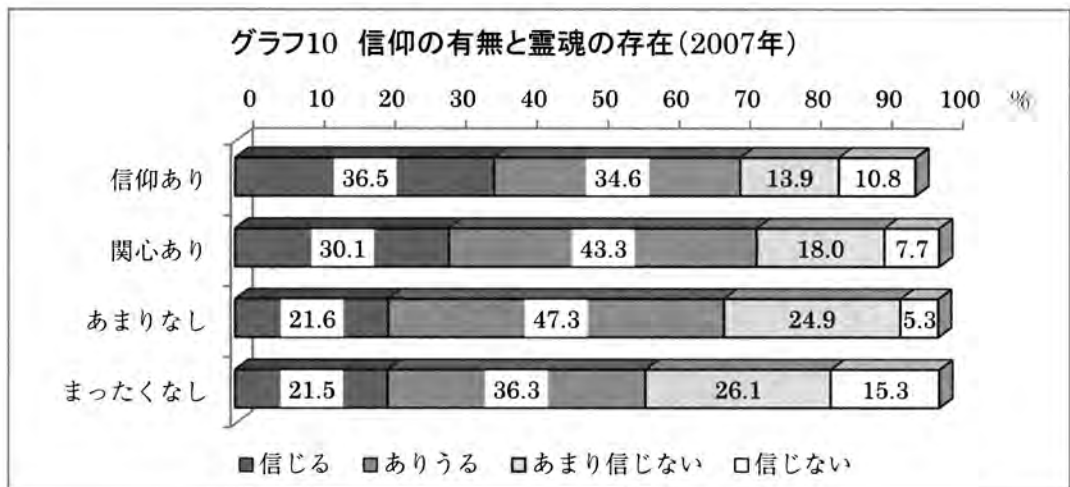
ただ、信仰があるのに、神の存在を「信じない」と回答した人に、「あまり信じない」と回答した人を加えた割合になると42.9%に上る。同様に神仏ともに「信じない」、または「あまり信じない」と答えた人を調べると15.2%になる。これに靈魂の存在まで「信じない」あるいは「あまり信じない」と答えた人の割合が11.2%である。神仏の存在を信じることと信仰をもっているとの間には、やはり少なからぬ乖離がある。

これについては神仏などの存在を信じるという表現自体が問題とされるべきかもしれない。というのも、神をどのようにとらえるかという問いでは、心の中にあるものという回答がもっとも多いのである。神を人格神的なイメージでとらえていない場合は、神の存在という表現に違和感を抱く可能性もある。これを判断する材料として、1999年の調査結果を見てみる。1999年は特別に1万人以上の回答者を得た年である。信仰をもつ人も865人になった。この年の結果では信仰をもつと答えながら、神の存在を「あまり信じない」または「否定する」と答えた人は286人、つまりから33.1%であった。この年はさらに信じる信じないにかかわらず神のイメージが次の1～6のどれに当たるかも質問した。右側の数字は、この286人のうち、1～6のそれぞれを選んだ割合である。「人の心の中にあるもの」と答えた人が最も多い。これは信仰をもっていると言いながら神の存在に否定的な人の中では、神を「人の心の中にあるもの」とイメージしている人が最も多いということを示している。したがって、神の存在という表現自体がこうした一見矛盾と見える回答を導いた理由の1つという推測がある程度は成り立つ。

	%
1. 宇宙を創造したり支配したりする唯一の存在	16.1
2. いろいろな役割や力をもつ複数の存在	5.6
3. いのちやエネルギーの源になるような存在	5.9
4. 宇宙の法則そのもの	5.6
5. 人の心の中にあるもの	32.5
6. 特定のイメージがわからない	28.0







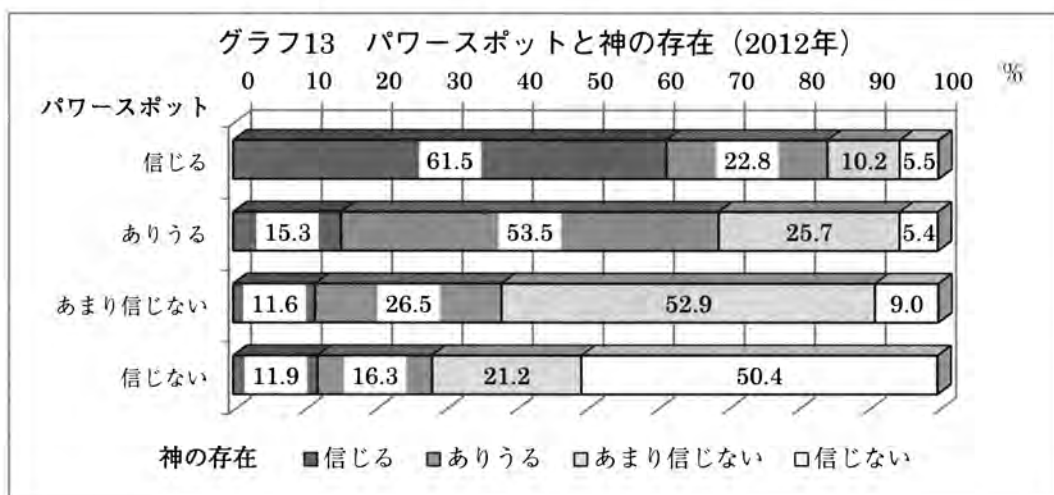
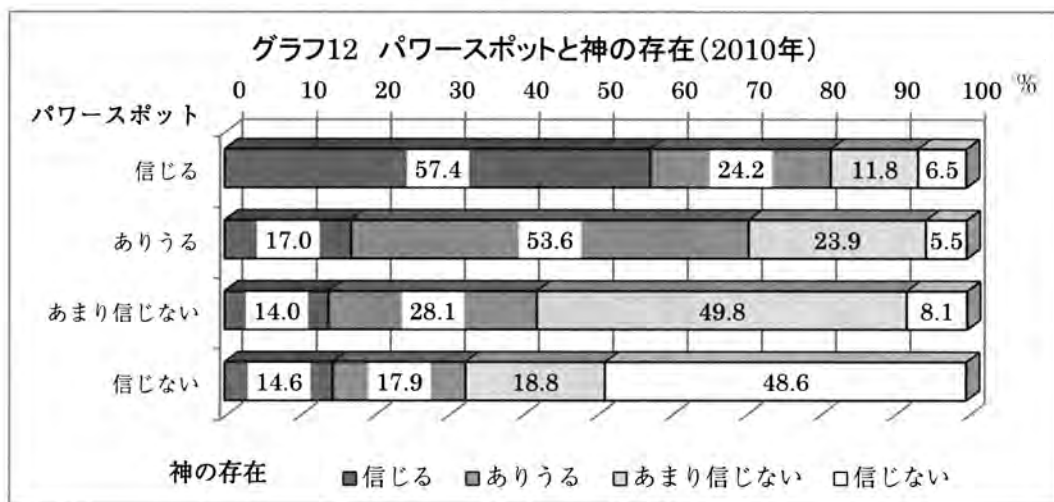
その人がもつ宗教の境界線は、アンケートの質問に提示された概念群、あるいは表現にとまどい、その場の判断で、境界線の内側に組み込むか、外側に追いやるかをしている場合があると考えられる。こうした問題も回答のブレに当然関わってくると考えなければならない。

さて、靈魂の存在を信じるかどうかは、むしろサブカルチャーとの関係が深い可能性がある。そこでサブカルチャーに関わりの深いパワースポットに関する質問を神の存在、靈魂の存在を信じる割合とクロスさせてみる。パワースポットについては、2010年と2012年に質問項目をもうけている。神・仏・靈魂の存在を信じるかどうかを質問に加えて、パワースポットを信じるかどうかも質問してあるからである。

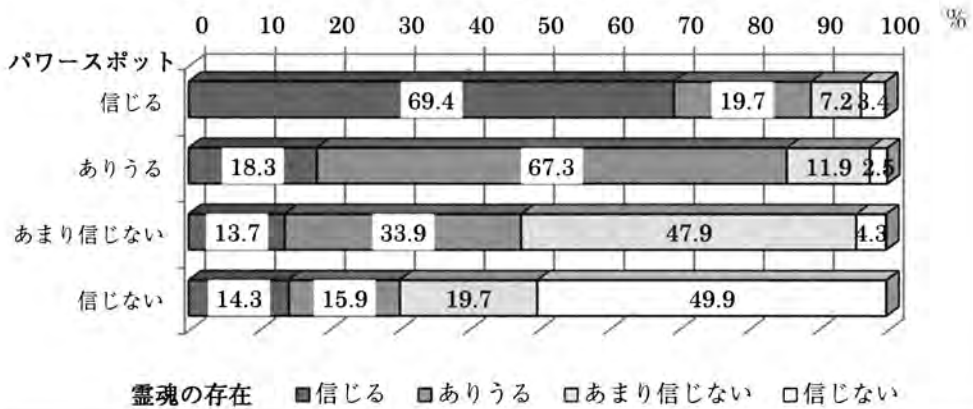
その結果がグラフ12～17に示してある。これを見ると、パワースポットの存在を信じることと、靈魂の存在を信じることの間には強い相関関係があることが明らかである。次いで神の存在を信じることとの間の相関関係が強い。仏の存在を信じることとの相関関係がもっとも弱い。パワースポット・ブームでは寺院よりも神社を訪れる人が多く、神社に行っても社殿よりも周囲の石や樹木、井戸などに関心が強いとされるが、その傾向とも合致する回答結果である。

2010年調査でも、2012年調査でもパワースポットの存在を信じる人の7割近くは靈魂の存在を信じている。逆にパワースポットの存在を信じない人は、約半数が靈魂の存在も信じていない。肯定から否定への4つの回答の選択肢それぞれが互いに強い相関性があることが分かる⁹。

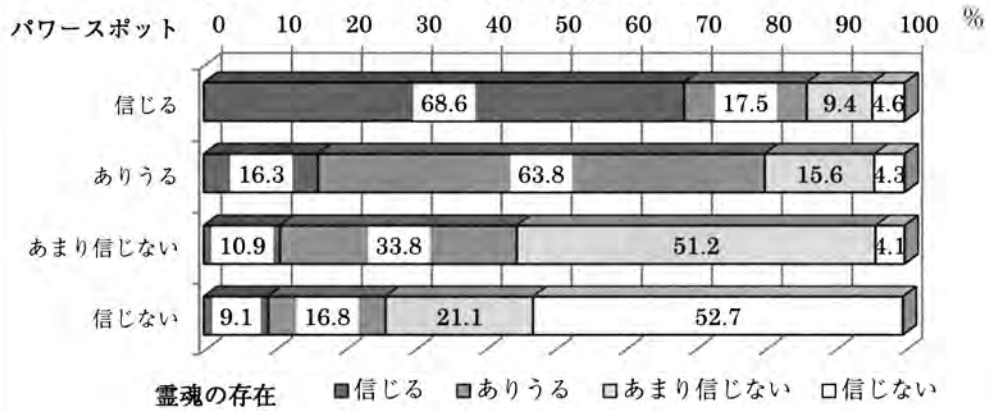
はっきりと信仰をもっていると回答しなくても、神仏あるいは靈魂の存在を信じる人が1割ないし2割程度存在する。その中でも靈魂を信じるという人はサブカルチャー的な関心と親和性が深い。これらの人たちを無宗教とか無信仰というカテゴリーに置くのはいささかためらいを感じる。当人たちも自分たちの意識や行動のあり方が、一般に宗教あるいは信仰と呼ばれているものとどれほど乖離しているのか、定めがたいのかもしれない。そのような自己認知の曖昧さもまた回答のブレに関わりをもっていると考えられる。



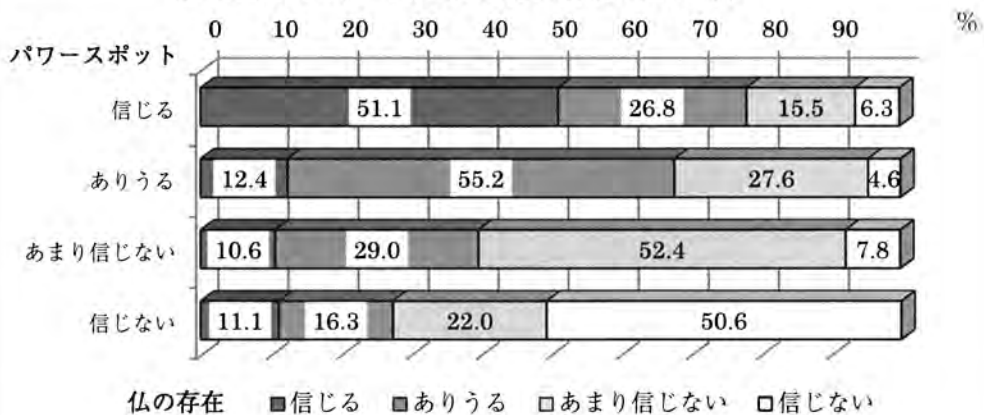
グラフ14 パワースポットと靈魂の存在(2010年)

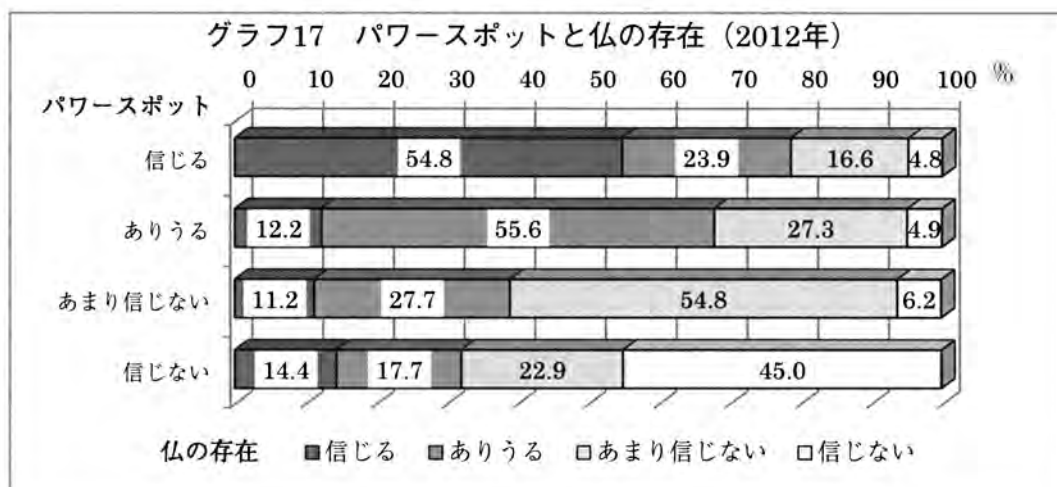


グラフ15 パワースポットと靈魂(2012年)



グラフ16 パワースポットと仏の存在(2010年)





3. 宗教に関わる評価の微妙さ

アンケート調査における信仰の有無に関する回答のブレという問題は、宗教に関わる評価と関連をもっている。どのような視点から宗教についての意識なり行動なりが問われているかの感じ取りが、回答結果に影響を及ぼす可能性があるということである。宗教に関わる事柄への評価の微妙さは、意識調査における別の項目から検討してみたい。

2001年を除いて2012年の調査に至るまで毎回質問した項目がある。それは「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ」という意見に対してどう思うかというものである。回答の選択肢は次の4つである。

1. そう思う
2. どちらかといえばそう思う
3. どちらかといえばそう思わない
4. そう思わない

「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を肯定派とすると、肯定派の割合は、21世紀になっておおむね増加傾向にある。(グラフ18参照) これは先ほど示した信仰があると答える割合の21世紀にはいつてからの増加傾向と呼応している。

他方で、若い世代で「宗教はアブナイ」といった表現がよく聞かれることを踏まえて、「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある」という意見についてどう思うかを聞いた。回答の選択肢は上記と同じである。この質問項目は1998年から6回設けている。

宗教はアブナイと思う人の割合は少しずつだが減少傾向にある。(グラフ19参照) その中で2005年はアブナイと思う人の数値が前後と比べやや高い。これにも実は質問項目の構成が関係している可能性がある。というのは、2005年以外は、この二つの質問は宗教に関するさまざまな意見を聞く中に含まれている。たとえば最初にこの二つを同時に聞いた1998年調査では、次の6つの意見に対してどう思うかを質問してある。

1. 「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ」
2. 「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある」
3. 「先祖は自分たちを見守ってくれている」

4. 「高校までにもっと宗教についての基礎知識を教えるべきだ」
5. 「いろいろな宗教があるが結局は同じことを目標にしている
6. 「自分が日本人であることに誇りをもちたい」

また 2012 年調査では次の 6 つであった。

1. 「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要なだ。」
2. 「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある。」
3. 「宗教的トラブルがあったときに相談できるような公的な窓口の設置が必要だ。」
4. 「特定の宗教団体が特定の政党を支持するのはよくない。」
5. 「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ。」
6. 「宗教を信じると、心のよりどころができる。」

つまり宗教に対する肯定的な意見と否定的な意見とが混在している。これに対して 2005 年の調査では、宗教に対する肯定的な質問と否定的な質問とが分けられたような構成となっている。宗教が必要と思うかは、次のような質問群の中にあった。

1. 「どんなに科学が発達しても宗教は人間に必要なだ」
2. 「先祖は自分たちを見守ってくれている」
3. 「いろいろな宗教があるが結局は同じことを目標にしている」
4. 「宗教を信じると、心のよりどころができる。」
5. 「靈感・霊視というものはある」

これらはだいたい宗教を肯定的に捉えた意見をならべてあり、それに対する賛否を問うている。他方、宗教はアブナイかどうかは、次のような質問群の中に置かれていた。

1. 「高校までにもっと世界の宗教についての基礎知識を教えるべきだ。」
2. 「宗教がらみの事件が多いので、宗教には警戒している。」
3. 「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある。」
4. 「特定の宗教団体が特定の政党を支持するのはよくない」
5. 「宗教的トラブルがあったときに相談できるような公的な窓口の設置が必要だ」

最初の質問は例外だが、2～5は、宗教に関するマイナスイメージを連想させるような質問内容である。これによって、アブナイと答える人が他の年に比べて少し増えた可能性がある。これはもはや証明はできないが、回答のブレというここでの中心テーマからすると、こうした質問の構成なりコンテキストなりも考慮すべきであろう。

さて、「どんなに科学が発達しても宗教は人間に必要なだ」という意見への肯定派が 5～6 割であるが、他方で「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある。」という意見への肯定派も 5～6 割である。この 2 つはそれぞれ宗教に対する肯定的な評価と否定的な評価である。肯定的評価と否定的評価がともに過半数を占めたということになるので、両者の相関性を確認してみたい。この 2 つの質問を同時に行った初めての調査は 1998 年のものであり、最近の 2012 年の調査でも合わせて行った。そこで 1998 年と 2012 年の分で、この 2 つの質問への結果をクロス集計してみる。(グラフ 20 と 21 を参照)

また絶対値で比較した方が分布が分かりやすいので、グラフ 22 には、2012 年の結果をそれぞれの人数で示した。

なおグラフ中の記号は次のとおりである。

++ : そう思う

- +： どちらかといえばそう思う
- ： どちらかといえばそう思わない
- ： そう思わない

1998年の調査でも2012年の調査でも、「宗教は必要だ」と思う人は「宗教はアブナイ」と思う割合がやや少ない。他方、「宗教は必要だ」とは思わない人は、「宗教はアブナイ」と思う割合が、他の3つを選択した人に比べてはっきりと多いことが分かる。宗教は必要だと思ふ人は宗教はアブナイとは思わない傾向にあるということで、これはごく自然な結果と言える。

しかし、「宗教は必要だ」と思っているも、宗教はアブナイと思う、あるいはどちらかといえばそう思う人の割合は、1998年も2012年も過半数に達する。つまり科学が発達しても人間に宗教は必要だと思ふ判断と、宗教はアブナイと思ふ判断とはかなりの割合で同居していることを意味する。グラフ22に示したのはそれぞれのカテゴリーの回答者の絶対数であるが、これで見ると、どちらかと言えば宗教は必要と思ひ、同時にどちらかと言えば宗教はアブナイと思ふ人がもっとも多い。

他方で、宗教は必要だと思わないが、アブナイとも思わないというグループもある。この回答のパターンはとりたてて矛盾しているわけではない。宗教に否定的な見方をしていなくても、宗教は必要とは思わないという判断は十分ありうるからである。しかしこのような回答者は比較的少数である。

宗教は必要だと思ふ人が宗教はアブナイとは思っていないかたり、逆に宗教は必要だと思わない人が宗教はアブナイと思っていたりするの、ある意味自然であり、矛盾とは言えない。この観点から、2つの質問への回答をマトリックスにしてみると、次のように整理できる。

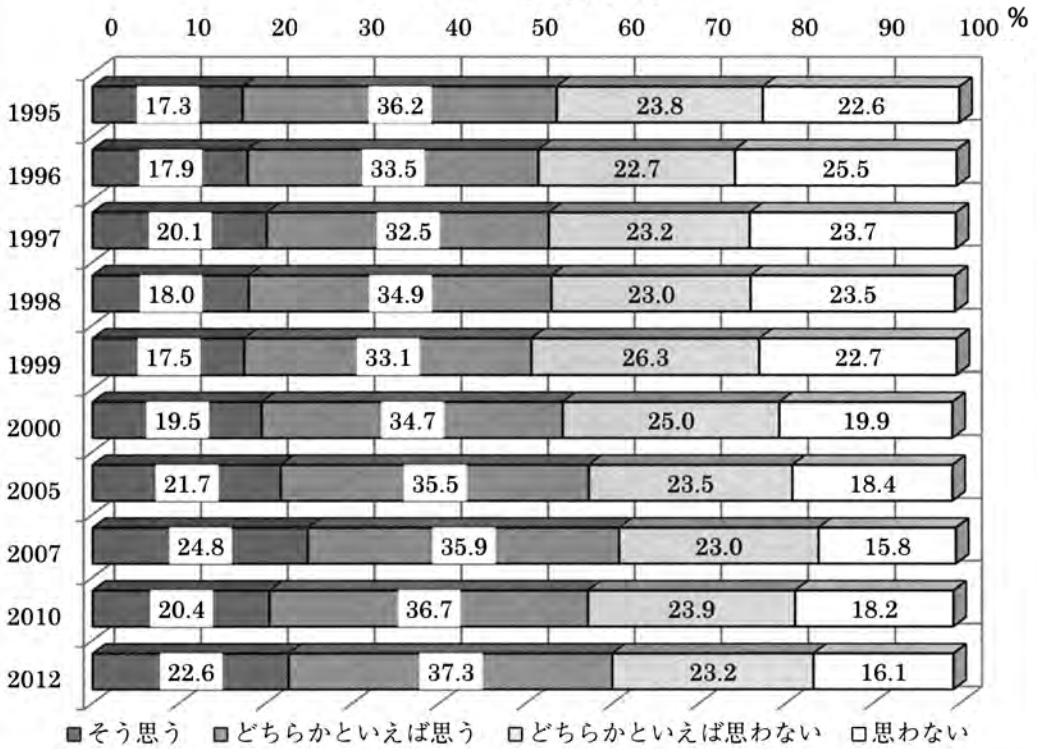
	宗教は必要	宗教は必要でない
宗教はアブナイ	やや矛盾	自然
宗教はアブナくない	自然	ありうる

宗教は必要と思ひながら、アブナイとも思ふ人の存在が注目される。「そう思う」という回答と「どちらかというところそう思う」を肯定派、「どちらかというところそう思わない」と「そう思わない」を否定派としてみる。そうすると宗教は必要だということへの肯定派の50%が、宗教はアブナイということの肯定派になる。

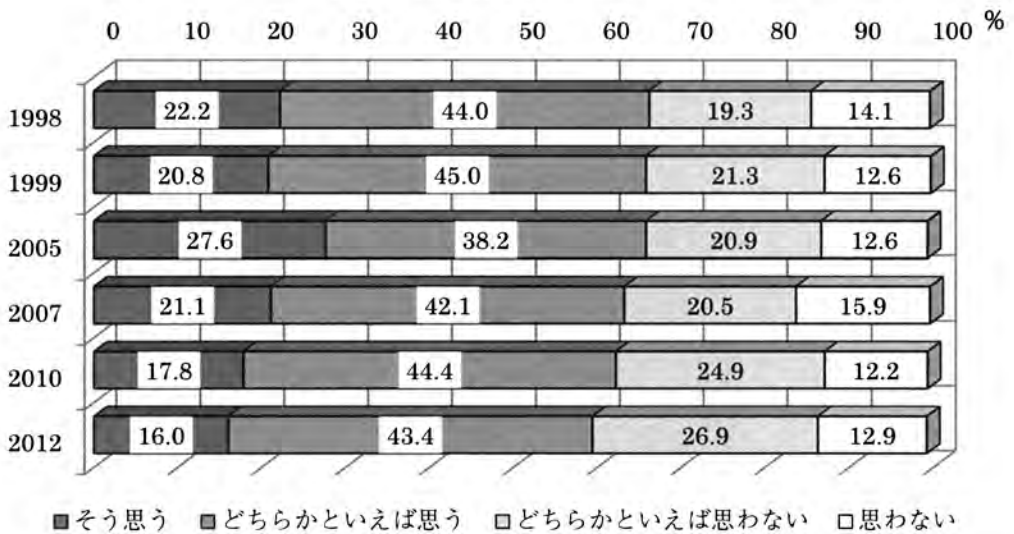
質問のコンテキストは重要で、必要かどうかは科学の発達という文脈での宗教の存在意義を問うている。アブナイかどうかは、むしろ直接的にその人の宗教への判断を問うている。それぞれの質問において回答者が思い浮かべた「宗教」が同じ内容であったかどうかは知る由がない。しかし表現の次元に限るなら、前者は社会における科学と宗教の関係とコンテキストを提示しており、後者はより個人的な体験ないし感想を求める。

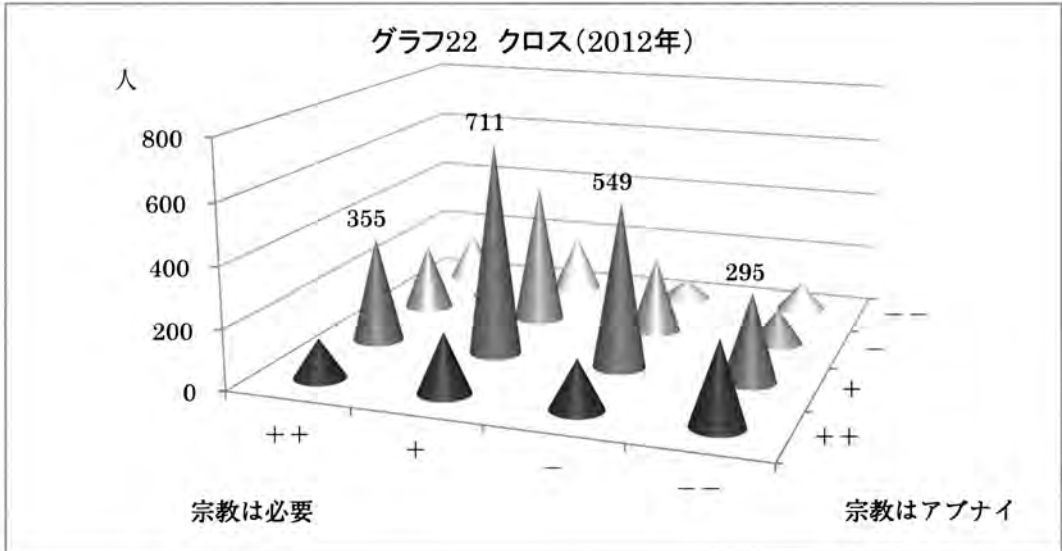
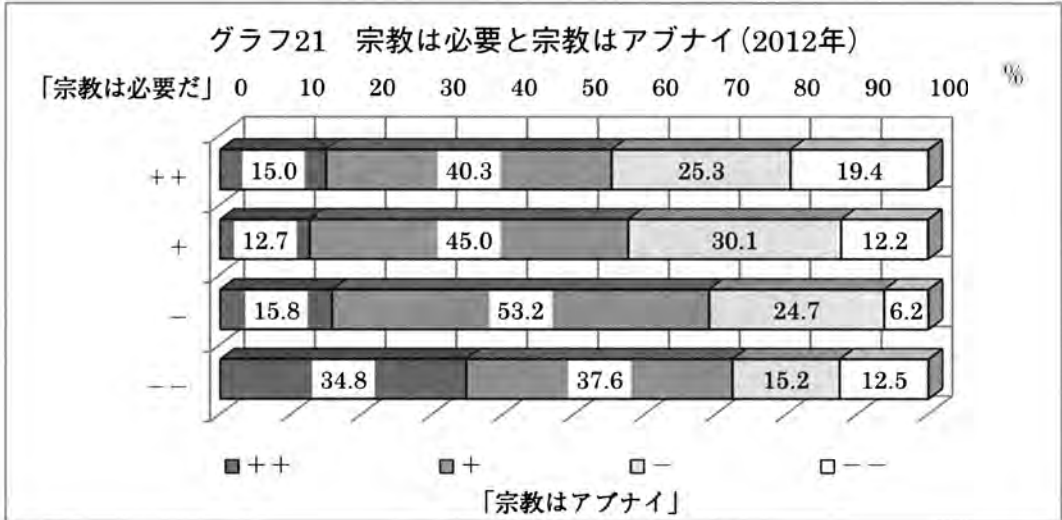
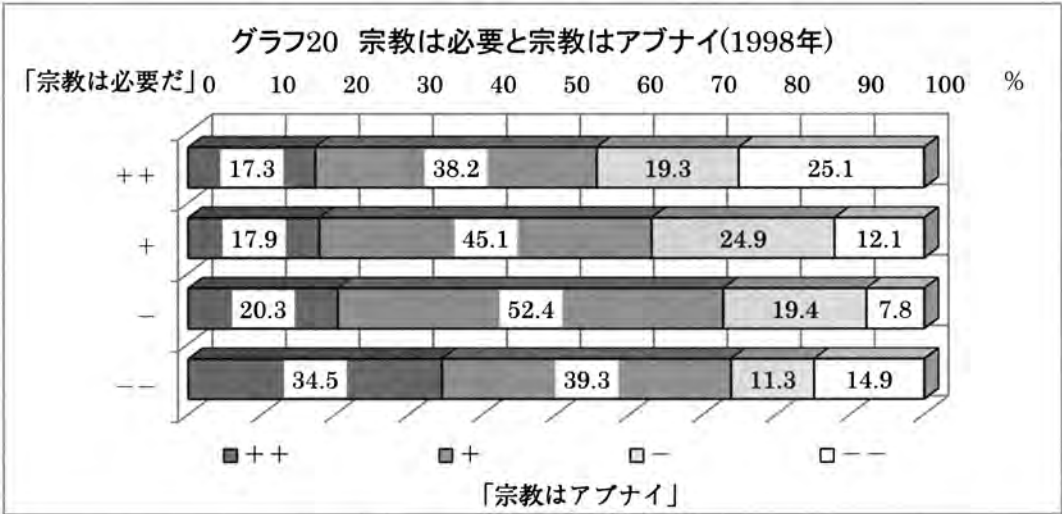
宗教や信仰で何を思い浮かべるかは、質問文の構成が回答者にどのようなコンテキストをもたらすかによっても左右される可能性を、この結果は示唆している。

グラフ18 宗教は必要



グラフ19 宗教はアブナイ





4. 宗教についてのイメージへの影響

質問のコンテクストにより、さまざまなイメージが喚起されうる「宗教」という言葉であるが、そのイメージの違いは、宗教教育をどう考えるかという際にも影響をもたらす。1995年のオウム真理教事件によって、宗教教育はにわかに注目されるようになった¹⁰。しかし宗教教育に関する議論においても、教育の対象となる「宗教」がどのようなものとしてとらえられているかが、意外に踏まえられていないことが多い。日本の学校教育においても、もっと宗教教育をした方がいいという意見が一部にあるが、学生の側はそれをどう受け止めるか。そして、その場合宗教はどのようなイメージでとらえられているのか。これに関する項目も1996年以降に設けられた。

1996～1999年の調査にかけては宗教教育に関して4回とも同じ質問がなされている。「高校までにもっと宗教についての基礎知識を教えるべきだ」という意見をどう思うかというものであり、回答の選択肢は「そう思う、どちらかといえばそう思う、どちらかといえばそう思わない、そう思わない」の4つである。

4回の調査とも「そう思う」と回答したのは1割強で、「どちらかといえばそう思う」と回答した人を含めたのを肯定派とすると、これが3割強であった。

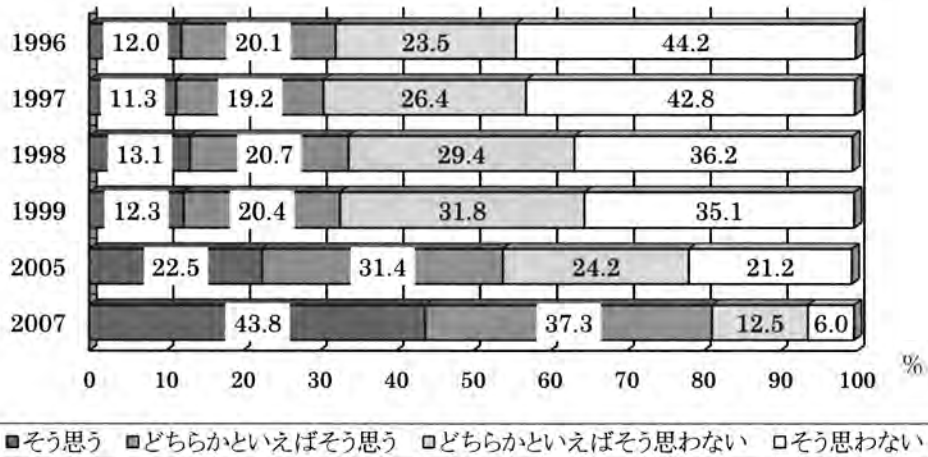
2005年の調査では質問を少し変えて、「高校までにもっと世界の宗教についての基礎知識を教えるべきだ」とした。つまり「世界の」という形容語を加えた。それだけで数値は大きく変わった。「そう思う」は2割を超し、ほぼ2倍となった。肯定派は5割を超した。この間に宗教に対する見方が大きく変わったとは考えられない。「宗教についての基礎知識」と「世界の宗教についての基礎知識」では、「宗教」という語によって喚起されたものに違いが生じたと理解するのが適切と考える。「宗教」と「世界の宗教」では印象が大きく異なることは、何度か講義において学生たちに確認した。

さらに2007年には「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい」という選択肢に変えたところ、「そう思う」は4割を超え、肯定派は8割を超えた。この質問文では「世界の宗教」が「日本や世界の宗教文化」と変わったのみならず、「知識を教えるべきだ」の部分が「知識を学んだ方がいい」になっているから、前半部分の変化の影響だけを論じられない。しかし、ただ「宗教」と表現した場合と「宗教文化」という表現になった場合では、そこで喚起される「宗教」の内容が変わりうる。(グラフ23参照)

どんなこと、どんな現象までを宗教とみなすかの、宗教の境界線は、問い方、宗教の前後に来る言葉など、コンテクストで異なることがここでも確認される。一般的な問題として聞かれたときと、体験を踏まえた聞き方で異なる。伝統宗教を連想させるか、教団的な宗教を連想させるかでも異なる。宗教文化という言葉が示されたときの「宗教」がイメージさせるものは、宗教という言葉単独の場合と比べて異なってくるのだと考えられる。

逆に言うなら、一貫した宗教イメージがあると想定すること自体が疑わしいのである。宗教はその関連の語とともにある概念であり、誰かが発する文章の中でのものであるということを考えるべきである。統計上の数値のブレもそこに依存するのであり、この点を無視すると、相互のデータは矛盾に見えたりする。

グラフ23 宗教(文化)についての基礎知識



コンテキストにあまり依存せず、自分は信仰をもっていると表明する人も一定数いると考えるべきである。「意識調査」において、「信仰をもっている」と答えた人の割合は、ほぼこれに相当するとみなしていいだろう。逆に、いかなる場合にも宗教に否定的である人も存在する。「意識調査」におけるいくつかの回答結果から推定すると、1割少々であると推測される。

信仰をもっていることを明確に回答し、かつ宗教の必要性をはっきり肯定している学生は数%である。そういう人は自らが形成した宗教ないし信仰の境界線がそれなりに明確である可能性が高い。何をもって信仰があるときみなすかの基準があるということである。しかし、アンケートに答えた大半の学生はそうではないと見た方がいい。宗教や信仰の問題をきちんと考えたことさえない人も相当数にのぼるだろう。とすると、それがどのようなものと認知されるかは、まさに質問によって触発される割合が少なくないと推測される。

現代の日本社会においては、宗教を信じる、信仰をもつ、というような場合の宗教と、社会慣習化している宗教的な実践の間に一つの見えない境界線が存在するのは確かである。しかし、それは揺れ動く可能性がある。したがって、日本人の信仰とか、宗教観というものを統計的手法によって調べようとするときは、まさに質問そのものが用意した認知のフレームというものを、調査者がはっきり自覚しなければならないことになる。

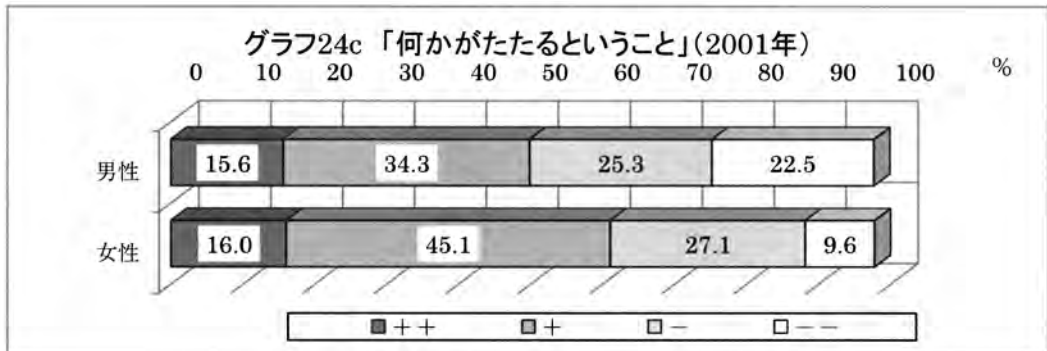
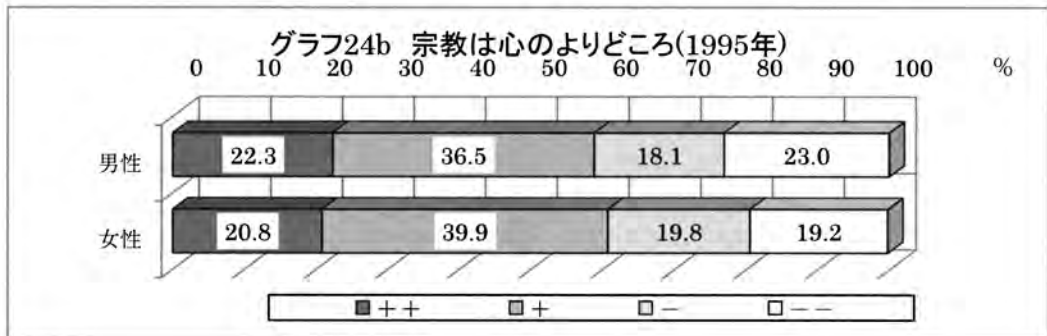
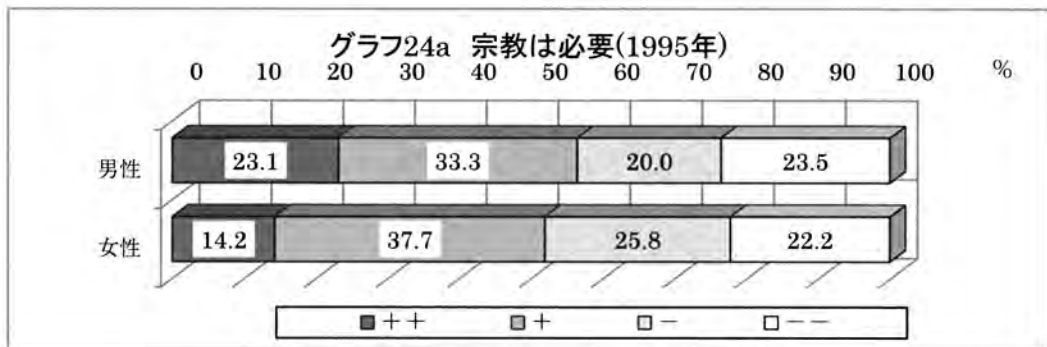
5. 性別による回答の違い及び二択と四択の関係—回答のズレに関する補足

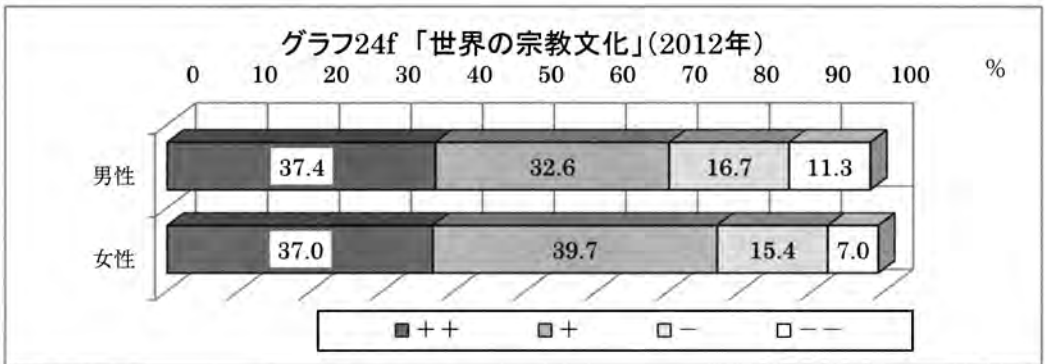
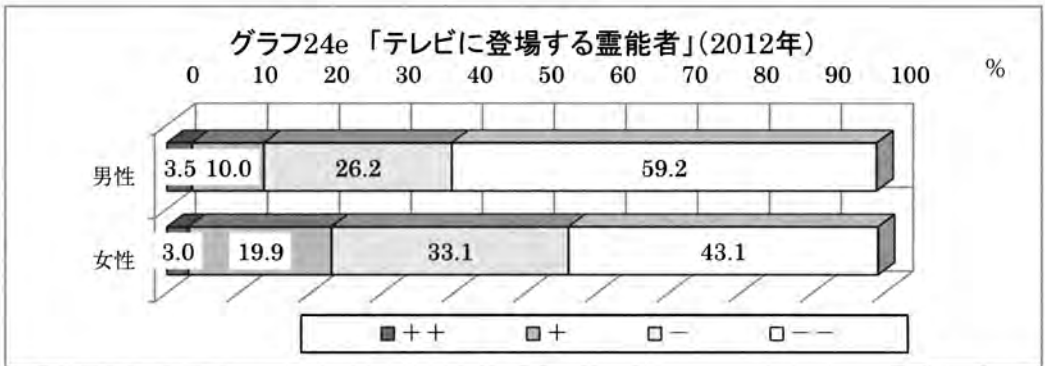
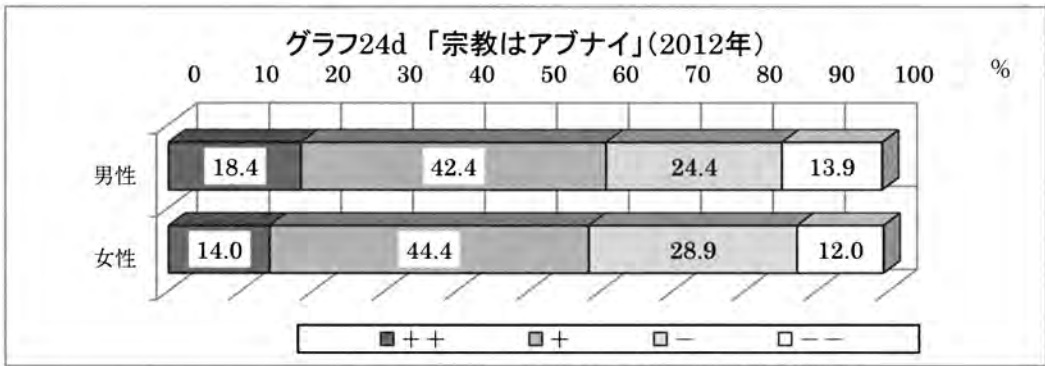
ここで「意識調査」からうかがえる回答の傾向について、2点ほど付け加えておきたいことがある。この調査ではある事柄に肯定か否定かの意見を求める場合、回答の選択肢を用意した場合、一部は二択であるが、基本的には4つの選択肢を設けた。すなわち、「そう思う」(++)及び「そう思わない」(--)という明確な肯定・否定と、「どちらかといえばそう思う」(+)及び「どちらかといえばそう思わない」(-)というゆるやかな肯定・否定である。

ここから2つの傾向が見いだせたのである。まず1つは、男子学生は女子学生よりも明確

な肯定・否定の回答の割合が多いという性別による傾向の違いである。これはほぼすべての質問項目、すべての調査年度にあてはまる。具体的に示してみる。6つの調査結果を例として選びグラフ24 a～24 fで示した。どの年の調査結果を見てもこれらの問への回答の傾向は同様である。

- (a) 「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要なだ」への回答（1995年）
- (b) 「宗教を信じると、心のよりどころができる」への回答（1995年）
- (c) 「何かがタタルということはあると思いますか」への回答（2001年）
- (d) 「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある」への回答（2012年）
- (e) 「テレビに登場する霊能者は、本当に霊と交信している」への回答（2012年）
- (f) 「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい」への回答（2012年）





明確な肯定・否定（++と--）の合計をAとし、ゆるやかな肯定・否定（+と-）の合計をBとして、 $A \div B$ を計算してみると、次のようになる。値が大きいくほど肯定・否定いずれであっても明確に意見を表明していることになる。男女で比較すると男性が女性の1.24～1.99倍である。明らかに男性の方があらゆる質問に明確な回答をする傾向がある。

- (a) 男性 = 0.87 女性 = 0.57 (1.36倍)
- (b) 男性 = 0.83 女性 = 0.67 (1.24倍)
- (c) 男性 = 0.64 女性 = 0.35 (1.80倍)
- (d) 男性 = 0.61 女性 = 0.43 (1.43倍)
- (e) 男性 = 0.48 女性 = 0.35 (1.36倍)
- (f) 男性 = 1.73 女性 = 0.87 (1.99倍)
- (g) 男性 = 0.99 女性 = 0.80 (1.24倍)

もう1つは、四択と二択との関係である。調査を始めた頃は、いくつかの質問の回答を実質的に二択にした（そう思うものに○をつける形式）。そして以後の調査で同じ質問をして回答だけ四択に変えたものがある。そのときの四択と二択の結果の関係である。四択の場合は上に示したように明確な肯定・否定とゆるやかな肯定・否定という構造だが、二択では肯定と否定である。

明確な肯定（C1）とゆるやかな肯定（C2）を合わせたものを「肯定派」（C）とし、二択の場合は「肯定」（D）とすると、おおよそ次のような関係があることが分かった。

$$D = C1 + C2 \div 2$$

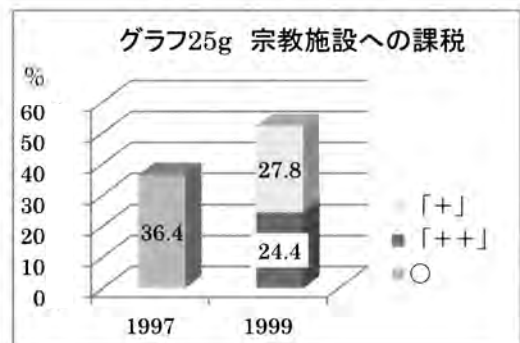
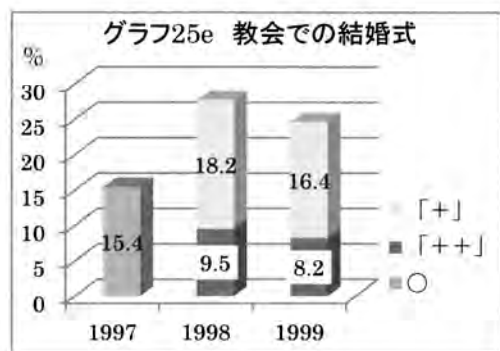
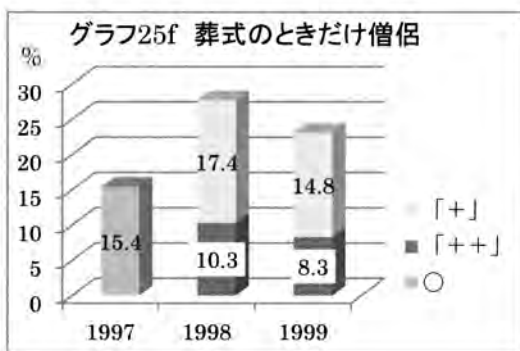
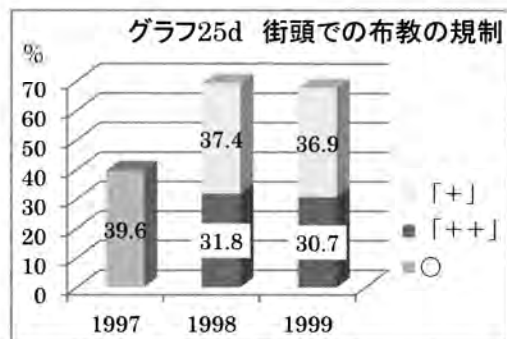
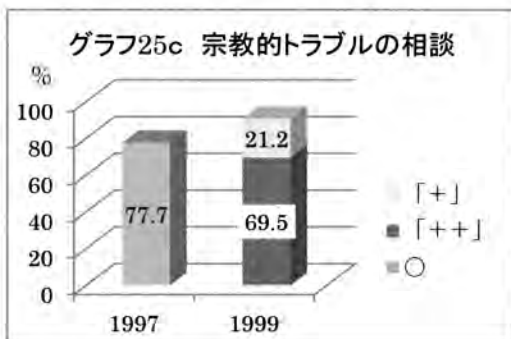
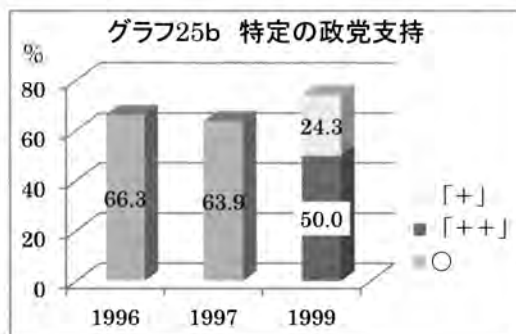
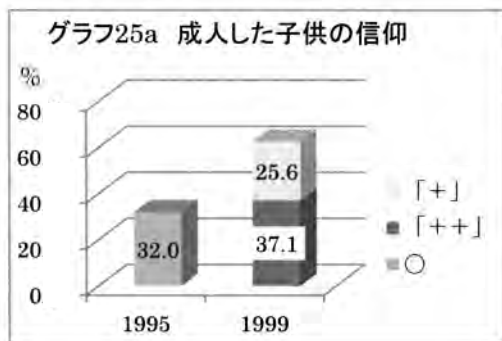
次の質問は、最初実質的二択からのち四択に変えたものである。これらを比較してみる。グラフ 25 a～25 g の凡例で○は二択での肯定であり、++は明確な肯定、+はゆるやかな肯定である。

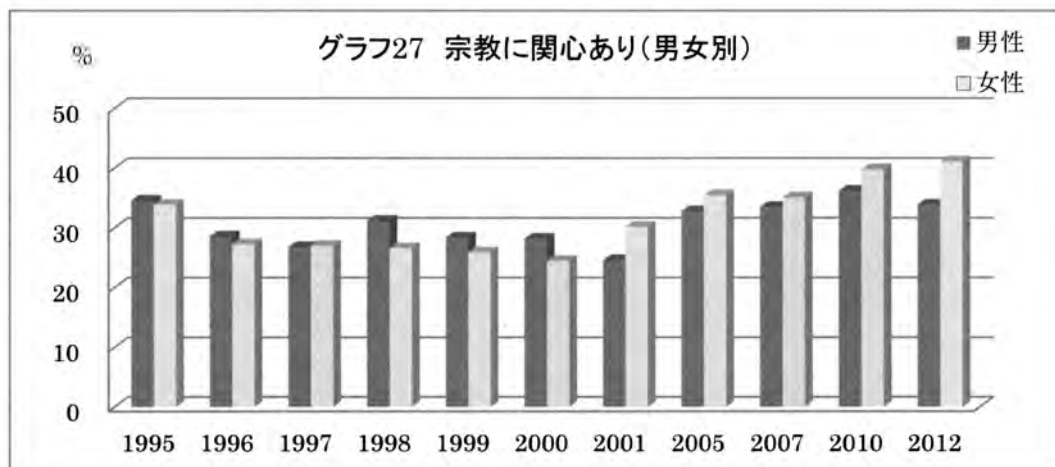
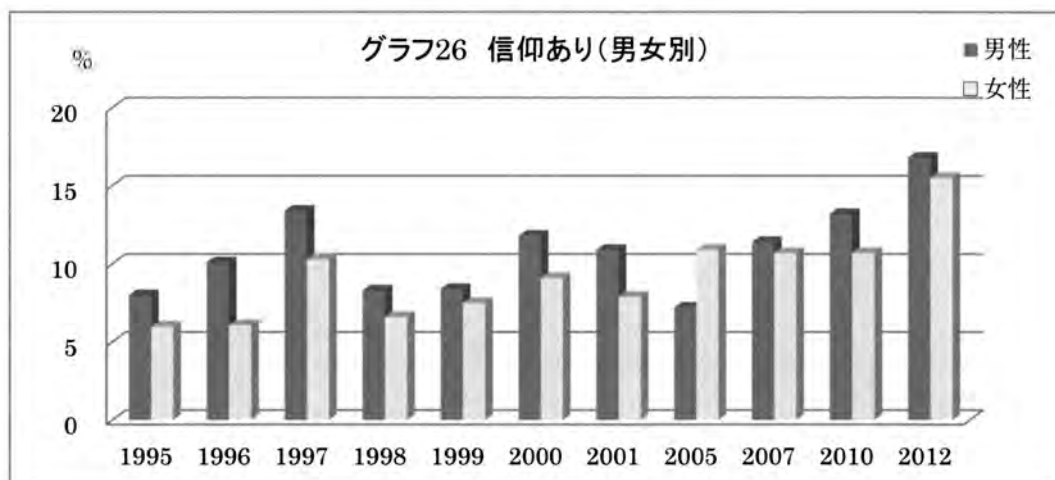
- (a) 「成人した子供の信仰に親が干渉するのはおかしい。」
- (b) 「特定の宗教団体が特定の政党を支持するのはよくない」
- (c) 「宗教的トラブルがあったときに相談できるような公的な窓口の設置が必要だ」
- (d) 「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ」
- (e) 「クリスチャンでない人が、キリスト教会で結婚式をあげるのはおかしい」
- (f) 「ふだん信仰のない家が、葬式のときだけ僧侶（お坊さん）をよぶのはおかしい」
- (g) 「神社、寺院、教会などの宗教施設は現在税金がかかっていないが、一般の建物と同じように課税すべきだ」

グラフを見ると、aのみが例外であるが、他はおおよそ先の式が成り立つことが分かる。そうすると、ある事柄を肯定するかどうかを「肯定派」で考えるのと「肯定」で考えるのでは、場合によって10%以上の開きが出てくることがある。たとえば、「神社、寺院、教会などの宗教施設は現在税金がかかっていないが、一般の建物と同じように課税すべきだ」であると、二択による「肯定」は36.4%だが、四択による「肯定派」は52.2%で過半数となる。どちらを採用するかで、かなり異なった評価になる可能性がある。

明確な肯定・否定で事柄への意見や態度を判断するか、あるいはゆるやかな肯定・否定を含めて判断するかで、数値にはかなりの変化が生じる。細かな回答のプレを検討するときには、こうした選択肢のあり方にも留意すべきである。

女性が男性よりもゆるやかな肯定・否定を選ぶ傾向があることは、宗教の境界線に関してもややゆるやかになっている可能性を想定できる。というのも、信仰の有無を男女別にみると、信仰があると答えた割合が男性の方が多いのが10回だが、信仰はないが宗教に関心ありと答えた割合が女性の方が多いのが6回と逆転する。当然誤差もあるが、ここに男性の方が明確に信仰の有無を回答し、女性の方がそれを避けたという可能性もある。（グラフ 26、グラフ 27 参照）





むすび

アンケート調査で宗教に関わる質問をしたときの回答のブレを手がかりにしながら、宗教の境界線はどのような条件のもとで揺れ動くかを考察した。日本人の宗教論は多々あるけれども、実際に一人ひとりが宗教についてどのようなイメージを抱いているか、何を宗教あるいは信仰と考えているか、といったことを知る材料は意外に乏しい。アンケート調査においては、あらかじめ調査者が用意した回答の選択肢の中から回答者が選ぶという形式が一般的である。自由記述により回答者のイメージを探ることもできるが、その場合今度は回答者の描く宗教の境界線を回答内容からある程度くみ取れるものかどうかの問題となる。ここで紹介したアンケート調査でも自由記述の部分が毎回少しずつもうけられているが、あまり多くの記述はないし、そこから回答者の宗教イメージを描くのはなかなか困難である。

本稿での議論の眼目は、継続して実施したアンケート調査への回答におけるマクロな傾向から、宗教の境界線が揺れ動く要因を推定したことである。1つは質問のワーディング、つまりどのような言葉、表現を用いるかである。たとえば宗教、世界宗教、宗教文化とでは、宗教を含む3つの語に含まれた宗教のイメージが微妙に異なってくる。それが回答結果にも

影響をもたらすということである。

もう1つは質問文が背景に備えているコンテキストである。このコンテキストを意識する人もいるだろうし、まったくコンテキストは関係なく、一つひとつの質問に答える人もいるだろう。しかしアンケート全体が宗教のポジティブな面に焦点を当てようとしているか、それともネガティブな面に焦点を当てようとしているかで、回答にブレが生じる可能性がある。科研調査は宗教文化教育への関心に焦点を当てていたため、意識調査よりも宗教が社会において果たしている役割や機能について幅広く提示する内容になった。これが回答者の信仰の有無に関する判断に影響を与えた可能性があることを指摘した。

そしてこうした回答のブレの背後に、そもそも宗教とか信仰という問題に、現代日本人の多くはあまり明確な規定をしていないという現状の影響を想定できる。よく言われるように、宗教を信じている、あるいは信仰をもっていると答える人は2～3割であるのに、初詣に行く人は7割に達するというのは、初詣は信仰に基づくものではないと考える人が過半数を占めるということを語っている。意識調査でもその年の初詣に行った学生、前年のお盆に墓参りに行った学生は、いずれも毎回5割前後の数値を示している。つまり大半はこれらは信仰に基づく行為ではないと認識していることになる。

ではそうした社会的慣習、習俗的な行為と宗教的行為の境界線は、それぞれ明確に意識されているかという、必ずしもそうではないのであろう。それが質問文の表現法やコンテキストによって回答にブレが生じる一因と考えられるのである。

ここで扱った課題は、広く言えば、宗教という問題に関する人間の認知のゆらぎに関わる。宗教は文化的構築物であるから、その構築物の境界線がどこにあるかは一義的に定めることが不可能といっている。あまり省察することなしに宗教の境界線の中に含まれているものと、通常曖昧にとどめおかれるが、状況によって境界線の内側にはいつてくるといようなものが考えられる。最終的にある行為が宗教的かどうかの個人の判断は、つねに同一ではなく、行為をどのような言葉で表現するか、どのようなコンテキストの中で考えるかによって変わる可能性がある。

これは最近の脳科学で、人間の脳皮質における判断が、いくつかの並行処理ののちに、ある支配的なものが意識に上るといいう仕組みを提唱していることに合致する見方でもある¹¹。自分は宗教的であるとか、信仰心があるという認知と、自分は非宗教的であるとか、信仰心はあまりないといった認知は、同一人物の中に共存し得ないものではないということである。信仰に関する認知が他者からの問いかけ（環境）に応じてブレが生じるというのは、むしろ当然のプロセスであるとするなら、こうしたアンケート調査の結果の吟味は、そのブレの度合いが、用いられる概念や必然的に生じるコンテキストがどの程度の影響を与えるものかという議論への貢献と考える。

注

- 1 平均して30～40の大学から4,000～6,000名程度の学生の有効回答を得ている。1999年だけ73校、10,941名の有効回答者数となっているが、これは理由があって特別に大規模にしたものである。首都圏が多いが全国的な調査である。11回の調査結果はすべて報告書が作成されており、回答結果の集計ならびに対象とした大学名、調査メンバー等が記されている。また調査結果を踏まえた書籍、論文も数多く刊行されている。これについては下記のURLを参照のこと。

<http://www.kt.rim.or.jp/~n-inoue/index.files/jasrs.htm>

- 2 1992年4月～6月に32の大学の4,005名の学生を対象に行った調査。この調査では「宗教についてのあなたの関心は、次のどれにあてはまりますか」という質問をもうけ、3つの回答の選択肢をもうけた。1.特定の宗教を信じている。2.特定の宗教を信じてはいないが、宗教には関心がある。3.宗教を信じていないし、関心もない。この質問に1を選んだ割合は全体で17.1%、非宗教系の大学で11.2%であった。「特定の宗教を信じている」というふうにかなり教団宗教を想定させるような選択肢であったが、非宗教系で一割を超したのである。調査結果は井上順孝『宗教教育に関するアンケート』報告書』（国学院大学日本文化研究所、1993年）にまとめられている。
- 3 これについては拙著『若者と現代宗教』（筑摩書房、1999年）の第1章を参照。
- 4 報告書は『宗教文化教育に関する学生の意識調査報告書』（大正大学、國學院大學、大阪国際大学、神戸大学）として2009年2月に刊行された。36の大学から5,005名の学生の有効回答を得ている。
- 5 個人的な経験であるが、1つ端的な例をあげたい。新宗教に関する講義のあとでは、それ以前に比べ新宗教への評価が変わる学生が少なくない。よく見られるパターンとしては、「新宗教はアブナイ、変な宗教である」というような印象をもっていた学生が、「新宗教もさまざまであることが分かった、それなりに社会で受け入れられている理由は分かった、だからといって入信したいなどとは思わない」といった変化である。これは筆者の講義の内容が影響しているからであり、別の教員が講義をすれば、また別の変化になると推測される。ただし、新宗教について講義する教員が、似たような経験を述べる人が多いことも付記しておきたい。
- 6 1990年代前半には国学院大学日本文化研究所の宗教教育プロジェクトによって全国の40ほどの宗教系学校を実態調査したが、高校レベルでも、キリスト教系の学校に通っている生徒が入信する例はきわめてまれであることが聞き取り調査で確かめられた。なお、この調査結果については、国学院大学日本文化研究所編『宗教教育資料集』（すずき出版、1993年）、及び同『宗教と教育』（弘文堂、1997年）を参照。
- 7 これも受講していた学生からの「告白」で、そうしたことがあることを個人的にも一度ならず経験している。
- 8 ちなみに2010年と2012年の調査ではこれに「パワースポット」を加えたが、いずれの年も信じる割合は選択肢に示した4つのうち最も低かった。
- 9 なおサブカルチャー的要素の強いテレビの霊能番組の影響については、拙論「霊能番組への関心と宗教情報リテラシー ―第9回学生宗教意識調査の結果を中心に―」（『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報創刊号』2008年）において分析をした。スピリチュアルなことがらへの関心の強さと霊の話の信じることとの間には、はっきりした相関関係が見いだされた。
- 10 1995年以降に展開された宗教教育に関する議論の背景にあるものと、そこでの議論を踏まえて提起された宗教文化教育については、拙論「グローバル化・情報化時代における宗教教育の新しい認知フレーム」（『宗教研究』369（85-2）、2011年所収）と、同「情報時代の宗教教育を考える」（聖心女子大学キリスト教文化研究所編『宗教なしで教育はできるのか』春秋社、2013年所収）を参照。
- 11 たとえばアンディ・クラーク『現れる存在』NTT出版、2012（原著 Andy Clark, Being there: Putting Brain, Body, and World Together Again, MIT, 1997）やクリストフ・コッホ『意識の探求』岩波書店、2006年（原著は Christof Koch, The Quest for the Consciousness: A Neurobiological Approach, Roberts & Publishers, 2004）など、意識の生成を扱った議論では通説となってきた。

本論文は科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者・井上順孝）による成果の一部である。

宗教文化教育の到達目標に関する一考察 —第1～4回宗教文化士試験問題の分析から—

塚田穂高

はじめに—問題の所在と研究課題の設定—

「宗教文化教育」は、宗教教育についての従来の議論の枠組み——「宗派教育」は私立のみで可／「宗教知識教育」は地歴公民等の社会科科目で主に行われているが、断片的な受験知識のみで留まってしまう／「宗教的情操教育」は大切に道徳の授業等で可だが、はたして教えられるのか、国の価値観の押しつけにならないのか、など——の行き詰まりを打ち破り、グローバル化時代にふさわしい自文化・多文化理解をベースとする新たな宗教教育（特に大学における）の理念と実践として、2000年代後半ごろから提唱されてきたものと言える¹。そのこと自体にはおそらく異論などはなく、議論や検討がなされるべきはその中身、すなわち授業内容や教材開発²、到達目標の設定やそれをサポートしていくような制度や仕掛けの構築などについてとなるだろう。

そうした制度構築・基盤構築の取り組みとして、2008年から2010年にかけて、星野英紀・大正大学教授を研究代表者として、科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」が進められ、多くの宗教研究者＝大学教員が集い、精力的な調査研究・検討会議・成果発信が進められた³。その大きな成果の一つとして、宗教文化教育の推進を目的に、宗教文化教育推進センター（CERC、サーク）⁴が2011年1月に設立され、國學院大学の日本文化研究所内に置かれた。

翌2011年度からは、「宗教文化士」制度が発足し、同資格の認定試験が開始され⁵、CERCがその運営にあっている。同試験はすでに4回実施され、計119名の宗教文化士が誕生している。第5回試験も、2013年11月10日に予定されている。このように、宗教文化士制度はすでに軌道に乗っているのである。

宗教文化教育の推進のなかに宗教文化士資格制度があるのならば、その資格とは一定の到達度・達成度の水準を担保したものだと考えられる。換言すれば、同資格試験において問われている内容や水準とは、宗教文化教育が目指すところを色濃く反映しているだろう、ということである。この点について、受験案内には3つの到達目標が明記されている（後述）。だが、それは縮約され抽象化された「目安」と言えるものであって、それを見ても、何に関するどういった知識や理解がどの程度求められているかについては、よくわからない。それを捉えるためには、「宗教文化士認定試験において、実際にどのようなことが問われているのか」の分析（端的に言えば過去問分析）が不可欠と思われるのである。管見の及ぶ限り、現在までにそのような試みは見当たらず、その作業にも一定の意義を見出せるだろう。

また、この点も詳細は後述するが、同資格試験は、大学教育においてある程度の宗教文化教育を受けた者が受験することを想定している。よって、同資格試験の内容を分析することが、翻ってみれば、大学教育の現場において高校までの（宗教に関する）教育を受けた学生

に対して、教員＝宗教研究者がどのような宗教文化教育を行っていくかデザインし改善していく際の大きな手がかりとなることは間違いないだろう。むしろ、同資格試験は宗教文化教育の最終目的ではないし、試験に合格できることだけを教えればいいのではない。だが、以上の側面からしても、この作業を行う意義はやはり大きいと言えるだろう。

よって本稿は、過去の第1回～第4回の宗教文化士試験の問題内容⁶を分析することを通じて、宗教文化教育で何が（一応の）到達・達成目標とされているかを捉え、その内容を考察することを研究課題とする。まず第1節では、宗教文化士制度と過去の試験の概要を確認しておく。続く第2節では、試験問題（主に記号選択式）とその選択肢内容の傾向を分析し、同試験で何が問われているのかその特徴を析出する。続いて第3節では、同試験の記号選択式問題の内容と高校の地歴・公民分野で扱われる内容との連続性と差異を検討し、そこから大学での宗教文化教育にどういった内容が求められているかを考察したい。

なお、CERCは國學院大学の日本文化研究所内に設置されており、研究所プロジェクトとの連携などはあるものの、筆者自身は同センターと同制度の運営委員会メンバーではない（同試験の試験監督は2度務めたことがあるが）。同試験の問題作成などにも関わっていない。その点において本稿は、あくまで基本的に公開されている資料に基づき、客観的な視点から研究・分析を行おうというものであることを予めことわっておく。

1. 宗教文化士制度と認定試験の概要

本節では、宗教文化士資格の制度としての概要、ならびにその資格認定試験の概要と試験結果などについて概観したい。

「宗教文化士」とは、

日本や世界の宗教の歴史と現状について、専門の教員から学んで視野を広げ、宗教への理解を深めた人に対して与えられる資格です。主な宗教の歴史的展開や教え・実践法の特徴、文化と宗教の関わり、現代社会における宗教の役割や機能といったことについて、社会の中で活かせる知識を養っていることが求められます。

と説明されている⁷。同資格を得るには、それぞれの大学において「到達目標」に対応した科目を履修して合計16単位以上を取得し、その上で資格認定試験に合格すること、が必要とされる。この「大学において授業を履修する」という条件が、前提としての大学における宗教文化教育の内容を考えるべき所以であり、単なる知識のみが問われるような諸検定試験とは大きく異なる点である。

この「到達目標」としては、

- ①教えや儀礼、神話を含む宗教文化の意味について理解ができる。
- ②キリスト教、イスラーム、ヒンドゥー教、仏教、神道などの宗教伝統の基本的な事実について、一定の知識を得ることができる。
- ③現代人が直面する諸問題における宗教の役割について、公共の場で通用する見方ができる。

の3点が挙げられている⁸。

そして、①に対応する科目の例として、「宗教学」「比較宗教学」「宗教社会学」「宗教人類学」といった概論系科目や「宗教と芸術」「宗教と文学」といった宗教と諸文化の関わりを扱う科目が、②に対応するものとしては、「神道思想・史」「仏教思想・史」「キリスト教思

想・史」といった宗教思想・史関係の科目や諸宗教の事例を扱う比較宗教学的な科目が、③に対応するものとしては、「現代宗教論」「宗教と社会」「死生学」などといった科目が、それぞれ想定されている。もっとも宗教系私立以外の大学において、「宗教」の語が入った科目を16単位＝8科目履修することは、なかなか困難である。よって実際のところは、「宗教」の語を冠していなくても、広く宗教文化に関わってくるような科目——たとえば民俗学・人類学・文学・美術史など——であれば、受験申請時にOKと判断されるようだ。

同資格制度を運営し試験を実施するのは、前述のCERCである。運営委員には、国内複数大学の教員＝宗教研究者があたっている。同制度・試験についての「担当教員」は、関西大学・関西学院大学・皇學館大学・國學院大學・大正大学・筑波大学・天理大学・東北大学・北海道大学・龍谷大学の10大学にいる。日本宗教学会と「宗教と社会」学会が、同制度の関連学会となっている。また、天理大学附属天理参考館・東洋文庫ミュージアム・公益財団法人国際宗教研究所宗教情報リサーチセンター・國學院大學博物館が協定機関となっている。

試験は、年2回行われる。会場は、受験者の有無によって変動もあるが、関東では國學院大學を基本としている。関西・近畿では関西学院大学や皇學館大学や龍谷大学など、他地方では北海道大学、東北大学などで過去に実施されている。受験料は5,000円、合格した後の認定料が5,000円である。

試験内容は、記号選択式問題50問（60分）と論述式問題1問（60分・600字以上～800字程度の小論文）から構成されている。具体的内容の検討は、次節にて行う。配点については公開されておらず、「双方において基準に達すること」が求められているが、論述式問題は宗教文化についての的確な理解に基づく「論旨のとあった文章であること」が求められている（すなわち単に勉強して知識だけがあるのではないことを確認する）のであって、ウェイトは記号選択式問題にあるように思われる。

受験資格は、大学生（3年生以上～卒業2年以内）、大学院生（在籍中、修了・退学2年以内）、中学・高校教員（関連分野で3年以上の教育歴）となっている。やはり、単なる知識の有無ではなく、宗教文化教育に関わっている（受ける・授ける）ことが前提とされているわけである。

過去の試験は、2011年11月13日の第1回に始まり、これまで第4回まで実施されている。以下に、各回の実施年月日、会場数、応募者数、受験者数、合格者数、合格率（合格者／応募者）、を一覧で示す。

表1 第1回～第4回宗教文化士試験の
実施年月日・会場数・応募者数・受験者数・合格者数・合格率

回	実施年月日	会場数	応募者数	受験者数	合格者数	合格率
第1回	2011/11/13	6	92	91	58	63.0%
第2回	2012/6/24	6	44	42	23	52.3%
第3回	2012/11/11	5	28	25	16	57.1%
第4回	2013/6/30	7	35	33	22	62.9%
計	—	—	199	191	119	59.8% (平均)

まだ実施回数が少ないので傾向はつかみにくいが、このように推移している。毎回数十名の応募・受験があり、平均すると各回 30 人ほどの合格者を出してきたのである。なお、平均点や合格最低点などは現在のところ公開されていない。

受験者・合格者の多くは、やはり大学生と言える。卒業生・中高教員などは若干名のように。合格者の所属・修了大学名が、CERC サイトで公開されている⁹。合計 25 大学である。会場校や担当教員がいる大学はもちろん含まれるが、それ以外の大学にも広がりを見せつつあることがよくわかる。

なお、同制度ならびに同試験に関連しては、朝日新聞・毎日新聞などの全国紙や共同通信系配信の地方紙、中外日報・佛教タイムス・キリスト新聞・新宗教新聞などの宗教専門紙、『寺門興隆』などの業界専門誌などにおいて、判明しているだけで計 32 回以上報道・紹介されており、ある程度の社会的注目を集めていることがうかがわれる¹⁰。

以上、本節では宗教文化士資格制度ならびに同資格認定試験の概要を確認してきた。次節で検討する試験問題の前提としての制度的設計、特に大学での宗教文化教育を前提としている方針が十分につかめたと言えよう。

2. 第1回～第4回宗教文化士試験問題の分析

本節では、具体的に第1回～第4回の宗教文化士試験の問題内容を見ていく。前述の通り、試験は記号選択式問題 50 問と論述式問題 1 問からなる。後者については、もちろん軽視されるものではないが、小論文という形式から回答を明示できず、過去問も各回 1 問の計 4 問のみである。よって本節では、順序は逆になるが、まずこの論述式問題のごく簡単なレビューを行った上で、重点を置く記号選択式問題の分析に移っていきたい。

論述式問題は、いずれも宗教に関するあるテーマについての 5 つの意見の中から 1 つ（あるいは 2 つ）を選び、それについての自分の意見・考えを述べる形式である。各回の問題と選択肢の内容をかいつまんで以下に示す¹¹。

第1回は、「現代日本の宗教教育」について、「中学・高校での教育は難しいから、大学でならよい」「地歴公民の授業で十分勉強しているから今のままでよい」「高校でなら宗教者を招いて話を聞く機会があってもよい」「中学・高校では人々の実際の生活に結び付いた宗教について学ぶべき」「アブナイと言われているような宗教についてしっかりと教えるべき」の 5 つから選んで論じるものである。

第2回は、「日常生活のなかの宗教文化」を考える際に何が手がかりになるかについて、「年中行事や人生儀礼などの儀礼的習俗」「宗教に関する映画」「宗教建築」「絵画・彫刻・音楽などの芸術作品」「文学作品」から選んで論じるものである。

第3回は、「職業上想定されうる宗教に関連する問題・注意点」についてであり、「公立小学校教師で児童にムスリム子弟がいる場合」「キリスト教系高校に赴任する場合」「ツアーコンダクターとして東南アジアを担当する場合」「国際会議などもあるホテルの宴会関連業務に就く場合」「マスコミ関係で仏教・神道と人々との関わりを取り上げる場合」にどういうことに注意したらよいか助言を与える形式で論じるものである。

第4回は、「宗教文化の理解の必要性・重要性を伝える」というもので、「中高で英語を教えているが、文化的要素特に宗教文化については教える必要がない」「公立学校の社会科で工場や市場などの見学はするが、宗教施設は日常生活に関わっていないので連れて行かな

い]「ホテル勤務でアジアからの客もいるが、文化や宗教の知識がなくても大丈夫」「映画が好きだが、ストーリーが面白ければよく、宗教の知識はなくてもよい」「政教分離は世界的傾向だろうから、政治と宗教は切り離して考えた方がよい」といった考えに対し、反論的な意見を述べるものである。

このように見てくると、これらの設問と選択肢には、宗教（文化）教育はどのような形で可能であり必要であるかという基本的問題意識に始まり、宗教文化が社会のさまざまな局面や諸文化に広く関わっていること、とりわけ特定の職業の具体的な局面に関わりうる可能性や、知識や理解があれば物事の見方や対応を豊かにしうるが無知・無関心でいると場合によってはトラブルになりかねない懸念、などの考えが反映されていることがわかる。これらはすなわち、宗教文化教育ないし宗教文化士制度の目指すところに通底する姿勢である。論述式問題のレビューからは、この点をまず確認できた。

次に、記号選択式問題の分析に入る。これは、各設問につき5つの選択肢があり、そこから「適切なもの」を2つ選ぶ方式である。すなわち原理的には、2つ正しい選択肢を積極的に選ぶか、3つ明らかに間違っているものを見つけること（実際はその併用）により、正解にたどり着くわけである。なお、公開・明言はされていないものの、過去問の回答に付記された文言から判断すれば¹²、各問は2選択肢とも正答を選んでいないと正解とはならない（1つだけ合っても得点にならない）ようで、ややハードルは高い。また、60分（3,600秒）で50問の問題を解くということは、単純計算でも一問あたり72秒、設問と5選択肢の6つの短文があることから、1文あたり12秒で読んだ上に判断して回答しなければならない。瞬時に間違いを見つけられれば苦はないが、考え込むような時間はほとんどない。この点においても、宗教文化に関する正確な知識とそれに基づいた的確で迅速な判断が受験者には求められているということになるだろう。

過去4回の試験があり、各回50問、各問5つの選択肢がある。すなわち、これまでに200問・1,000選択肢が出ていることとなる。ここでは、これを分析対象とする。ただし、設問と選択肢の内容の全てをここで取り上げることはもちろん紙幅の都合上不可能であるので、具体的な文言は過去問を参照してもらいたい¹³。以下、各回の設問とその選択肢に触れるときは、回をⅠ～Ⅳ、設問を1～50、選択肢をア～オでそれぞれ示す（例：第3回の設問25の選択肢オ→「Ⅲ-25-オ」）。

まずは、過去問が扱った内容の分布を明らかにしたい。以下の表2～5は、第1回～第4回の過去問の各50問×4につき、そこで扱われているテーマの宗教・地域・時代・項目・概念などについて、筆者なりに分類し見出しをつけたものである。

「仏」は仏教、「ユ」はユダヤ教、「キ」はキリスト教、「イ」はイスラーム、「儒」は儒教、「道」は道教、「ヒ」はヒンドゥー教、「ギ」はギリシア神話、「ロ」はローマ神話、「日」は日本神話、「印」はインド神話をそれぞれ省略したものである。

また、各設問に「地歴公民」とあるのは、高校の地歴・公民分野の内容との連続性を示したものである。「日」は日本史、「世」は世界史、「地」は地理、「倫」は倫理、「政」は政治・経済をそれぞれ指す。その選定基準と分析については、次節にて示す。

4回の過去問内容の一覧を見てまずわかるのは、おおよその決まったパターンで50問が構成・展開されていることだ。まず、日本の宗教から始まり、15問ほど続く。その後、中国・韓国の東アジア、東南アジア、インドなどの南アジア、中東などへと展開していく。次

表2 第1回宗教文化士試験 記号選択式問題の内容一覧

問	問題のテーマ	地歴公民	問	問題のテーマ	地歴公民
1	日本の宗教: 神仏関係・宗教史	日・倫	26	キリスト教: 聖職者	——
2	日本の宗教: 神道: 参拝作法	——	27	イスラーム: 六信五行	倫
3	日本の宗教: 神道: 有名神社	日	28	イスラーム: スンナ派・シーア派	倫・世
4	日本の宗教: 神道: 神職	——	29	イスラーム: モスク	——
5	日本の宗教: 神道: 祝詞	——	30	イスラーム: 食事	——
6	日本の宗教: 仏教: 歴史・僧侶・用語	日・倫	31	イスラーム: ムハンマド	倫・世
7	日本の宗教: 仏教: 歴史・社会的形態	日・倫	32	イスラーム: ラマダン	倫・地
8	日本の宗教: 仏教: 平安・鎌倉宗祖	日・倫	33	イスラーム: 基礎知識・歴史	世・地・倫
9	日本の宗教: 仏教系新宗教: 近代	日・倫	34	イスラーム: コーラン	倫
10	日本の宗教: 日本人と宗教との関わり	——	35	世界の神話: ヒ・道・ギ・日・ローマ	世
11	日本の宗教: 年中行事・祭	——	36	ヒンドゥー教: 輪廻	倫
12	日本の宗教: 山岳信仰・神仏習合・民間信仰	日・倫	37	ヒンドゥー教: 神・戒律	——
13	日本の宗教: 新宗教: 近代	日・倫	38	ユダヤ教: 戒律	倫
14	日本の宗教: 宗教教育・政教分離: 近現代	——	39	現代宗教: カルト問題	——
15	日本の宗教: 神道・仏教: 世界遺産・宗教史	日・倫	40	世界の諸宗教: キ・ユ・イ: 世界遺産・各国	地・世
16	日本の宗教: 信教の自由・宗教法人: 現代	日・政	41	世界の諸宗教: 分布・各国	地・世
17	世界の諸宗教: 仏・キ・ユ・儒: 始祖の思想	倫	42	世界の諸宗教: 分布・各国・紛争	地・世
18	東南・南アジアの宗教: 仏教: 各国	地・世	43	世界の諸宗教: 聖地	世・地・倫
19	アジアの仏教: 各国	地・世	44	世界の諸宗教: シンボル	——
20	中国の仏教	倫	45	世界の諸宗教: 分布・各国・建築	世・地・倫
21	キリスト教: 基本知識	世	46	宗教社会学の基礎	——
22	キリスト教: 分布・各国	地	47	宗教研究の基本姿勢	——
23	キリスト教: 分布・各国	地・世	48	宗教研究の基本姿勢	——
24	日本の宗教: キリスト教	日	49	宗教研究に影響を与えた研究者	——
25	キリスト教: 分布・各国	地	50	宗教学の基礎概念: 類感呪術	——

表3 第2回宗教文化士試験 記号選択式問題の内容一覧

問	問題のテーマ	地歴公民	問	問題のテーマ	地歴公民
1	日本の宗教: 神道: 祭神	——	26	中国の宗教: キリスト教	——
2	日本の宗教: 神道: 神社	——	27	アメリカの宗教: キリスト教: 教派・新宗教	——
3	日本の宗教: 神道: 神の性格	日・倫	28	キリスト教: 分布・各国	地
4	日本の宗教: 神道: 神社本庁	——	29	キリスト教: 聖書	倫・世
5	日本の宗教: 神道・仏教: 基礎知識	——	30	キリスト教: 分布・各国	世・地
6	日本の宗教: 神道・仏教: 有名神社の歴史	日・倫	31	キリスト教: 教会・基礎知識	——
7	日本の宗教: 神仏関係・宗教史	日・倫	32	イスラーム: 礼拝	倫
8	日本の宗教: 仏教: 鎌倉仏教祖師	日・倫	33	イスラーム: 女性・服装	——
9	日本の宗教: 仏教: 檀家制度・歴史	日	34	イスラーム: 習慣	——
10	日本の宗教: 神・仏・キ: 有名社寺教会	日	35	イスラーム: コーラン	倫
11	日本の宗教: 新宗教: 近代	日	36	イスラーム: 習慣	——
12	日本の宗教: 神道・仏教・習俗	——	37	イスラーム: 祝祭	——
13	日本の宗教: 宗教史	日・倫	38	世界の諸宗教: 仏・ユ・キ: 儀礼	——
14	日本の宗教: 宗教史・信教の自由	日	39	世界の諸宗教: キ・イ・仏: 聖地巡礼	——
15	日本の宗教: 結婚・習俗	——	40	世界の諸宗教: キ・イ・仏: 年中行事	——
16	中国の宗教: 道教	——	41	世界の諸宗教: 各国・政教分離	世・日・政
17	上座仏教: 基礎知識・タブー	——	42	世界の諸宗教: 各国: 紛争	世
18	上座仏教: 僧侶の戒律・食物	——	43	世界の諸宗教: 暦	倫・世・日
19	上座仏教: 分布・各国	地	44	世界の諸宗教: 戒律	政・倫
20	日本の宗教: ヒンドゥー教由来の神	——	45	世界の諸宗教: 健康法	——
21	インドの宗教: ヒンドゥー教	世・倫	46	世界の諸宗教: 基礎知識	日・倫
22	インドの宗教: ヒンドゥー教	世・倫	47	宗教社会学の諸理論	——
23	ユダヤ教: 安息日	——	48	宗教研究の基本姿勢	——
24	日本の宗教: キリスト教: 歴史	日・倫	49	宗教学理論: 通過儀礼	——
25	キリスト教: 祝祭	——	50	宗教学理論: 基礎的概念	——

表4 第3回宗教文化士試験 記号選択式問題の内容一覧

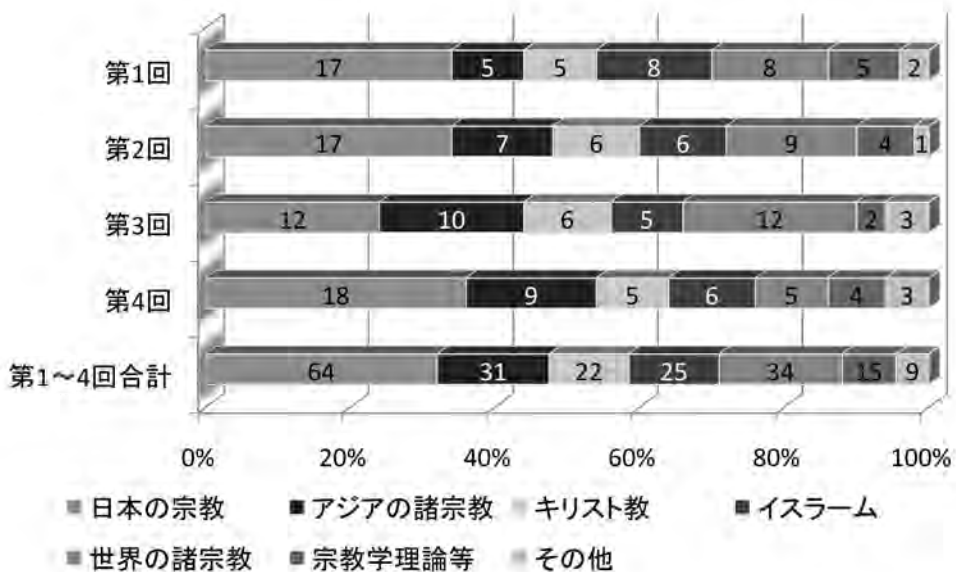
問	問題のテーマ	地歴公民	問	問題のテーマ	地歴公民
1	日本の宗教: 神道: 有神神社	—	26	キリスト教: 修道会	—
2	日本の宗教: 神仏習合・宗教史	日・倫	27	キリスト教: 基礎知識・歴史	世・倫
3	日本の宗教: 神道: 伊勢の遷宮	—	28	キリスト教: 東方正教会	—
4	日本の宗教: 仏教: 鎌倉仏教	日・倫	29	キリスト教: 各国・建築・世界遺産	世・地
5	日本の宗教: 仏教: 歴史・中国からの影響	日・倫	30	イスラーム: コーラン	倫
6	日本の宗教: 仏教: 平安・鎌倉仏教	日・倫	31	イスラーム: 戒律	—
7	仏教: プツダ・経典	倫	32	イスラーム: 礼拝	—
8	日本の宗教: 神道・仏教: 基礎知識	—	33	イスラーム: ヒジュラ暦	—
9	日本の宗教: キリスト教	日	34	イスラーム: 断食	—
10	ユダヤ教・キリスト教: 聖書	世・倫	35	西アジアの宗教: ユ・キ・イ・ゾロアスター: 各国	世
11	日本の宗教: 新宗教: 近代	—	36	ユダヤ教: 戒律・食物	—
12	日本の宗教: 新宗教: 近代	—	37	ユダヤ教: 安息日	—
13	日本の宗教: 仏教・山岳信仰	日・倫	38	世界の諸宗教: 派生集団: 近現代	—
14	日本の宗教: 文学と宗教思想	—	39	世界の諸宗教: 仏・ユ・キ・イ・儒: 教え	倫
15	世界の諸宗教: 仏・キ・ヒ・ユ・道: 分布・各国	世・地	40	世界の諸宗教: ヒ・ユ・キ・イ・仏: 衣装	—
16	東アジアの宗教: 分布・各国(日・中・韓・台)	—	41	世界の神話: 日・ギ・印・ロ・中	世・倫
17	韓国の宗教	—	42	世界の諸宗教: 戒律・食物・各国	—
18	中国の宗教: 儒・道	—	43	世界の諸宗教: ユ・キ・イ・神・仏: 偶像崇拜	世・倫
19	中国の宗教: 現代	—	44	世界の諸宗教: ユ・イ・仏: 映画	—
20	東南・南アジアの宗教: 分布・各国	地	45	世界の諸宗教: 歴史的人物・各国	世・倫
21	インドの宗教: ヒ・イ・ジャイナ	世・地・倫	46	世界の諸宗教: ヒ・キ・イ: 原理主義・各国	—
22	東南アジアの宗教: 上座仏教: 分布・各国	—	47	世界の諸宗教: 印・キ・イ: 教え	倫
23	アジアの宗教: 分布・各国: 世界遺産	世	48	世界の諸宗教: 分布・各国: 政教分離	—
24	タイの上座仏教: 僧侶の戒律	—	49	日本の宗教研究者	—
25	キリスト教: 基礎知識・歴史	世・地・倫	50	世界の宗教研究者	—

表5 第4回宗教文化士試験 記号選択式問題の内容一覧

問	問題のテーマ	地歴公民	問	問題のテーマ	地歴公民
1	日本の宗教: 年中行事・人生儀礼	—	26	インドの宗教: ジャイナ教	倫
2	日本の宗教: 神道: 教え・水	—	27	インドの宗教: ヒンドゥー教	—
3	日本の宗教: 神仏関係・宗教史	—	28	インドの宗教: シク教	世
4	日本の宗教: 神道: 神社	—	29	キリスト教: 基礎知識	—
5	日本の宗教: 神道: 伊勢神宮・遷宮	—	30	日本の宗教: キリスト教: 歴史	日
6	日本の宗教: 日本文学と仏教	日・倫	31	キリスト教: 日本・基礎知識	世・日
7	日本の宗教: 民俗宗教	—	32	キリスト教: 分布・各国	世・地
8	日本の宗教: 仏教: 食事・僧侶	—	33	キリスト教: 現代の動向	—
9	日本の宗教: 仏教: 海外との比較	—	34	キリスト教: 東方正教会: 各国	—
10	日本の宗教: 仏教: 平安・鎌倉	—	35	ユダヤ教: 戒律・食事	—
11	日本の宗教: 仏教: 禅宗	—	36	ユダヤ教・キリスト教・イスラーム	倫
12	日本の宗教: 仏教: 葬式・教え	—	37	イスラーム: メッカ	世・倫
13	仏教: 基本知識	倫	38	イスラーム: 戒律・食事	—
14	日本の宗教: 仏像: 美術・教え	—	39	イスラーム: ラマダーン	—
15	アジアの宗教: 仏教: 各国	—	40	イスラーム: シーア派	世・地・倫
16	アジアの宗教: 仏教: 各国	世・地・倫	41	イスラーム: 基礎知識	—
17	日本の宗教: 宗教人口	—	42	イスラーム: 分布・各国	地
18	日本の宗教: 新宗教: 近代	日	43	世界の神話: ギ・印・日・旧約	世・日・倫
19	日本の宗教: 社会事業: 近現代	—	44	世界の神話: 宗教史	—
20	世界の諸宗教: キリスト教系: 近現代	—	45	世界の諸宗教: 仏・ユ・キ・イ・日: 経典	倫
21	日本の宗教: 富士信仰	—	46	世界の諸宗教: 葬法	—
22	中国の宗教	—	47	宗教学理論・概念: 宗教多元主義	—
23	中国の宗教: 儒教	倫	48	宗教学理論・概念: 儀礼	—
24	中国の宗教: 陰陽五行説	倫	49	世界の宗教研究者	—
25	中国の宗教: 仏教	世・日・倫	50	宗教研究の立場	—

に、地域的にはヨーロッパとアメリカを中心にキリスト教へと続く。そして、イスラームについては必ず数問が展開される。その後は、ユダヤ教などはさみながら、「世界の諸宗教」に関する比較宗教史・学的な問題が続く。最後は、宗教学の諸理論や基礎概念が4・5問出され、幕を閉じるのである。こうした設問の構造を割合別に表したのが、下記のグラフ1となる。

グラフ1 第1～4回宗教文化士試験 記号選択式問題のテーマ別割合



単純に言えるのは、かなりまんべんなく出題されるということである。もちろん試験に合格するためには満点である必要はないが、知識理解の「穴」があると厳しい。神道系大学で神道学や神道史の授業を、仏教系大学で仏教学・仏教史の授業を、キリスト教大学でキリスト教学・キリスト教史の授業を、また各専攻で宗教社会学や人類学・民俗学の授業を受けただけではとても太刀打ちできない広がりを持っていることをまず指摘できる。

一つ一つの領域で問われる内容のタイプを見ていこう。

まず、「日本の宗教」である。記号選択式の前半を占めるこの領域は、厳密な線引きは難しいものの「日本宗教史」「基礎知識・作法・習俗」「現代的諸問題」に分けられる。比重が大きいのは、前2者である。「現代的諸問題」は、宗教教育（I-14）・信教の自由と宗教法人（I-16）・社会事業（IV-19）など、出ても2・3問にかぎられる。「日本宗教史」は、ア 平安時代までは神と仏は別なものとして考えられていたので、神仏習合はまだ見られなかった。

イ 神前読経というのは、神に対して僧侶が仏教の経典を読むことである。

ウ 江戸時代に檀家制度が成立すると、神仏習合状態はしだいになくなっていった。

エ 明治政府はそれまでの神仏習合状態を解消するために神仏分離令を出した。

オ 戦後は、政教分離を徹底させるため、宗教法人法により檀那寺という制度が廃止された。（Ⅲ-2、正答はイ・エ）

のように、神仏習合や神仏分離などに関するもの、日本仏教の歴史特に平安仏教や鎌倉仏教の祖師に関連するもの（Ⅰ-8、Ⅱ-8、Ⅲ-6、Ⅳ-10など）、江戸期以降の檀家制度に関するもの（Ⅱ-9など）が目立つ。日本のキリスト教史も必ず問われている（Ⅰ-24、Ⅱ-24、Ⅲ-9、Ⅳ-30）。なお、近代の新宗教については、出ても2問程度である。

他方、「基礎知識・作法・習俗」としては、

ア「神社はイスラム寺院（モスク）と似たところがあり、崇拜対象を置いたりしません。お寺はキリスト教会と似たところがあり、仏像が一体だけあります。」

イ「神社で神職が唱えるのは祝詞ですが、お寺で僧侶が唱えるのは念仏です。」

ウ「神社にはご神体というものがあります。お寺にはそれぞれの宗派で信仰する仏像があります。仏像は複数の場合もあります。」

エ「神社に参拝する人に対応してくれる宗教者は神主さんですが、お寺に参詣する人に対応してくれる宗教者はお坊さんです。」

オ「神社はすべて古代にできていますが、お寺は鎌倉時代や江戸時代にできたものもあります。」（Ⅱ-5、正答はウ・エ）

のように、神道（神社）と仏教（寺院）の特徴や両者の違いに関するもの（Ⅰ-3、Ⅱ-12、Ⅲ-8、Ⅳ-2など）、神社の参拝法（Ⅱ-2）や仏教式の葬式（Ⅳ-12）に関するもの、年中行事や人生儀礼や民間信仰に関わるもの（Ⅰ-11、Ⅱ-15、Ⅳ-1など）などがある。これらは、設問のシチュエーションにしばしば外国人や留学生に説明する場面が登場することなどからも、自文化理解とその説明力が問われているのだと言えよう。

次に、「アジアの諸宗教」である。特に中国（Ⅰ-20、Ⅱ-16・26、Ⅲ-18・19、Ⅳ-22・24・25）や韓国（Ⅲ-17）のウェイトが大きい。しかも歴史だけではなく、現在の状況もよく問われている。東南アジアは、イスラームと仏教（大乘・上座部の区別など）についてよく問われる（Ⅰ-18、Ⅱ-17・18・19、Ⅲ-20・22・23・24、Ⅳ-15・16）。南アジアは、インドが中心でヒンドゥー教を中心に問われる（Ⅱ-21・22、Ⅲ-21、Ⅳ-26・27・28）。これは地理的に近い諸国の状況の理解とともに、日本への移民や訪問者も多いなかでの文化理解の必要性を反映した内容と比重になっていると考えられる。

続いて、「キリスト教」である。これは前掲の表のとおり、イエスや聖書など基礎的知識を問うもの、カトリックとプロテスタントまたは東方正教会の共通性や違いを問うもの、建築などと絡めながらヨーロッパ諸国を中心にその国の教派分布を問うもの（Ⅲ-29、Ⅳ-32）などからなる。コンスタントに5～6問が出ている。

「イスラーム」もまた必須の領域であり、5～8問が出ている。六信五行、モスク、食事、ラマダン、コーラン、礼拝、服装、暦などムスリムの生活と結びついた基本的教えについてまとめて多く問われているのが特徴である。特に後述するが、戒律・タブーに関する設問が目立つ。これはやはり他者・他文化理解という点で、日本国内でも徐々に増えつつあり接する機会も増えると思われるムスリムの生活と教えを理解しているかが強く問われているものだと言えよう。

「世界の諸宗教」関連の問題は、いわばオールジャンルの・宗教伝統を横断的に問うものである。聖地・シンボル・建築・儀礼・暦・衣装・葬法といった特定のトピックについて、諸宗教の場合を問うものが多い（Ⅰ-43・44、Ⅱ-38・39・43、Ⅲ-40、Ⅳ-46など）。要は、各宗教のケースを瞬時に引き出せるかが問われている。世界の神話に関連する理解も必須で

ある（Ⅰ-35、Ⅱ-20、Ⅲ-41、Ⅳ-43・44）。また、これは全体に関わるが、世界遺産や映画・文学・美術などに絡めた問題もよく問われるようになっている（Ⅰ-15・40、Ⅲ-14・23・29・44、Ⅳ-6・14・44など）¹⁴。

残るは「宗教学理論等」だが、これはあまりウエイトが大きくない。問われる中身もあまり立ち入ったものではない。ウェーバー、デュルケム、フレーザー、オットーなどの諸学者の代表著作や代表的概念は、単純に知らなければ解きにくい（Ⅰ-49、Ⅲ-50、Ⅳ-49）。だが、いくつかについては、常識的な判断・読解や後述する極端な選択肢の排除により解けるものも散見される（Ⅰ-46・47・48・50、Ⅱ-48、Ⅳ-50）。

以上、各領域で問われる内容のタイプを概観してきた。ここで指摘した傾向については、過去4回で大きな変化は見られなかった。よって、宗教文化士試験の問題構成の骨格部分としてある程度は理解できると言えよう。

続いて、領域横断的に観察できるいくつかの特徴を指摘しておきたい。

まず、表2～5にみられる「分布」「各国」というキーワードに注目してほしい。第1回には50問中9問、第2回には5問、第3回には10問、第4回には5問が確認できる。もちろんそれ以外にも中国・韓国・インド・タイの各国に特化した設問もある。それらも含めて考えると、かなりの割合と言えるのではないだろうか。すなわち、仏教・キリスト教・イスラーム・ヒンドゥー教等の諸宗教の教えだけではなく、「○○国・地域の宗教人口・分布は△△である」という理解にかなりのウエイトが置かれているのである。このことは世界遺産や観光のトピックともつながる。また、その国・地域からの来訪者を迎える際に、食事等にどのような注意が必要か、あるいはもっとシンプルに話のきっかけにどのようなトピックがいいか、ということにもつながるのである。

次なる特徴として挙げられるのは、「タブー・戒律に関する理解の重視」である。諸宗教のタブーと戒律について問う設問が目立つ。第1回では6問（Ⅰ-27・30・32・33・37・38）、第2回では8問（Ⅱ-17・18・23・32・33・34・36・44）、第3回では7問（Ⅲ-31・32・34・36・37・42・43）、第4回では6問（Ⅳ-9・29・35・38・39・41）が該当する。

ア 「エホバの証人は輸血を禁じているらしいから、病院関係者はそれを知っていないといけないね。」

イ 「ユダヤ教徒はうろこのない魚を食べてはいけないらしいから、お寿司屋に連れて行くときは注意した方がいいよ。」

ウ 「イスラーム教徒はコーヒーを飲んではいけないらしいから、喫茶店には誘わない方がいいよ。」

エ 「ヒンドゥー教では豚肉がタブーなので、インドではポークカレーはないらしい。」

オ 「ユダヤ教のラビは結婚してはいけないらしいから、つきあうときは知っておいた方がいいよ。」（Ⅱ-44、正答はア・イ）

のように、諸宗教横断的なものもあるが、最も目立つのがイスラームに関連するものである。そして、ヒンドゥー教、ユダヤ教、上座仏教のケースが続く。日本の宗教あるいは中国・韓国の宗教、キリスト教に関連する設問ではほとんど含まれていない。トピックとしてはやはり食物に関するものが多い。こうした背景には、やはりグローバル化により人の往来が激しくなり、日本人や企業が海外に出て行ったとき、あるいはイスラーム圏やヒンドゥー圏などの人々が日本にやってきたときに、円滑に交流をする——裏を返せばトラブルを回避

するために必要不可欠な理解だ、という理念があると思われる。その意味で、本試験において求められていることのかかなり重要な部分を構成すると言えよう。

最後に、いくぶんテクニカルな問題になるが、「極端な選択肢がいくぶん目立ち、それが正答になりにくい」という傾向を指摘できる。これはいわゆる「受験テクニック」だが、「しか」「のみ」「だけ」などの限定、「みな」「すべて」「必ず」「どこでも」などの全包含、「できない」「全く～ない」などの全否定の表現を含む選択肢は、一般的に正解になりにくい傾向がある。一つでも他の事例や例外があれば、不適となるからである。筆者がカウントしたかぎりでは、試験問題にこうした選択肢の広がりがかかなり見られた。第1回では、全250選択肢のうち40選択肢に見られた。このうち正答選択肢となっているのは、1つだけ（I-1-エ「神仏分離を行い、神社と寺院は明確に分けられることに」）だった（下線は筆者による。以下、同じ）。第2回では、37選択肢に見られ、正答は2つだけ（II-27-オ「（モルモン教・エホバの証人・キリスト教科学は）いずれも19世紀にアメリカで生まれた」、II-36-エ「（イスラームでは火葬は）特に忌避される」）だった。第3回になるとやや減り、20選択肢（正答は0）だった。第4回は17選択肢（正答0）だった。具体例を挙げよう。III-3の伊勢神宮の式年遷宮を問う問題では、

ア 遷宮というのは伊勢神宮だけで行われる特殊なものである。

イ 伊勢神宮の遷宮は20年に1回行われ、これは千年以上にわたって一度も断絶することがなかった。

エ 遷宮が終わったあとは、古い社に使っていた木材等はすべて焼却される。

の3選択肢が不適である。もちろんこれは結果論であって、場合によっては「だけ」「一度も～ない」「すべて」というケースもありうる。また、II-48は、

ア 20世紀以降に誕生した宗教は評価が定まっていないため研究対象としないことになっている。

イ 地域社会で伝承されてきた年中行事や人生儀礼、芸能なども研究対象とされている。

ウ 研究の客観性を保つため、宗教学者は現在生きている宗教者を研究対象とすることはない。

エ 文字資料が残っていない古代の宗教は、研究対象からはずされている。

オ いくつかの宗教を対象として比較研究をおこなうことは、重要な研究方法のひとつと考えられている。

という問題であり、ア・ウ・エが不適である。「○○国・地域には△△教の信者はいない」（I-22-イ・ウ、I-25-ウ、III-21-オ、III-28-オ、III-35-オ、IV-32-オ）といった選択肢も軒並み不適となっている。また、枝葉末節となるが、III-35-ウは「エルサレムはユダヤ教とキリスト教にとっては聖地であるが、イスラームにとってはメッカのみが聖地で、エルサレムには特に宗教的意味はない」という不適選択肢であるが、これはやや不自然である。この選択肢が適切なら「メッカのみが聖地である」で結べばいいのであって、「エルサレムには特に宗教的意味はない」というのは、実際にはあるのを裏返したがゆえである¹⁵。ここで指摘したいのは、まだ回が浅いため作問にこなれていないということではない。また、一選択肢あたり12秒ほどで読み解かなければならないなか、このようなことを気にしていただけないという向きもある。そうではなく、特に不適選択肢を作ることの困難性についてである。それは現実の宗教文化・宗教現象が多様であるからに他ならない。宗教人口分布にかぎって

も、ある地域にある宗教の信者がひとりもいない／いなくなったということは現実的には考えにくい。もちろんなかには前述のタブー・戒律や「これまでに一度も～ない」といった堅く守られているような事例もあろう。だが、これですらタブーを守らないこと・人もあるわけで、現実的には多い／少ない、～～という傾向があるという程度問題である。こうした構造的背景があるため、実は宗教文化について適・不適を判断する——特に意図的に不適選択肢を作成することには困難性がともなうのではないかということを描きおきたい。

以上、第1回～第4回の宗教文化士試験の内容を分析してきた。過去問分析という性質上、諸特徴・論点・傾向を列記する形になってしまったが、同試験において何が求め問われているかを把握できたと見えよう。

3. 宗教文化士試験問題と高校地歴・公民分野との連続性と差異

続いて本節では、前節の過去問の内容分析を踏まえた上で、そこで問われている内容の水準について考察したい。既述のように、宗教文化士試験は、主に大学での宗教文化教育を前提としている。すなわち、高校までの(宗教に関する)教育を受けた学生が、宗教文化に関する授業を受け、学習・理解をした上で到達すべき内容が、試験問題に盛り込まれていると一応は考えることができる。よって、そのためには、高校までの学習内容によって試験問題をどれくらい解け、どれくらい解けないか、つまりその連続性と差異を捉えておく必要があるのである。

もちろん高校までの教育の内容といっても一様ではない。ここでは公立・私立・宗教系私立を問わず何らかの形で必修の「宗教知識教育」である、地歴・公民分野の内容に範囲を限定したい。基準として用いるのは、山川出版社の日本史、世界史、地理、倫理、政治・経済のそれぞれの用語集である¹⁶。これらの用語集は、各教科の現行の教科書すべてから重要語・キーワードを選び出して編まれたものである。よって、高校生特に受験生に広く用いられていること、センター試験の地歴・公民科目や各大学の地歴・公民受験問題の内容にもよく対応していることなどから、ある程度の網羅性と妥当性は確保されていると言え、広く参照できる資料の範囲で基準として用いるには最も適していると考えられる。

ここで再び、表2～5を参照してほしい。各設問テーマ横の「地歴公民」欄の科目名は、高校地歴・公民科目の内容との連続性を示している。記載基準としては、各設問の5選択肢のうち正答の2選択肢の内容が各用語集に載っている場合(つまりその科目で扱った内容によりその問題を積極的に正解できる)、ならびに不適も含む3選択肢以上の内容が載っている場合、とした¹⁷。もっとも、用語集に断片的に載っているからといって、必ずしも学習済みとは言えないだろうし、それで正答できるとは限らないので、あくまで目安と考えたい。第1回では33問、第2回では23問、第3回では22問、第4回では18問が該当すると判断した。ただし、科目が日・世・地・倫・政に広くわたっているため、当該回の問題が高校レベルの理解で易々と回答できるということを意味するのではない。以下では、前節で述べた領域・テーマごとに地歴・公民分野の内容との関連を探りたい。

まず注目すべきは、「日本の宗教」領域の設問と、日本史・倫理内容との相性の良さである。例として、「南無妙法蓮華経」の意味を問うⅢ-4や、日本仏教と中国との関係などを扱う、

ア 「天台宗に関心があるようですが、天台宗はもともと中国で形成されたものですか

ら、日本に伝わった経緯をきちんと調べたらいいでしょう。』

イ 「奈良仏教に関心があるようですが、奈良時代の仏教は朝鮮半島から伝わったもので、中国からの影響はまだありませんでした。」

ウ 「平安時代に中国に行って密教を学んだ僧侶について研究したいなら、まずは空海のことを調べたらいいでしょう。」

エ 「鎌倉時代に中国にはない日本独自の宗派を開いた人を調べたいなら、栄西か道元がいいでしょう。」

オ 「江戸時代にも中国から新しい宗派が伝えられました。時宗と呼ばれるもので、隠元という中国の僧が伝えましたから、彼のことを調べたらどうですか。」(Ⅲ-5、正答はア・ウ)

といった、特に「日本宗教史」関連の設問(Ⅰ-8など複数)の多くは、日本史・倫理履修者なら比較的容易に正答できるだろう。

次に、これは領域横断的ではあるが、「アジアの諸宗教」のうちの儒教・道教等や「仏教」「ユダヤ教」「キリスト教」「イスラーム」「ヒンドゥー教」など世界の諸宗教の基礎に関わる問題は、倫理の内容で解けるものも目立つ。仏教に関する、

ア 「三宝」とは、仏教において帰依の対象となる3つの宝を意味し、具体的には仏・法・僧のことである。

イ 「四聖諦」とは、苦の状態から悟りに至る道筋を示した仏教の根本的な教えの1つであり、苦諦・集諦・戒諦・道諦の4つの真理を意味する。

ウ 「四苦」とは、人間だれもが向かい合わなくてはならない災老病死の四つの苦を意味する。つまり、災いにあうこと、老いること、病になること、死である。

エ 「五戒」とは、仏教においておもに在家信者が守るべき5つの戒であり、具体的には、「不殺生戒」・「不偷盗戒」・「不邪淫戒」・「不妄語戒」・「不飲酒戒」からなる。

オ 「六道」とは、地獄界など6つの世界のことであるが、人間界はここには含まれない。(Ⅳ-13、正答は、ア・エ)

といった問題や、比較宗教的な、

ア 仏教において、在家信者の五戒として知られているのは、不殺生戒・不偷盗戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒である。

イ 旧約聖書の創世記には、「人類は兄弟であるから、皆仲良くしなさい」という神の命令が最初の方にある。

ウ イスラームの戒律の特徴は、宗教家など特別の人には限定されたものではなく、すべてのイスラーム教徒がまもるべき規範であるということである。

エ 「父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信」は一般に五倫と呼ばれ、中国の老荘思想の中心的教えの一つである。

オ カトリック教会では結婚も離婚も、ともに秘蹟の一つであるので、教会で行われる。(Ⅲ-39、正答は、ア・ウ)

やⅢ-47、Ⅳ-36、陰陽五行説を扱ったⅣ-24、ジャイナ教を扱ったⅣ-26、世界神話を扱ったⅣ-43なども、倫理履修者にとっては比較的容易である。

というのも倫理には、大項目として「源流思想」があり、そのなかでギリシア神話・ユダヤ教・キリスト教・イスラーム・ヒンドゥー教・仏教・儒教・老荘思想などの思想面とその

用語をかなり詳しく扱うのである。また、日本の思想のなかでは神道的世界観、奈良・平安・鎌倉仏教、国学、内村鑑三などを扱う。西洋思想のなかには宗教改革の項目もある。よって、倫理履修者、かつ日本史や世界史も併せて履修し歴史方面の理解も進んでいるような場合には、かなり解ける問題が増えてくるのである。

続いて、「キリスト教」関係のものは、世界史科目における西洋史の比重が大きいこともあってか、

ア トルコのイスタンブールにあるアヤ・ソフィアという建物は、かつてイスラームのモスクであったが、現在はギリシア正教の大聖堂である。

イ イングランド南東部にあるカンタベリー大聖堂は、イギリス国教会の有名な教会である。

ウ クロアチアにある聖ヤコブ大聖堂は、東方正教会に属する古い教会である。

エ ドイツのケルンにあるゴシック建築で有名な大聖堂は、プロテスタントの教会である。

オ 世界遺産となっているフランスのシャルトル大聖堂は、中世にできたカトリックの教会である。(Ⅲ-29、正答はイ・オ)

や、Ⅲ-25、Ⅲ-27 など、各国とキリスト教との基本的関係がつかめていれば解けるものが目立つ。また、中国仏教史上の人物、鳩摩羅什・玄奘三蔵を扱ったⅣ-25 なども世界史での重要項目であるため、回答は容易と思われる。

次に、「分布」「各国」などのキーワードがある設問には、地理と世界史の内容が適しているといえる。

ア 南アフリカに社員を派遣するとき、学生時代にイスラームについて学んだ社員を選ぶ。

イ パキスタンに社員を派遣するとき、学生時代にキリスト教について学んだ社員を選ぶ。

ウ イスラエルに社員を派遣するとき、学生時代にユダヤ教について学んだ社員を選ぶ。

エ エジプトに社員を派遣するとき、学生時代にイスラームについて学んだ社員を選ぶ。

オ ミャンマーに社員を派遣するとき、学生時代にヒンドゥー教について学んだ社員を選ぶ。(Ⅰ-41、正答はウ・エ)

や、Ⅲ-20、Ⅳ-42 のようなシンプルにその国・地域の宗教分布を問うものである。これも地理・世界史において、その国の宗教背景について目をやっておけば回答できよう。

他方、残された政治・経済で扱う内容と、試験問題内容との重複はほとんどない。政治・経済において宗教が関連するのは、日本国憲法のところの「信教の自由」「政教分離」「津地鎮祭訴訟」「靖国神社公式参拝」「神道(神社神道)」など程度である。過去問では、Ⅱ-41-オ「戦前の日本では、主な神社は国家により管理されていたが、戦後は政教分離の原則に基づき、国家によって管理されることはなくなった」や、Ⅱ-14-ア「現在の憲法においても、日本では「信教の自由」は正式には認められていない(不適)などごく一部の選択肢が対応するのみである。政治・経済履修者に連続性はほぼないのが現状である。

では、以上のようなある程度の連続性を捉えた上で、それならどういった内容が地歴・公民の内容の範囲内で扱われておらず、大学における宗教文化教育における上積みとして要されているかを考えてみたい。

これも前節の区分に従えば、まずは「日本の宗教」のなかの「基礎知識・作法・習俗」に関わる内容である。日本史を学べば、歴史的変遷や出来事や祖師・宗派の名前などは理解できる。だが、神社や寺院の造り、参拝の際のマナー、冠婚葬祭の変化、年中行事の由来、民俗宗教・民間信仰的な内容などについて、中学・高校において「宗教教育」を受けることはなかなかないのではないだろうか。そして、こういった「他文化」になりつつあるような「自文化」について、外国人に問われた時にどう説明するか／できるか、という問題意識が底流にあるようである。これは、大学における宗教文化教育として想定されている内容の大きな一角を構成するものと思われる。

次に、これも前節で捉えた「タブー・戒律に関する理解の重視」である。確かにイスラームやユダヤ教、ヒンドゥー教については倫理や世界史などである程度は学ぶ。しかし、現実には職業等を含めて付き合う・向かい合う場合にまず留意すべきは、歴史や諸概念などではなく、飲食や衣装、身体接触等を含む生活文化や習慣である。試験問題では、特にその点が反復して重点的に問われているのである。

そして最後に、「各国」・地域の宗教「分布」と現状である。これも、地理・世界史履修者にはおなじみの理解もあろうが、特にそのウェイトが「いま」に置かれていることに注意が必要だ。現在の中国の宗教状況や政策はどうか、韓国キリスト教の現在はどうか、イスラーム諸国の現状はどうか、そういった点の理解については、大学における教育が期待されているのだと言ってよいだろう。

以上が、高校地歴・公民教育との差異であり、大学における宗教文化教育の内容として期待されている内容と考えられる諸点である。第1回から第4回まで回を追うごとに、高校地歴・公民分野の内容だけで解ける問題は減ってきている。これはすなわち、それだけ大学における宗教文化教育に求められる内容のウェイトが大きくなってきているということであろう。

おわりに

以上、第1回～第4回の宗教文化士試験の問題内容を分析し、その領域ごとに扱われているテーマをまとめて傾向を捉えてきた。また、高校地歴・公民科目の内容との比較検討を行い、その連続性と差異を明らかにしてきた。分析内容については、ここでは繰り返さない。

ここまで分析を進めて考えるのは、では自らの授業内容をどう（再）検討・点検しているか、ということである。もちろん、宗教文化士試験の合格が最終目標ではないし、試験に出そうなことだけを扱えばそれで足りるのではない。だが、参照軸ないし共通のプラットフォーム的に、同試験で、そして宗教文化教育で、何が目指されようとしているのかをつかんでおくことは（特に筆者のようにキャリアの浅い教員＝宗教研究者にとって）無駄ではないだろう。本稿で提示したデータが自ら以外に少しでも参考になるなら、幸いである。

また、高校地歴・公民科目の内容との連続性を捉えた点も、独自の意義があるように思える。具体例は省くが、筆者の少ない経験から言えば、高校までで扱ったような内容を「宗教（社会）学」の視点や文脈から、たとえば「宗教に関する問題」として提示・説明すると、学生からは「新鮮だった」「驚いた」という反応を聞くことがしばしばある。目の前の学生が受けてきた教育・科目とその内容や水準は当然さまざまであるが、高校までにどういうことが扱われているかについて、教員側は無頓着ではいけないように思う。この側面の分析も

今後さらに進めたい。

そして、これからも進められるであろう宗教文化教育——宗教文化士試験の問題内容の分析も継続し、その目指すところを追っていきたいと考える。

注

- 1 宗教教育の従来的な類型や議論については、菅原伸郎『宗教をどう教えるか』朝日選書、1999年を参照。その従来的な枠組が「宗教文化教育」により刷新される可能性については、井上順孝「グローバル化・情報化時代における宗教教育の新しい認知フレーム」『宗教研究』85-2、2011年、111-136頁を、「宗教文化」概念の教育ならびに宗教研究における有効性・可能性については、土屋博『宗教文化論の地平—日本社会におけるキリスト教の可能性—』北海道大学出版会、2013年を参照。
- 2 そうした宗教文化に関する授業内容の研究の取り組みについては、平藤喜久子「「宗教文化の授業研究会」の試み」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』4、2011年、55-62頁を、教材開発の取り組みについては、今井信治「教材開発の現状報告」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』4、2011年、63-71頁などを参照。
- 3 同科研サイト (<http://www2.kokugakuin.ac.jp/shukyobunka/index.html>) を参照。
- 4 宗教文化教育推進センターサイト (<http://www.cerc.jp/>) を参照。以下、同サイトコンテンツの紹介・引用は、「CERCサイト「(項目名)」を参照」と示す。
- 5 宗教文化士制度の発足までの展開やその意義等については、井上順孝「「宗教文化士」制度の発足へ向けて」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』3、2010年、29-36頁、同「宗教文化士制度発足への歩み」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』4、2011年、37-43頁、土屋博「宗教文化士資格認定制度の意義と展望」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』4、2011年、31-35頁などを参照されたい。
- 6 第1回から第4回までの認定試験の問題（記号選択式・論述式）ならびに解答については、CERCサイトに公開されているので、本稿ではこれを用いる。CERCサイト「教材」→「過去問題集」を参照。
- 7 CERCサイト「宗教文化士とは？」を参照。
- 8 CERCサイト「単位認定・到達目標」を参照。
- 9 CERCサイト「宗教文化士資格取得者の所属・修了大学」を参照。
- 10 CERCサイト「新聞・雑誌などでの紹介」を参照。
- 11 各回論述式問題の実際の設問文・選択肢文は、CERCサイト「教材」→「過去問題集」→各回の「論述式」を参照。
- 12 第1回過去問の記号選択式問題の回答には、「(設問に曖昧な点があったとして)「ア、オ」に加え、「ウ、オ」も正解とすることにしました」とある。また、第2回・第3回にも、作問ミスなどから1つの選択肢が合っていればその設問を正解とするとした箇所がある。
- 13 CERCサイト「教材」→「過去問題集」→各回の「記号選択式」を参照。
- 14 これは宗教文化に関連する映画・世界遺産・文学・美術などを入口／媒介にして、より理解を深めようという宗教文化教育の方針に裏打ちされている。CERCでは、これに関連したデータベース類の構築と教材としての提供作業が進められている。CERCサイト「教材」→「各種データベース」→「世界遺産と宗教文化」「映画と宗教文化」などを参照。
- 15 他にも、II-5-A「(お寺には) 仏像が一体だけあります」・ウ「仏像は複数の場合もあります」など、同一設問あるいは別設問の間で相反する選択肢が見られる場合もある。
- 16 全国歴史教育研究協議会編『日本史B用語集 改訂版』山川出版社、2009年、全国歴史教育研究協議会編『世界史B用語集 改訂版』同、2008年、地理用語研究会編『地理用語集 改訂版』同、2009年、濱

井修監修・小寺聡編『倫理用語集 改訂版』同、2009年、政治・経済教育研究会編『政治・経済用語集 改訂版』同、2009年を用いる。なお、「現代社会」科目については、現代社会教科書研究会編『現代社会用語集 改訂版』同、2008年の掲載項目を検討したが、宗教思想の領域では倫理と、憲法の信教の自由と政教分離規定の項目では政治・経済と、内容的には大差ないあるいは簡潔にしたものと判断したため、本稿では省略したい。

- 17 高校地歴・公民教育における「宗教」に関する内容についての批判的分析は、藤原聖子『教科書の中の宗教—この奇妙な実態—』（岩波新書、2011年）などを参照。なお、筆者自身は日本史、世界史、倫理、政治・経済を履修した経験があり、どの科目でどういった内容が扱われているかについては（やや時間的な隔りがあるものの）、遡及的に用語集の内容を確認することなどを通して、ある程度捉えられている。また、2000年代中盤には予備校・進学塾において倫理の集団授業を担当した経験があり、その扱う内容ならびに主にセンター受験を念頭においた際の高校生の理解度・達成度についても、把握できていると考える。以上に基づく、各設問・選択肢に対する判断であることをことわっておく。

神社年中行事の成立過程について ——二十二社・一宮の農耕行事に焦点をあてて——

鈴木聡子

はじめに

神社では古くから様々な行事が行われているが、毎年恒例で行われる行事を神社年中行事という。神社年中行事に関するこれまでの研究では、個別の行事や個別の神社における行事については多くの研究があるが、ひろく神社を網羅的にみた上で、特定の時代における神社年中行事の歴史的事実をとらえようとする研究は行われてこなかった。

このような問題点を踏まえて、私はこれまで、古代から中世への移行期に全国の神社の中でも中心的な存在であった二十二社や一宮の年中行事に関して、主として成立の問題に視点を据えて研究してきた。

その中で、何れの場合も共通して、農耕行事、節日行事、仏教法会の三種を恒例行事として成り立っていたことを指摘し¹、なかでも節日行事（正月元旦、正月7日、正月15日、3月3日、5月5日、7月7日、9月9日）について、各社の神社年中行事書から、中世では年間を通して最も大きな行事として行われる例が多く、神職組織の序列化や秩序の確認の機能を果たす重要な行事として位置づけられていた事を明らかにした²。

また、神社節日行事の成立時期は、11世紀半ばから12世紀にかけてと考えられ、例えば春日社では藤原氏長者、また宇佐宮では大宰権帥が、それぞれ当時の社会的変動の状況を反映させつつ創始したことを明らかにしてきた³。この他、宮中の節日行事である相撲節会が、12世紀以降、宮中では行われなくなる一方で、国家祭祀である公祭を行う二十二社を中心とする神社に移され、宮中との関係性を有する宮中行事の一環として相撲行事が行われるようになったことも明らかにしてきた⁴。

では、節日行事とともに神社年中行事の柱の一つであった農耕行事は、いつ形成され、神社年中行事のなかでどのような位置づけにあったのだろうか。本稿では、まず、古代より国家との関わりの深い二十二社と宇佐宮を対象に、農耕行事の内容を比較し、この点について考えていきたい。

第1章 神社における農耕行事の比較

平安時代以降、中世までの神社年中行事を確認できる史料が残されている神社は、賀茂別雷神社⁵・松尾社⁶・春日社⁷・石清水社⁸・住吉社⁹・宇佐宮¹⁰などがある。

これらの神社の年中行事書から特に稲を中心とする農耕行事をみていくと、一年の農事暦に合わせて春に稲の豊作を願うための「年穀を祈る行事」にはじまり、「田植えや田遊び関連の行事」がおこなわれ、7月から11月にかけて「稲の収穫行事」がおこなわれていることがわかる。（表1「神社年中行事書からみた各神社の農耕行事一覧」参照）

表1 神社年中行事書からみた各神社の農耕行事一覧

神社名	月日	行事名	行事概要	備考
賀茂別雷神社	1月14日	御開会神事	賀茂社周辺地域にある愛宕郡八ヶ野郷(河上郷・大宮郷・小山郷・中村郷・岡本郷・小野郷)の神領から、神前に神饌を供える神事。各郷から御開に入った神饌を各郷一台ずつ神前に奉納して神職が各々の名主の名を祝詞で読み上げる。	備考 愛宕郡八ヶ野郷は、寛仁元年(1017)に後一条天皇が賀茂社に寄進した神領であるため、この神事は、寛仁元年以降に形成されたものか。
	2月吉日	土解祭	卜占によって、その年に播く稲種を決めて載い、初をこく所作をし、その後、御田に播種して、稲の豊作を願う予祝行事。	
	4月吉日	うまの御まつり	4月吉日に神殿の御戸開きをして神事を行い、糺社・澤田社の前においても座を設け神事がおこなわれ、神職の社務・祝が御田へ行き苗を植える田植え祭を行う。	
	6月吉日	御手代神事 (社務・禰直方)	6月に行われる田遊び神事の御手代神事では、神職の社務(神主)・禰直方が中心となって神事を行う。①、初夜に社務社家の家において「一夜々あそび」をする。②、晩には、御田にて「苗植」をする。③、翌日には、御田において「ひるあそび」をし、次に本殿において神事を行う。その後、神領にて「御田植え」を行う。④、③の翌日の朝に、社務邸にて猿蓑や能を行う。⑤、④の翌日に、正禰邸にて猿蓑、能を行う。	
	7月吉日	御手代神事 (祝方)	神前で神事のうちに、早稲の豊宴がなされる。近世期には、神前に当年の新米を供えるなど、稲の収穫感謝の行事となっている。〔賀茂大神宮年中神事次第〕。	
松尾社	11月中旬卯日 (相嘗会)	さうしやうふ (相嘗会)	神前で祝詞を奏上し、神前での神事後、酒二献六升御肴二種などある。	近世期の松尾社の年中行事には新年神事は行われていない。〔松尾社年中行事次第〕 初見史料は、安貞元年(1227)9月6日の「官宣旨案」〔松尾社大社文書〕。
	2月初酉日	祈年神事	神前で祝詞を奏上し、神前に当年の新米を供えるなど、稲の収穫感謝の行事となっている。	
	6月吉日	御田代御神事	御田代御神事が行われる当日を中心に前後三日間行われる神事。①前日には、神職(正禰直)が中心に神饌を調え神前に奉り、祝詞を奏上してその後、庁屋で御料をわけける。②当日は、社務が神饌を調えて神前に奉り、祝詞を奏上し、その後、猿蓑・田菜などで囃されながら禰直が田植えをする。その後、豊宴をする。③後日、神職(正祝)が中心となって①と同様の次第をする。	
春日社	7月14日以前	春上神事	この年の新米を神前に奉り、祝詞を奏上して、その後、神職を中心に豊宴をおこなう。	長寛元年(1163)に創始〔鑑勝記〕
	1月18日	田産之義	巫女達が田植えをおこなう	
石清水社	5月15日	(※田植神事)	中世の神社年中行事書にはみられないものの、近世期の行事書「石清水八幡宮年中行事」5月15日条に「田植神事」が行われる。近代に編纂された「山城国綴喜郡誌」には、「往昔より男山八幡宮の祭典の重要なもの、厄神祭、初卯御神楽、臨時祭、神田植、高良祭、放生会、安居祭、之れを七大祭という」とあり七大祭の一つに田植の行事として重視される	4日間行われる祭礼で、住吉社は、摂津国一宮でもあるため、在庁官人が行事に参加している様子がうかがえる。
	2月2日～6日	祈年御祭	2月4日は、神職中心におこなわれる祈年御祭で、神前にて、神饌を奉り、御幣を奉り、祝詞を奏上する。翌日の2月5日は「国御祭」と称して、在庁官人が神社に参り、幣を進めて拝し、祝詞を奏上する。その後、国方東遊、や国司慶などがあり神職や官人達が豊宴をする。	
住吉社	4月吉日	御田植	三日間行われる。①御田植行事の前日は、神職の惣官邸、権官邸にて、咒師猿蓑等の遊びあり。②当日は、神殿にて神事の後、御田にて「田渡」「田菜」「猿蓑」などあり。③次日は、惣官邸と権官邸にて遊びあり。	新年御祭と同様、摂津国一宮である住吉社に在庁官人や国掌が参加して行事が行われる。卯田・辰日も神前の御戸開をして神事が行われる。
	11月丑日～午日	相嘗御祭	卯日は、神職中心におこなわれる「社祭」で、神前に神饌を奉り、幣を取って4度再拝し、禰直が祝詞を奏上する。二三四御前においても奉幣あり。辰日は、「国祭」で在庁官人や国掌が参加して、奉幣や神馬走廻しなど行う。	
宇佐宮	6月中旬日	御田産事	神職達と宇佐宮の封郷である四郷の神領から選ばれた田人らとともに御田において、田植え行事と酒を飲みかわす酒杯が行われる。	保安4年(1123)に創始〔宇佐宮齋会式〕
	8月初己亥日	大嘗会	宇佐宮の神職達によって、御炊殿において米を供えた後、豊宴する。	

(各神社の神社年中行事書より作成)

(1) 古代国家における農耕行事の位置づけ

『日本書紀』『古事記』のなかで、豊葦原之千秋長五百秋之水穂国または葦原千五百秋瑞穂国とも呼ばれたこの国では、古来より稲そして稲作は、単なる作物や農作業以上の重要性をもっていた。

日本の稲と稲作は神々によってもたらされたと神話には伝えられ、『日本書紀』によると、天照大神が瓊瓊杵尊の天孫降臨に際して、地上に蒔くようにと高天原の「斎庭の穂」を授けたという¹¹。また、『日向国風土記』逸文には、瓊瓊杵尊が高千穂山で稲穂を四方に蒔くと、闇一色の世界に光がもたらされたとする伝承を記している¹²。これらの神話からは、稲や稲作が人間社会の秩序の源と考えられていたことがわかる。稲作とは、本来単なる農業という産業の問題ではなかったのである。

古代国家において律令祭祀制度が整えられていくなかで、『類聚三代格』太政官符、寛平5年(893)3月2日条に「二月祈年、六月十二月月次、十一月新嘗祭等者、国家之大事」とあるように、年穀を祈る祈年祭、月次祭、収穫祭である新嘗祭という農耕に関する祭は、「国家之大事」と位置づけられていた。この他にも新嘗祭に先だって11月上卯日に特定の神社に国から新穀などの幣物を神に供える相嘗祭が行われた。

また、6月12月晦日に宮廷において百官以下人民に至るまでの罪や穢れを解除するために朱雀門前で大祓の行事が行われる。この行事の際に奏上される『延喜式祝詞』大祓条の一節には、人々が犯す罪が社会的に最も重大な罪「天つ罪」と、それ以外の普通の罪「国つ罪」の二つに区分されている。このうち天つ罪とは、田のあぜを壊す罪「畔放」・田に水を流す溝を埋める罪「溝埋」・田に水を送る竹や木の管を壊す罪「樋放」・穀物の種をまいてある上へ重ねてまいて成長を妨げる罪「頻蒔」・農耕の労働力となる家畜に先のとがった串を刺して殺す罪「串刺」・家畜の皮を生きたまま剥ぐ罪「生剥」・家畜の皮を尾の方から逆さまに剥ぐ罪「逆剥」・肥料の尿に呪いをかけて農耕の妨害をする罪「屎戸」の8種類の罪とされており、稲作を妨害して破壊する行為が人々の犯す最も重い罪と認識されていたことが理解できる。

このように、稲作は古代国家の存立にとって重要な要素とみなされ、農耕行事は律令祭祀の中で最も大事な行事としておこなわれていた。

(2) 対象神社の比較

さて、各神社で行われている農耕行事に視点を戻して表1をみると、春日社・石清水社・宇佐宮では年穀を祈る行事がおこなわれていないことと、稲の収穫に関わる行事についても春日社・石清水社では恒例行事として行われていないことに注目される。ここから、律令祭祀で最も重要視されていた祈年祭や稲の収穫祭に対応する行事が、平安時代以降の中世における神社年中行事のなかで、必ずしも行われていなかったことがみえてくるのだ。

一方で、田植え・田遊びに関わる行事についてみると、共通して神社年中行事として行われていたことがわかる。この行事は、古代の国家祭祀にはみられない行事であるが、いつごろから神社年中行事として形成されたのかについては、明らかにされていない。ただ、そのなかでも、春日社と宇佐宮では田植行事を12世紀に創始したと伝えている。また、松尾社の御田代御神事は嘉禄3年(1227)を初見とし、その後の史料からは、貴族が松尾社の田植えの祭礼を見にいくほどに都では有名な恒例行事となっていたことがわかる¹³。

全ての農耕行事において共通性が見られるわけではないが、田植行事に関していえば、春日社、宇佐宮、松尾社の3社では12世紀～13世紀の比較的早い時期に創始が伝えられたり初見史料がみられ、その形成期に共通性が認められる。だとすれば、この3社の行事内容を比較検討することにより、神社年中行事における農耕行事形成の歴史の実態がみえてくるのではないだろうか。

そこでまず、次章では松尾社に焦点をあてて農耕行事の性格を概観し、これらの行事が神社年中行事の構成上どのような位置づけであるのかをみていきたい。

第2章 松尾社・春日社・宇佐宮における農耕行事

(1-1) 松尾社の神社年中行事書にみる農耕行事

松尾社における神社年中行事を知ることができる最も早い時期の史料は、永和2年(1374)に編纂された『松尾社年中神事次第』である。

この年中行事書にみられる稲作に関する行事は、2月初酉日の「祈年神事」、6月吉日の「御田代御神事」、7月吉日の「春上神事」の3つの行事である。これらの各行事について概観していきたい。

—2月初酉日の「祈年神事」—

『松尾社年中神事次第』2月初酉日祈年神事条によると「月読禰宜祝勤仕神事也。大床にてまいる。祝言申。御まかり有て、其ま月読社へ皆参す。(略)」とみえ本社において撰社である月読社の禰宜と祝が中心となって社殿の大床にて祝言(祝詞)奏上などの神事を行い、その後、月読社へ場を移して神事を行う様子がみえる。また、同条によると、その後、庁屋において神職達によって酒などで饗宴を行っている様子がみえる¹⁴。

そもそも松尾社の祈年神事の「祈年」という名称は、律令祭祀の祈年祭と同じで、「年」は「稔」に通じて穀物の実りを祈ることを意味する。国家行事としての祈年祭は、『令義解』によると「謂。祈猶_レ禱也。欲_レ令_レ歳災不_レ作。時令順_レ度。即於_二神祇官_一祭之。故曰_二祈年_一。」とあり、凶作が起こらずに天候が順調であることを願ひ神祇官で祭り、それゆえに祈年祭というと説明して年穀を祈願する祭祀としている。元来の祈年祭は、2月4日に全国の祝部が神祇官に参集して中臣・忌部氏が中心となって祭祀を執り行い、祝部に幣帛を頒つ班幣制度であった¹⁵。

また、『延喜式祝詞』祈年祭条では、様々な神に対し祈願をするが、そのなかで稲の実りをつかさどる「御年皇神等」の神々に対しては、「手肱_ル水沫畫垂、向股_ル泥畫寄_ト取作_牟奥津御年_乎、八束穂_能伊加志穂_ル皇神等_能依_{左志}奉者、初穂_乎波_{千穎}八百穎_ル奉置_ト、扈閑高知扈腹滿雙_ト、汁_ル母_穎穎_ル母_{稱辭}竟奉_牟。大野原_ル生物者甘菜辛菜、青海原生物者鱒_能廣物鱒_能狭物、奥津藻葉邊津藻葉_ル至_ト耳_{御服}者明妙照妙和妙荒妙_ル稱辭_竟奉_牟。御年皇神_能前_ル白馬白猪白雞、種々色物_乎備奉_ト、皇御孫命_能宇豆_乃幣帛_乎稱辭_竟奉_{久登}宣」とあるように、人民が苦しなから耕作して立派に豊かに実った稲を、神々が国を統治している歴代の天皇に授けるのであれば、その年の最初に収穫された稲を沢山奉り、またその米で酒をつくり大きな瓶の口から溢れ出るほどにいっぱい満たしてならべて、神前に捧げ奉るとする旨が見える。さらに野菜や魚類、海藻類や衣服の料も備えて奉ることを神々に奏上する。

このように「祈年」という言葉の意味と祝詞の内容から、国家行事の祈年祭が年初めの豊

穰祈願を目的とする祭礼であることは明らかで、「祈年神事」と称する松尾社の行事もまた、稲の豊穰祈願を目的として行われたものと理解できる。

中世の神社年中行事としての松尾社の祈年神事に関しては、国家祭祀との直接的な関係を示唆する史料は確認できない。そして、中世までに国家の祈年祭は、次第に祝部不参などによって班幣制の形骸化が進み、実質的には神祇官の自己完結的な祭祀に変化していた¹⁶。言い換えれば、祈年祭の対象神社の祝部らは、神祇官に赴いて祭祀に参加することはなくなっていたのだ。このことは、中世においては、国家行事である祈年祭と神社（官社）との直接的な祭祀上の関係性はなくなっていたことを示す。

このような時期に松尾社が神社年中行事として「祈年神事」を行っていたのだが、これは、官社として律令祭祀における祈年祭の重要性を神社側（松尾社）が認識して、たとえ国家との直接的な関係性はなくなっても意識的に独自に継承していたからではないだろうか。

—6月吉日「御田代御神事」—

6月に行われる御田代御神事については、『松尾社年中神事次第』に次のように記されている。

一当日御供、社務調進也。祝言申、御まかり有。

次御田植有。御苗を三荷、祝言の屋ニつくゑニすへて置奉り、土にて祝言申。

次ニ御苗をうゑめの方へくはる。猿楽・田楽、笛つつみにて御田植をはやす也。

次ニ庁屋有上きやうをつくゑにてすゆる。酒三献。正官三人、月読禰宜祝の下人方へ酒殿の方よりにこりさけを出す。当座よりも上酒を一ひさけ宛出す。権官以下の下人の方へハ出さす。

神事の当日は、御供（神饌）を社務が調べ進まつり、祝詞奏上を行う。その後、御田植に用いる御苗を机に置き、その場で祝詞を奏上し、苗をうゑめ（植女）に配り猿楽・田楽・笛鼓によって囃されながら神職から配られた御苗をもった植女が御田植を行う。御田植ののち、庁屋において酒などによって饗宴をしていたことがわかる。

そして、この御田代御神事の初見史料である嘉禄3年（1227）9月6日の官宣旨には、以下のように記されており、この神事の位置づけがうかがわれる。

左弁官下松尾社

應_レ遣_一官使_一尋_中子細_上西七条保々神人等神事違例事

右、得_レ神祇官今月一日解状_一、被_レ社司去月廿二被解_一、當社之四月祭以下六月御田代、九日会神事者、為_レ葛野郡一郡之營_一①、不_レ限_一権門勢家_一、領札迎_レ之、御供并御田代植女敷設、九日会之相撲令_一勤仕_一者、往古例也。就_レ中西七條者、分保々六箇所、御輿迎之日、各令_レ調_一進御供_一、而又還御之日、神人等課役之勤、御供令_一調進_一者、又以例也。而近年或號_一頭人煩_一、或自由對捍、寄_一事於左右_一、大政所以下櫛谷保、七條一坊、同二坊同三坊、五箇所之御供并社司饗膳都以闕如畢。即不_レ奉_レ出_一御輿_一、而雖_レ可_レ言_一上子細神事之煩_一、旁依_レ有_一其恐_一、慙遂行畢。又祭之間常燈油、僞_一侍座_一六人輩、隨_一巡役_一令_一進濟_一之處、今年無_一合勺之所濟_一、又御田代

諸郷之植女之敷設 ②、同闕如畢。又九日会者、當社第一之大神事也 ③。樂人・舞人之儲、会新米追年未進、今年定令懈怠者歟。早賜官使、兼日相催、云会新米、云闕如之御供、早可調進之由、可被宣下也。望請官裁、早被遣官使、社家・神人相共令譴責者、且無後々違例矣。望請天裁、早任前宣旨、可被重宣下者。権中納言藤原朝臣頼資宣、奉勅、依請者、社宜承知、依宣行之。

嘉禄三年九月六日

大史小槻宿禰判

少弁藤原臣判

この官宣旨によると、下線部①で示すように、四月祭（松尾祭）と御田代御神事、九月九日会神事の行事については、松尾社が鎮座する葛野郡の一郡全体の営みであるとする。また、下線部②では、御田代御神事で苗をもって田植えをする植女についても、葛野郡内の諸郷から所役として奉仕することになっていた。

4月の松尾祭とは、平安時代より天皇にかわり勅使が松尾社に派遣され、祭祀を行なう公祭という国家の重要な行事として位置づけられていた¹⁷。また、下線部③で9月9日会は、松尾社の年中行事の中で「当社第一之大神事」とみなされていることがわかる¹⁸。この官宣旨からは、松尾祭と9月9日会に並ぶ重要行事として、御田代御神事が位置づけられていたことを知ることができる。

—7月14日以前「春上神事」—

7月に行なわれた「春上神事」は、『松尾社年中行事社務下行仕候次第』文明元年（1469）7月条によると、

新米ニテ五方同時ニ参ル也。十四日以前ニ参ル也。若新米出来サル年ハ古米ニテ御飯ヲ調、穂ヲ抜テ御飯ノ上ニ指也。

とあり、この春上神事においては新米が用いられ、もしその年に新米が収穫出来ない時は、古米を用いて神前に供えるための御飯を調べ、御飯の上に今年の新しい稲穂を抜いてさすがある。また、文明6年（1474）に編纂された松尾社の神社年中行事書『當社年中大小神』にも「此神事までハ社官等新米をもちゐす」とあり、収穫された新米を春上神事で奉るまでは神職達は新米を用いなかったことがわかる。時代は下るが近世期に編纂された『松尾社年中行事次第記』7月12日条には

新穀已成、薦之神前、日新嘗会 俗曰新米之神事或曰春上之神事 早朝、正祝一人往古社家悉集参勤、盥漱進階如恒、置案鋪□如例、次献上新稻之神饌 若新稻未成則乍穂薦之 事畢入御服所以為直会、無勸盃事、畢退去 案旧記曰、今日以前禁社司喫新米

と記され、中世まで「春上之神事」と呼ばれていた神事は、別名「新米之神事」とも言うが、それらがいずれも俗称であり、近世期には主として「新嘗会」と称されていたことがわかる。行事の内容は中世と同様に今年の新米を神饌として神前に奉る神事であるが、下線部

にあるように、この神事が行われる以前に神職達が新米を食すことは禁じられていた。

以上のことから、松尾社では春上神事が稲の収穫祭であることが理解でき、これを近世期になると新嘗会と称するようになり、古代律令祭祀の新嘗祭をより意識して対応させるようになったのだった。だが、本来の国家祭祀の新嘗祭は11月下卯日に行われていたのに対して、松尾社の春上神事は11月よりも四か月も早い7月に行なわれており、稲が実り始める時期の神社独自の行事となっていることに特徴がみられる。

(1-2) 神殿空間からみた松尾社の農耕行事の位置づけ

松尾社での稲作に関わる農耕行事について前項の(1-1)で概観したが、これらの行事は、松尾社の年中行事の構成のなかでは、どのような位置づけの行事であったのだろうか。

そもそも神社での行事は、神社で祀られている神に対して行われるため、特に祭神が鎮座する神殿空間を中心に執り行われる。そして、神殿のなかでも、どの空間において神職たちが行事をおこなうのかを更に詳細にみて行くと、各々の行事の重要性の度合いが明らかとなる。次に松尾社の神殿空間と行事の関わりについてみていきたい。

『松尾社年中神事次第』によると、松尾社の恒例行事は、神殿(本殿)の空間を内陣、下陣、大床の主として3つの空間に区分して執り行われていることがわかる。(表2「松尾社の神社年中行事と神殿空間一覧」参照)

—内陣— 松尾社の神殿空間のうち、内陣で行われる行事は、松尾祭、御神楽祭、正月元旦の行事などがあり、これらの行事は、朝廷から勅使らが派遣されるなど国家行事に関わるという共通性がみられる¹⁹。

—下陣— 下陣の空間においては、4月の松尾祭に先立って本社から御旅所まで神輿渡御をして御旅所で駐座する3月中卯の御輿迎御神事をはじめ、6月の御田代御神事や節日行事(3月3日、5月5日、7月7日、9月9日)が行われる。その中でも9月9日会や御田代御神事は、松尾社が鎮座する葛野郡一郡で営まれる行事として、郡内の人々が所役を担当するなど在地との関わりを持つ行事として、神社年中行事の中でもとりわけ大きな行事として位置づけられていた。

—大床— 神殿空間の3区分の中でも大床で行われる行事に関しては、内陣と下陣で行われる行事以外の恒例行事が該当するが、農耕行事の中でも祈年神事や春上神事は、大床において行われていた。

表2 松尾社の神社年中行事と神殿空間一覧

月	日	行事名・行事内容名	神殿空間
正	朔	御戸開・鏡餅	内陣
正	2	こわ物供奉	大床
正	3	こわ物供奉	大床
正	7	御こわ物供奉・白馬	大床
正	15	御こわ物・御粥供進	内陣
2	朔	石塔神事	大床
2	上酉	祈年神事	大床
2	15	踏歌御菓子	御前の庭上
3	2	三月三日御神事(正禰宜調進)	下陣

3	3	三月三日御神事（祝調進）	下陣
3	中卯	御輿迎御神事	下陣
4	上未	四月祭礼御神事	内陣
4	上申	四月祭礼御神事（御服参らす）	内陣
4	上酉	四月祭礼御神事	内陣
5	4	菖蒲神事（正禰宜調進御供）	下陣
5	5	菖蒲神事（正祝調進御供）	下陣
6	吉日	御田代御神事（前日の神事）	大床
6	吉日	御田代御神事	下陣
7	7	七月七日神事	下陣
7	吉日	春上神事	大床
9	朔	朔日神事	下陣
9	8	九日会神事	下陣
9	9	九日会神事（神輿渡御）	下陣
9	不定	六節神事	大床
10	朔	石塔神事	大床
10	16	御油の神事	大床
11	寅	御神楽神事	内陣
11	卯	御神楽神事	内陣
11	辰	なうらい	
12	吉日	御庚申神事	大床

（『松尾社年中神事次第』より作成）

この神殿空間については、まず、神殿の御戸を開いて下陣、その下陣より奥に進むとさらに御戸があり、その御戸を開くと祭神にもっとも近い内陣となり、この空間で行うものが、重要な行事ととらえられる²⁰。また、大床とは、外から神殿の階を昇った床の上の場で、神殿の御戸を開けずに神事を行うため、一番外側の空間である大床で行う行事は、内陣や下陣で行う行事と比べると簡略化された式次第で行われる行事といえる。

ここで、松尾社の農耕行事について視点を戻すと、中世において国家との直接的な関係はないものの、祈年祭や新嘗祭と対応している祈年神事と春上神事は、共に大床においておこなわれていたのに対して、神社独自の行事である御田代御神事は下陣で行われていた。このように神殿空間よりみると、3つの農耕行事のなかでも御田代御神事がより重視されていたことがみえてくる。

このような中世における松尾社の農耕行事の特色は、春日社と宇佐宮の年中行事にも同様に見出される。この2社でも、松尾社と同様に、平安時代に田植に関する行事が形成され、各神社の農耕行事のなかでも代表的な行事とされていた。次に春日社の農耕行事の特色について、見ていきたい。

（2）春日社における年中行事と田殖行事

春日社は、藤原摂関家を中心とする藤原氏の氏神社であり、藤原氏の氏長者が春日社の祭祀および社の管理をする権能をもっていた²¹。このため、春日社で行う祭祀は氏長者によって創始され、その多くは氏長者を中心におこなわれていた²²。

春日社における恒例の神社年中行事は、主に平安時代に形成されたことが特徴といえる²³。春日社で行われる農耕行事は、社家日記などから、正月に行われる田植行事を確認することができる²⁴。『濫觴記』によると「一、御田植始 人皇七十八代二条院御宇長寛元年未癸正月始而執行之（以下略）」とあり、長寛元年（1163）に創始されたとされている。この「御田植」が、どのような経緯で春日社の恒例行事としておこなわれるようになったのかは、史料的に明確にすることはできないが、春日社の行事が氏長者によって形成されたことを考えれば、当時の藤原氏長者であった藤原基実が創始したものと考えられることができる。

「御田植」の内容については、平安時代以降中世を通して詳細な史料はないが、春日社の社家日記に断片的に記されており、『中臣祐定記』の寛元4年（1246）正月18日条に、以下のような記述がある。

今日可有田植之義、行幸之還行御酉刻之間、入夜田植不吉之旨巫等申之、延引可為晦日之由云々、

この年の「田植之義」は、正月18日に執り行われる予定であったが、前日の正月17日に後嵯峨天皇の春日社行幸が行われていた²⁵。この春日社行幸は、天皇が特定の神社に自ら参詣する神社行幸という天皇祭祀の中でも最も丁重な形式のものである²⁶。天皇一行が春日社から還御したのは18日の酉刻（午後6時ごろ）となり、還御後の夜に入ってから田植え行事を行う事は不吉であると巫女が神職に申し立てたため、延引して正月の晦日に行うことにしたとする²⁷。

この事例で、春日社に対する神社行幸の影響によって、本来行われるべき恒例の農耕行事が延期となったことは、この「御田植」が、古代国家の律令祭祀制の延長上にある行事や、平安祭祀制の勅使による奉幣などを行う国家と直結する行事ではなかったことを示すと、みることができるだろう。

春日社で稲作に関わる行事として行われていたのは、唯一「御田植」だけであったが、それは、国家との関わりを有しない神社独自の行事として新たに形成された行事であった。春日社では、正暦3年（992）以降、神主が常駐化して神職組織が拡充していったが²⁸、それと並行するように、11世紀以降、春日社に神領が数多く寄進されていくようになる²⁹。このような神社の神職組織の拡充と経済基盤の安定化にともない、神社では様々な神社行事が創始されていった³⁰。長寛元年（1163）に創始されたと伝わる「御田植」もまた、その一環として形成されたものと考えられることができるだろう。

（3）宇佐宮における年中行事と農耕行事

宇佐宮は、天皇一代一度の大神宝使の派遣をはじめ、天皇の即位報告や、3年（もしくは4年）に一度の宇佐使の派遣といった恒例行事のほか、国家変異などに際して臨時に祈願使が派遣されるなど、国家祭祀のなかで重要な地位を占めてきた。このような国家祭祀の重要な対象であった宇佐宮において、農耕行事は、年中行事としてどのような位置づけであったのだろうか。

宇佐宮の神社年中行事を確認出来る史料には、平安時代に編纂された『宇佐宮年中行事案』をはじめとして、鎌倉時代に編纂された『宇佐宮寺年中行事一具勤行次第』、『宇佐宮寺

神事仏事次第』や、室町時代に編纂された『年中月並御神事』、『宇佐宮齋会式』などがある。これらの神社年中行事書には、宇佐宮で行われている行事の創始年代を記す例がみられるが、その多くが10世紀以降の平安時代に形成され、恒例の神社年中行事として定着したものである。

『宇佐宮齋会式』によれば、農耕行事に関してみると、6月の「御田殖」と8月の「大嘗会」が恒例の年中行事として行われていることが確認できる。

—6月中旬日「御田殖事」—

『宇佐宮齋会式』には、御田殖の起源について、「一、御田殖事 大宮司公順宿禰之任、保安四年初被行之」とあり、大宮司の宇佐公順によって保安4年（1123）年に創始されたとされている。

『宇佐宮齋会式』六月神事式の「御田殖事」条によれば、この祭りでは、宇佐宮の神職（宮司以下の次官と惣検校以下庁内の神職）が総出で田人らと共に御田に向かい、田植の行事と酒を飲みかわす「酒杯」が行われる。御田において楽人等が笛を吹き鉦鼓を打ち囃すなか、「遊手女」と称する田人らが田植を行う。それが終ると、御炊殿などで田人らが楽人等の囃しとともに田植の歌を歌い、そして、本殿の神前に参り拝をするという式次第が記されている。

この祭りで植えられる苗は、宇佐宮のお膝下の神領、小野庄から献上されていた。また、「四郷 封戸、向野、辛島、高家 田人 遊手女」と記されているように、田植を行う田人（遊手女）は、宇佐宮の封郷である四郷（封戸、向野、辛島、高家）の神領から選ばれた人々が務める所役であった。つまり、宇佐宮の「御田殖」行事は、宇佐宮の最も重要な経済基盤である神領の人々によって担われていたのである。

—8月初己亥日「大嘗会」—

大嘗会については、創始を伝える史料は確認できない。だが、この祭りは、鎌倉時代以降の年中行事書にはみられるものの、平安時代に編纂された『宇佐宮年中行事案』にはみえず、「御田殖」同様に、平安末から鎌倉時代にかけての時期に創始されたものと考えられる。その内容は、『年中月並御神事』8月大嘗会事条に、「以初己亥日、宮司以下神官参御炊殿、貢料米御供退出畢、次於宮司館内、上中下神官等以魚類大饗、」とあるように、宮司をはじめとする宇佐宮の神職達が御炊殿に参り、神領から貢納された米を御供として献じて「以魚類大饗」、つまり魚料理で饗宴をするというものであった。

行事内容からは、この祭りの性格は必ずしも明瞭にならない。だが、「大嘗会」という名称からは、国家祭祀の新嘗祭を意識していたであろうことが容易に理解される。この祭りも神領の存在を背景に行われ、宮中の新嘗祭が11月なのに対して宇佐宮では8月であったところに、松尾社の「春上神事」同様、国家祭祀とは別に、実際の在地の収穫期に合わせて創始されたことを知ることができる。

まとめ

以上、主に中世における神社年中行事書から二十二社と一宮の農耕行事の特色をみてきた。このなかで、かならずしも古代律令祭祀で重要視されていた祈年祭や稲の収穫祭がその

まま神社の年中行事として定着したわけではなく、律令祭祀と対応する行事が行われていた神社でも、神社独自に新たに創始した田植えに関わる行事の方が盛大に行われていたことが明らかとなった。

祈年祭を例にすると、松尾社では大床という神殿空間で最も神から遠い空間区分で行事がおこなわれ、また春日社や宇佐宮では年穀に関係する行事は行われていなかった。

しかしながら、律令祭祀体制が形骸化するなかで、国家として年穀の豊穰を祈る行事を行わなくなったわけではなかった。さらに平安時代以降、天皇が年穀の豊穰祈願のために特定の神社に対し使いを差遣して神々に幣帛を奉じる祈年穀奉幣行事という新たな形式で、祭祀が行われるようになったのである。だが、国家行事としての祈年祭は、やがて室町時代の戦乱により行われなくなる。

十一世紀には、国家的に重要と認識された特定の神社へ奉幣する二十二社奉幣制が形成され、日程は不定期ながらも年2回の2月と7月もしくは8月前後に集中して奉幣が行われるようになり、長元年間（1028～37）ごろから恒例化していった³¹。松尾社や春日社は、平安時代に二十二社に定められた神社であり、平安時代以降、中世を通して祈年穀奉幣の対象神社でもあった。

これらのことからすれば、二十二社では祈年祭が当然のごとく行われていてもおかしくはない。ところが、実際には、春日社では年穀祈願の行事が神社年中行事としては行われておらず、松尾社では祈年神事が行われていたものの、中世を通して神社年中行事としてはあまり重きをおかれていなかった。このことは、国家より遣わされた勅使らが神の前で祈年穀奉幣をする恒例行事が神社に対しておこなわれていたため、積極的に神社年中行事として神社側が行う必要がなかったとも言い換える事ができるかもしれない。そして、松尾社の祈年行事も、祈年穀奉幣が既に廃絶した近世期になると行われなくなっていくのだ³²。

しかし、だからといって、神社においては農耕行事が重視されなかったというわけではなく、新たに登場したのが田植行事であった。その創始は、平安時代二十二社や一宮が共通して神領を拡充し、神社の経済基盤が安定していく時代である。この点で、松尾社や宇佐宮の田植行事が、神社の鎮座する郡や神領（社領）を挙げての祭りとして行われていたことは、重要である。律令国家的な祭祀体制が弛緩して行くなかで、独自の経済基盤を得た神社が、律令国家的祭祀よりも神社が鎮座する在地の生活と直接的に関わる祭祀を重視し、新たに創始したのが田植行事であったと考えられるからである。

それは、松尾社の新嘗祭とも言うべき「春上神事」や宇佐宮の「大嘗会」が、国家祭祀としての新嘗祭が11月の行事であったのに対して、実際の稲の実り始める7月または8月に行なわれていたこととも符合する。神社における農耕行事は、このように、国家的祭祀体制の弛緩と独自の存立基盤の獲得を背景に、神社が実際の在地の生活に関心を向け始めるなかで成立した祭祀であると見ることができる。

注

- 1 拙稿「神社年中行事の基礎的考察」『國學院大學大学院紀要 文学研究科第38号』（國學院大學大学院文学研究科2007）
- 2 注1参照
- 3 拙稿「中世春日社年中行事の成立過程と藤原摂関家―節日行事を中心に―」『國學院大學伝統文化リ

- サーチセンター研究紀要 第1号』（國學院大學伝統文化リサーチセンター、2009）、拙稿「宇佐宮神社年中行事の成立過程に関する一考察—節日行事と大宰権帥との関わりに焦点をあてて」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要 第2号』（國學院大學伝統文化リサーチセンター、2010）
- 4 拙稿「神社年中行事の成立過程と宮中に関する一考察—相撲行事を事例として—」『オープンリサーチセンター整備事業成果論集モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践』（國學院大學伝統文化リサーチセンター、2012）
 - 5 嘉元年間（1303～1306）に賀茂別雷神社の神職・賀茂経久が記した『嘉元年中行事』
 - 6 永和2年（1376）12月20日に編纂された『松尾社年中神事次第』がある。この他に松尾社神主相郷が注進した文明6年（1474）12月13日に成立した『当社年中大小神』、永承5年（1508）正月11日成立の『松尾社年中神事次第』などがある。
 - 7 春日社は、鎌倉時代以降、社家の手で記された社家日記（『春日社記録 日記1～3巻』、春日大社社務所発行）から年中行事をみることができる。表1に反映させたのは、その中に所収されている「中臣祐定記」の寛元4年の日記。
 - 8 石清水八幡宮寺別当法印輝清が寛元（1244）年11月に記した『宮寺極楽寺恒例佛神事惣次第』。
 - 9 南北朝時代に当時の住吉社祠官の手によって記された『住吉太神宮神事次第記録』。
 - 10 平安時代後期に宇佐宮の神職によって編纂された『宇佐宮年中行事案』をはじめ、鎌倉時代に編纂された『宇佐宮寺年中行事一具勤行次第』『宇佐宮寺神事仏事次第』や、室町時代に編纂された『宇佐宮齋会式』などがある。
 - 11 『日本書紀』神代卷下、第9段（一書第二）
 - 12 『日向国風土記』逸文「知鋪郷条」
 - 13 『言継卿記』永禄2年（1559）6月23日条、その他にも同史料の永禄9年（1566）6月23日条、永禄13年（1570）6月23日条などがある。
 - 14 文明6年（1474）12月3日に編纂された『当社年中大小神』2月初酉日祈年神事条では「大床にて祈年の神事有り。次第同前。」とみえる。
 - 15 『延喜式』卷第一、四時祭上
 - 16 森田悌「第二部村落社会と社会 第六章 平安期における神祇信仰の展開」『解体期律令政治社会史の研究』（国書刊行会、1982）
 - 17 岡田荘司「第三編 平安時代後期の祭祀制 第二章平安京中の祭礼・御旅所祭祀、二松尾祭」『平安時代の国家と祭祀』（続群書類従完成会、1994）
 - 18 文明6年に編纂された松尾社の神社年中行事書『当社年中大小神』のなかでも、九月九日会神事は「大神事也」と記載されている。
 - 19 正月元日の行事については、仁安2年（1167）12月10日付の典薬寮解には次のように記される。

年首屠蘇白散者、為恒例事始自神代、供賀茂□松尾并諸社自十一月朔日始之、是奉祝公家遐齡之術、□令保人民壽筭之計也、件用途委被載式條、而近代□国不濟草葉、諸司不勤雜事、雖然偏以寮領之業、不□□（怠供力）御之勤、且以私筋力、所抽陰德之忠也、望請 天恩、任先例被免除件役等者、日々供御并白散之勤、何致懈怠哉、勤在状、以解、

この史料からは、諸国進年料雑葉の未済のため、屠蘇や白散供御の用途不足が生じているという状況のなかではあったが、年首に賀茂社・松尾社をはじめとする諸社に、典薬寮から白散・屠蘇が供されていたことがうかがえる。元日は、勅使が神社に派遣されるような形式の行事はないが、この例から朝廷と関わりのある神事であったことがわかる。

- 20 近世期に編纂された『松尾社年中行事次第記』正月朔日条によると、「進_二神前_一列_二班階上_一、次官仕献_二御_一 宮仕所預也 公文取_レ之開_二御扉_一 諸神事皆公文發 次正官入_二外陳_一（陣）_二捲_二御簾_一、次公文入_二外陳_一開_二内

陳御扉_一、次正官入_二内陣_一挑_レ幌、次出_二内陣所_一納之案把_一 公文役 社家列次者、内陳左右、左 右 外陳左右 左 右 祝 禊 大床以下者從_二權禰宜_一至_二櫛谷祝_一、左為_二上座_一右為_二下座_一、(略)…」とあり、神殿の御扉を開いて外陣に入り、さらに進み内陣の御戸を開いて内陣に入って行事が行われている様子がうかがえる。また、現在の松尾社の本殿(神殿)は、応永4年(1397)に造営されたもので、中世近世期を通して同じ神殿空間で行事がおこなわれている。

- 21 竹内理三「氏長者」『竹内理三著作集 第五卷 貴族政治の展開』(角川書店、1999)
- 22 拙稿「中世春日社年中行事の成立過程と藤原摂関家一節日行事を中心に」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要 第1号』(國學院大學伝統文化リサーチセンター、2009)
- 23 『濫觴記』の中で春日社の年中行事の成立年代が記されている。この他、注22参照
- 24 『春日社記録』日記一～日記三の中に断片的な史料がみられる。
- 25 『百練抄』寛元4年正月17日条、この他にも同年同月日条で『平戸記』や『岡屋関白記』などの史料からもみられる。
- 26 岡田莊司「第二編平安時代中期の祭祀制 第七章神社行幸の成立」『平安時代の国家と祭祀』(続群書類従完成会、1994)
- 27 『中臣祐定記』寛元4年(1246)正月17日条に「当社行幸、着到殿御着丑時、還御酉刻、御神事等如例、日々内、日記有別」とある。
- 28 三橋正「中世的神職制度の形成—「神社神主」の成立を中心に」(『神道古典研究』十五、1993)
- 29 天平神護元年(765)常陸国の鹿島社から神封20戸を奉った(『新抄格勅符抄』)のが春日社の神領に関する初見であるが、平安時代には治安元年(1021)後一条天皇が祭祀や修造の料所として春日社鎮座する地の大和国添上郡一円を寄進(『小右記』)、そして、長暦元年(1037)氏長者・藤原頼通が添上郡の神戸四ヶ郷を寄進したのをはじめ(『濫觴記』)、以降、貴族などより多くの神領寄進がおこなわれた。
- 30 注23参照
- 31 岡田莊司編「三、多様化する神道 1、平安祭祀制と天皇」『日本神道史』(吉川弘文館、2010)、岡田莊司「第二編 平安時代中期の祭祀制 第三章十六社奉幣制の成立」『平安時代の国家と祭祀』(続群書類従完成会、1994)
- 32 近世期に編纂された『松尾社年中行事次第記』には、2月祈年御神事は神社年中行事としては記載されておらず、執り行われなくなっていたことがわかる。

スタッフ紹介

* 氏名、現職、専門分野、担当研究事業、および2012年度の研究業績について紹介します。今年度新任のスタッフには、研究紹介および2012年度以前の研究業績についても掲載します。

井上順孝 所長・教授 宗教学・宗教社会学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[単行本]

- ・『世界宗教百科事典』（責任編集）丸善出版、2012年12月。
- ・『第11回学生宗教意識調査報告』（編集責任）國學院大學、2013年1月。

[論文]

- ・「新宗教研究にとっての認知活動科学・ニューロサイエンス」『國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報第5号』國學院大學、2012年9月。
- ・「ファンダメンタリズムの潮流」（山折哲雄監修『宗教の事典』所収）朝倉書店、2012年10月。
- ・「越境する宗教」（山折哲雄監修『宗教の事典』所収）朝倉書店、2012年10月。
- ・「情報時代の宗教教育を考える」（聖心女子大学キリスト教文化研究所編『宗教なしで教育はできるのか』所収）春秋社、2013年3月。
- ・「二十一世紀の教派神道」『國學院大學研究開発推進機構紀要5号』國學院大學、2013年3月。
- ・「映画・ビデオ・DVD」『宗教と現代がわかる本2013、平凡社、2013年3月。

[その他]

シンポジウム

- ・アメリカ・南カリフォルニア大学における発表「Religion in Films and Religious Culture Education in Contemporary Japan」、2012年4月。

学会発表

- ・「宗教と社会」学会・学術大会（6月、長崎国際大学）での発表「認知科学・脳科学と日本の新宗教研究」。

講演

- ・神道六教派特立百三十年記念公開シンポジウム 基調講演「二十一世紀の教派神道」2012年6月。

齊藤こずゑ 教授 教育心理学、発達心理学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[その他]

学術講演

- ・倫理意識向上に関する一具体策～倫理規程作成～
音楽療法における「倫理意識とリスクマネジメント力」の向上を目指して（講習会E シンポジウム倫理委員会企画）日本音楽療法学会近畿支部第11回近畿学術大会論文集 69-71（2013）3月。

学会発表

- ・「発達記述メディアの構成する育児支援距離の機能」日本発達心理学会第24回大会発表論文集 91（2013）3月。

遠藤潤 准教授 宗教学・日本宗教史

担当研究事業『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築』

[論文]

- ・「教祖論・教団論からみた平田国学—信仰・学問と組織—」幡鎌一弘編『語られた教祖—近世・近現代の信仰史—』法藏館、2012年4月、pp.241-265。
- ・「渋谷の寺院—近世を中心として—」國學院大學研究開発推進センター渋谷学研究会 石井研士編著『渋谷学叢書3 渋谷の神々』雄山閣、2013年2月、pp.197-225。

黒崎浩行 准教授 情報化と宗教、現代社会と神社神道

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[論文]

- ・「宗教のインターネット活用が築くソーシャル・キャピタル」大谷栄一・藤本頼生編『地域社会をつくる宗教』叢書 宗教とソーシャル・キャピタル第2巻、明石書店、2012年、264-284。
- ・「渋谷の住宅地と神社祭礼」石井研士／國學院大學研究開発推進センター渋谷学研究会編著『渋谷学叢書3 渋谷の神々』雄山閣、2013年、117-143。

[口頭発表]

- ・「被災地の神社と復興の過程」第3回「東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて」シンポジウム・研究会、京都大学こころの未来研究センター、2012年7月11日。
- ・「東日本大震災における宗教者の支援活動と研究者の後方支援」Workshop: New Perspectives in the Study of Japanese Religion: Research from Kokugakuin University、ハーバード大学ライシャワー日本研究所、2013年1月23日。
- ・“Relief Activities of Religious Organizations,” International Conference: Opportunities and Challenges of Participatory Digital Archives: Lessons from the March 11, 2011 Great Eastern Japan Disaster, The Edwin O. Reischauer Institute of Japanese Studies, Harvard University, January 25, 2013.
- ・「宗教系大学の取り組みと宗教学者」東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座・京都大学こころの未来研究センター震災関連プロジェクト・宗教者災害支援連絡会主催パネルディスカッション「東日本大震災と宗教者・宗教学者」東北大学、2013年3月2日。

[その他]

- ・(項目執筆)「バーチャル宗教」世界宗教百科事典編集委員会編、井上順孝責任編集『世界宗教百科事典』丸善出版、2012年12月、786-787。

平藤喜久子 准教授 神話学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[単行本]

- ・『神の文化史事典』白水社、2013年2月。松村一男、山田仁史と共編。

[論文]

- ・「岡正雄を読み直す—現代の神話学から—」ヨーゼフ・クライナー編『日本民族学の戦前と戦後 岡正雄と日本民族学の草分け』東京堂出版、2013年3月。
- ・「外国人が見た古事記」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第5号、2013年3月。

[口頭発表等]

- ・「岡正雄を読み直す—現代の神話学から—」「宗教と社会」学会第20回学術大会、長崎国際大学、2012年6月16日。
- ・「記紀が描く罪と災害」パネルディスカッション「災害の語りの宗教学」日本宗教学会第71回学術大会、皇學館大学、2012年9月8日。

- ・(講演)「外国人が見た古事記—130年目の古事記—」第38回日本文化を知る講座「1300年目の古事記」、國學院大學、2012年6月2日。
- ・(基調講演)「はじまりとよみがえりの神話学」伊勢国際宗教フォーラム第6回年次大会「宗教と環境～時と場のよみがえり～」、皇學館大学、2012年11月18日。

[その他]

- ・「古事記編纂1300年～新しい視点からの神話教育～」『全教神協広報』第90号、2012年5月。
- ・(項目執筆)「日本神話」世界宗教百科事典編集委員会編、井上順孝責任編集『世界宗教百科事典』丸善出版、2012年12月。
- ・「ゲーム世代と神話」『宗教と現代がわかる本2013』平凡社、2013年3月。
- ・(監修)「霊威ある神信仰の謎」『一個人 日本の神社の謎』KKベストセラーズ、2013年2月号。

ノルマン・ヘイヴンズ (HAVENS, Norman) 准教授 日本宗教史、日本の民間信仰
担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

松本久史 准教授 近世・近代の国学・神道史

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」

[口頭発表]

- ・(発題)「記紀・古典の視点から」第三十回神社本庁教学大会研究大会報告「神道的自然観と現代社会」國學院大學、2012年8月10日。

[その他]

- ・「古事記と国学」東京都神社庁研修シリーズ20、東京都神社庁、全57頁、2013年3月1日。

星野靖二 准教授 宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[口頭発表]

- ・“Why “New” Buddhism? Modernity and the Buddhist Reform Movement in Modern Japan” [Invited Lecture, sponsored by the Buddhist Studies Workshop] at Princeton University, 2012.4.10
- ・“Why New Buddhism? Modernity and the Buddhist Reform Movement in Modern Japan” [Invited Lecture, sponsored by the Department of Asian Languages and Civilizations, the Eastman Lecture Fund, and the John W. Hall Lecture Fund] at Amherst College, 2012.4.19
- ・“Envisioning the Future Religion: Japanese intellectuals and American Religious Liberals in the Late 19th Century” [Reischauer Institute Special Presentation] at Harvard University, 2012.9.6
- ・“Envisioning the Future Religion: Japanese intellectuals in liberal religious landscape of 19th century America,” at the New England Association for Asian Studies (NEAAS) 2012 Conference, held at Amherst College, 2012.10.20
- ・“Presenting ‘Japanese religion’ in America at the End of the 19th Century.” at the Kokugakuin Workshop held at Reischauer Institute, Harvard University, 2013.1.23
- ・“Japanese Religions and Christian Education in Japan” [Guest Lecture, organized by Professor Andy Nakajima] at Hope College, 2013.2.1

[その他]

- ・(項目執筆)「近代の仏教思想」「ユニテリアン」世界宗教百科事典編集委員会編、井上順孝責任編集『世界宗教百科事典』丸善出版、2012年12月。

塚田穂高 助教 宗教社会学、近現代日本の宗教運動

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[単行本]

- ・『宗教と社会のフロンティア—宗教社会学からみる現代日本—』（高橋典史・岡本亮輔と共編著）勁草書房、2012年8月。

[論文]

- ・「日本社会と「宗教」をめぐる区切りと兆し—オウム裁判終結、「君が代」起立問題、「宗教情報ブーム」のゆくえから—（国内の宗教動向）」財団法人国際宗教研究所編『現代宗教 2012』秋山書店、2012年7月。
- ・“Cultural Nationalism in Japanese Neo-New Religions : A Comparative Study of Mahikari and Kōfuku no Kagaku”, (translation by Gaynor Sekimori) *Monumenta Nipponica* 67-1, 2012年7月。

[その他]

- ・「テーマセッション報告「宗教社会学・教団研究の現在と社会との接点—櫻井義秀・中西尋子『統一教会』を検討する—」（寺田喜朗・川島堅二・浅見定雄・山口広・櫻井義秀・中西尋子と共著）『宗教と社会』18、「宗教と社会」学会、2012年6月。
- ・“Religious Issues in Japan 2011 : Religion and “Society” Finale and Promise”, (translation by James W. Heisig) *Bulletin of the Nanzan Institute for Religion & Culture* Nr.36(2012), 2012年6月。
- ・（項目執筆）「戦後形成された新宗教」「密教系」「新しいタイプの団体」世界宗教百科事典編集委員会編、井上順孝責任編集『世界宗教百科事典』丸善出版、2012年12月。
- ・『平成24年度國學院大學特別推進研究助成金 研究成果報告書 現代日本における公有地上宗教施設の実態把握のための基礎的研究』2013年3月。

鈴木聡子 助教（特任） 神道史学、

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[研究紹介]

神社の歴史や祭礼について神道史学の観点から研究に取り組んでいる。特に古代・中世の二十二社や一宮を対象の神社として、神社ではどのような祭りを恒例の年中行事としておこなってきたのか、また、神社の年中行事が、いつ、だれによって創始されたのだろうかという問題に関心をもっている。これらの問題点から、祭りに関連する各神社の歴史と社会的背景をおさえながら、少しでも神社の実態を明らかにしていくことを目指している。

[2011年度までの主な業績]

- ・「神社年中行事の成立過程と宮中に関する一考察—相撲行事を事例として—」『モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践』文部科学省 私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター整備事業 成果論集、p241～254、平成24年3月31日。
- ・「ヤマ（山車）祭り成立の背景—神の移動と「山」—」『國學院大學伝統文化リサーチセンター紀要3号、國學院大學伝統文化リサーチセンター、p 109～121、平成23年3月31日。
- ・「宇佐宮神社年中行事の成立過程に関する一考察—節日行事と大宰権帥との関わりに焦点をあてて—」『國學院大學伝統文化リサーチセンター紀要3号、國學院大學伝統文化リサーチセンター、p 87～97、平成22年3月31日。

市川収 客員研究員 惑星物質科学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

カール・フレール (FREIRE, Carl) 客員研究員 近代の日本史（特に社会史・思想史）

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

李和珍 PD 研究員 宗教社会学、日韓の新宗教教団の比較研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

【論文】

- ・「圓佛教の海外布教の現況—日本教区を中心に—」『國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報 第5号』2012（平成24年）9月30日、49～61頁。

加藤久子 PD 研究員 政治と宗教

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

【論文】

- ・「負の文化遺産のツーリズム—<アウシュヴィッツ>への旅」山中弘編『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続』世界思想社、2012年6月。
- ・「アウシュヴィッツ—それは誰の歴史か」星野英紀・山中弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂、2012年11月。

【口頭報告】

- ・「社会主義政権下のポーランド社会におけるカトリック教会」（「カトリシズムとヨーロッパ近代」研究報告会、於・青山学院大学）2013年1月。

【その他】

- ・「ロシアのパンク・バンドの教会侵入事件とその余波」国際宗教研究所宗教情報リサーチセンター『ラーク便り』第56号、2012年11月。
- ・（共著）「ムハンマド風刺映画とイスラム教徒による抗議デモ」国際宗教研究所宗教情報リサーチセンター『ラーク便り』第56号、2012年11月。
- ・（項目執筆）「東欧の宗教状況」世界宗教百科事典編集委員会編、井上順孝責任編集『世界宗教百科事典』丸善出版、2012年12月。
- ・（共著）「マヤ文明『終末の日』をめぐる世界各地の反応」国際宗教研究所宗教情報リサーチセンター『ラーク便り』第57号、2013年2月。
- ・「気になる人物の発言集」渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本2013』平凡社、2013年3月。

小林威朗 PD 研究員 近世・近代の国学・神道史

担当研究事業『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築』

【口頭発表】

- ・「堀秀成の思想と行動—平田派国学者の視点から—」（日本宗教学会第71回学術大会、皇学館大学）2012年9月9日。
- ・「『古史伝』研究序説」（神道宗教学会第66回学術大会、國學院大學）2012年12月2日。

三ツ松誠 PD 研究員 国学思想史

担当研究事業『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築』

【論文】

- ・「嘉永期の気吹舎—平田鏡胤と「幽界物語」—」（『日本史研究』第596号、日本史研究会）2012年4月。
- ・「『国典』・『国教』・『国体』—祭・政・教をめぐる飯田年平の思想—」（『宗教研究』第372号、日本宗教学会）2012年6月。
- ・「諸家執奏廃止と神祇官—三輪田元綱の立場から—」（『近世の天皇・朝廷研究 大会成果報告集』第5号、学習院大学人文科学研究所）2013年3月。

[口頭発表]

- ・「福善禍淫と吉凶交替」(第29回鈴屋学会大会、本居宣長記念館)2012年4月。
- ・「所謂神基習合神道に関する一考察」(日本宗教学会第71回学術大会、皇學館大学)2012年9月。
- ・「諸家執奏停止と神祇官」(近世の天皇・朝廷研究 第5回大会、学習院大学)2012年9月。
- ・「天文暦学研究からみた宣長と篤胤」(歴史学研究会日本近世史部会3月例会、慶應義塾大学)2013年3月。
- ・「書評：深谷克己『東アジア法文明圏の中の日本史』(岩波書店、2012)」(アジア民衆史研究会2012年度第2回研究会、明治大学)2013年3月。

[その他]

- ・(史料研究ノート)「天野勝義宛井上文雄書簡」(『紙魚之友』第30号、房総史料調査会)2012年12月。

天田 顕徳 研究補助員 宗教社会学、民族宗教研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[論文]

- ・2012年11月「熊野 霊場と観光地のはざまに揺れ動く聖地」(星野英紀・山中弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂)。
- ・2012年02月「本来の祭りの行方 和歌山県新宮市「お燈祭」に関わる言説の競合をめぐって」(由谷裕哉編『郷土再考』角川学芸出版)。

[口頭発表]

- ・2012年09月「霊場の意味付けと顕在化する「違和感」—災害後の熊野を事例に一—」於：日本宗教学会第71回学術大会(皇學館大学)。
- ・2012年09月「信仰・文化・ノスタルジー「一茨城県・筑波山神窟講の継承と結集の原理に注目して—」於：講研究会(駒澤大学)。
- ・2012年08月「パワースポット化する霊場」於：国際熊野学会(戸隠・旅館横倉)。

[その他]

- ・2012年04月「(国内の宗教動向)紀伊半島豪雨と熊野—災害の様子と今後の見通しに関する一考察」(『国際宗教研究所ニュースレター(74)』国際宗教研究所)。

武田 幸也 研究補助員 近代神道史

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」

[口頭発表]

- ・「明治期の神風講社」(第27回講研究会例会、於駒澤大学)2012年12月22日。

市田 雅崇 共同研究員 民俗宗教研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

一戸 涉 共同研究員 日本近世文学

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」

[単行本]

- ・井上泰至・一戸涉・三浦一朗・山本綏子共編『春雨物語』三弥井書店、「血かたびら」pp4-29「海賊」pp60-84「歌のほまれ」pp193-198の校注・評釈及び参考文献一覧pp270-274担当執筆、2012.4。
- ・一戸涉・高野奈未・田代一葉・田中仁、「短冊研究文献目録稿(明治以降)」(pp495-511)及び掲載短冊の翻刻分担、鉄心斎文庫短冊研究会編『むかしをいまに—鉄心斎文庫短冊総覧—』、鉄心斎文庫伊勢物語文華館・八木書店、2012.9。

- ・一戸渉、「古典形成と出版—近世日本の書物メディアをめぐって—」、一戸渉・佐藤文彦共編『「古典」は誰のものか—比較文学の視点から—』、金沢大学人文学類、pp43-54,2013.2。
※一戸渉・佐藤文彦共編との共編で同書全体（pp1-99）の編纂を行う。

【論文】

- ・「金沢大学日本語学日本文学研究室所在古典籍目録稿」『金沢大学国語国文』、第38号、金沢大学国語国文学会、pp75-87、2013.3。
- ・一戸渉・高橋悠里「最末期の金沢蕉門—東築松氏所蔵宮森北葉関係俳諧資料をめぐって—」、『金沢大学歴史言語文化学系論集言語・文学篇』、第5号、金沢大学歴史言語文化学系、pp21-42、2013.3。

【口頭発表・学術講演】

- ・「古典形成と出版—近世日本の書物メディアをめぐって—」、金沢大学人文学類シンポジウム「「古典」は誰のものか—比較文学の視点から—」、金沢大学サテライトプラザ、2012.12.15。
「出府と蟄居—非蔵人橋本経亮の誤算—」、第3回人的交流研究会、岩瀬文庫、2013.3.2。

今井信治 共同研究員 宗教社会学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

【論文】

- ・「ファンが日常を「聖化」する—絵馬に懸けられた願い—」山中弘編『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続—』世界思想社、2012年6月。
- ・「フレームから浮かび上がるリアリティ—秩父札所十七番定林寺調査を中心に—」『デジタルゲーム学研究』第6巻第2号、日本デジタルゲーム学会、2012年9月。
- ・「鷲宮神社」星野英紀・山中弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂、2012年11月。

【その他】

- ・（項目執筆）「インターネットと宗教」世界宗教百科事典編集委員会編、井上順孝責任編集『世界宗教百科事典』丸善出版、2012年12月。
- ・（項目執筆）「クベラ」「オシラサマ」「コンゴウリキシ」「シテンノウ」村松一男・平藤喜久子・山田仁史編『神の文化史事典』白水社、2013年2月。
- ・（書評）「由谷裕哉編著『郷土再考—新たな郷土研究を目指して—』」『北陸宗教文化』26号、2013年3月。

小田真裕 共同研究員 日本近世史

担当研究事業「『國學院大学 国学研究プラットフォーム』の構築」

【論文】

「武州二郷半領の村々と虚無僧—横堀村・駒形村を中心に—」（『三郷市史研究 葦のみち』24）。

【その他】

史料研究ノート「加瀬一家文書にみる天保期の東総村落」（『紙魚之友』30）。

書評「小田原近世史研究会編『近世南関東地域史論：駿豆相の視点から』」（『千葉史学』61）。

イグナシオ・キロス (QUIROS, Enrique Ignacio Luis) 共同研究員 上代の国学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

小堀馨子 共同研究員 古代ローマ宗教研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

野口生也 共同研究員 宗教人類学、ペンテコスタリズム研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[研究紹介]

ペンテコスタリズムの宗教人類学的な研究を行っている。ペンテコスタリズムとは、今日、世界中で急成長している霊聖主義的なキリスト教運動の総称である。個々のローカルな文脈における宗教的な独自性に注目し、それらを比較し、グローバルな宗教史に位置づけることを試みている。これまで日本、韓国、オランダにおける現地および移民の教会を調査してきた。現在は特に、非西欧圏のトランスナショナルな事例として、日本における韓国系ペンテコスタリズムを研究対象とし、エスニシティの境界を越えた布教戦略および回心過程の考察を進めている。

2011年度までの主な研究業績

[論文]

- ・“Japan: Het verzoenende geloof van de Koreaanse bureu.” *CV Koers* (June 2008), 2008年6月 (*オランダ語論文)。

[口頭発表]

- ・“The Japanese Acceptance of Korean Pentecostalism: A Case of Yonggi Cho's Church in Japan.” Presented at International Symposium “Pentecostalism and Shamanism in Asia,” Nanzan Institute for Religion and Culture, Nanzan University, Nagoya, Japan, 2012年1月21日。
- ・「日本における韓国系ペンテコスタリズム：一支部教会の事例を中心に」(南山宗教文化研究所懇話会、南山大学)、2011年7月14日。

[その他]

- ・(講演) “Religion and Migration: Cases of Korean Migrant Churches in US and Japan.” LECTURED at Department of International Liberal Arts, Akita International University, Akita, Japan, 2011年6月10日。
- ・(書評)「書評 大谷栄一・川又俊則・菊池裕生編『構築される信念—宗教社会学のアクチュアリティを求めて』」、『東京大学宗教学年報』第19号、2001年。

村上晶 共同研究員 宗教社会学、シャーマニズム研究

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

[論文]

- ・「富士山—「信仰の山」への回帰—」星野英紀・山中弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂、2012年11月。
- ・「消えゆく巫俗と生きのびる巫者—ワカとイタコを事例として—」『宗教学・比較思想学論集』第14号、2013年3月。

[口頭発表]

- ・“Japanese Shamanistic Traditions and the “Supirituaru” in the panel “The Global and the Local in the “Supirichuaru” (Spiritual) of 21st Century Japan,” Asian Study Conference Japan, 立教大学、2012年6月。
- ・「巫者の呼称に関する一考察—ワカとイタコを中心に—」日本宗教学会第71回学術大会、皇學館大学、2012年9月。

[その他]

- ・翻訳「宗教」日本特殊教育学会訳編『障害百科事典』丸善出版、2013年1月。

ヤニス・ガイタニディス (GAITANIDIS, Ioannis) 共同研究員

医療人類学・宗教社会学・日本学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

山梨有希子 共同研究員 宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

土屋博 客員教授 宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

ナカイ・ケイト (NAKAI, Kate W) 客員教授 日本思想史

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

林淳 客員教授 日本宗教史

担当研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」

星野英紀 客員教授 宗教学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

山中弘 客員教授 宗教社会学

担当研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

出版物紹介

井上順孝（編集委員長）『世界宗教百科事典』

（丸善出版、2012年12月）

内容紹介

世界の宗教現象、宗教文化といったものを理解していくための基本的知識と現代の宗教研究の成果をなるべく分かりやすく提供するために刊行された事典。大きく二部構成になっている。第一部宗教編では、宗教ごとの展開を捉える視点から、古代宗教、ユダヤ教、仏教、キリスト教、イスラームに関する項目がある。第二部宗教文化圏編では、地域ごとの状況を把握しようとする視点から、中国宗教文化圏、日本の宗教、韓国の宗教、仏教・ヒンドゥー教文化圏、キリスト教文化圏、イスラーム文化圏、アフリカ宗教文化圏、中南米・オセアニア宗教文化圏、そして現代の宗教・スピリチュアリティに関する項目がある。



井上順孝編集責任『第11回学生宗教意識調査報告』

（科学研究費補助金 基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」、2013年1月）

内容紹介

本研究プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」のメンバーならびに「宗教と社会」学会の「宗教意識調査プロジェクト」メンバーが中心となって実施された質問紙調査の報告書。1995年以来11回目となる本調査は、2012年4月～6月に行われ、全国30大学の学生4,094人の有効回答を得た。「信仰を持っている」との回答は、前回に続き増加傾向が見られた。また、2011年3月の東日本大震災を受け、災害時の宗教・宗教家の役割や、震災による意識の変化などの問いが新設された。イスラームへの関心や関わりなどを問う設問は、2005年度の第8回調査以来、2回目となっている。現代日本の大学生・若者の宗教意識を知るための重要なデータを提供していると言えるだろう。

目次	
はじめに	1
【1】調査の概要	1
【2】調査の方法	2
1. 調査の目的	2
2. 調査の時期	2
3. 調査の対象	2
4. 調査の方法	2
5. 調査の結果	2
6. 調査の意義	2
【3】調査の結果	3
1. 調査の概要	3
2. 調査の方法	3
3. 調査の結果	3
4. 調査の意義	3
【4】調査の結果	4
1. 調査の概要	4
2. 調査の方法	4
3. 調査の結果	4
4. 調査の意義	4
【5】調査の結果	5
1. 調査の概要	5
2. 調査の方法	5
3. 調査の結果	5
4. 調査の意義	5
【6】調査の結果	6
1. 調査の概要	6
2. 調査の方法	6
3. 調査の結果	6
4. 調査の意義	6
【7】調査の結果	7
1. 調査の概要	7
2. 調査の方法	7
3. 調査の結果	7
4. 調査の意義	7
【8】調査の結果	8
1. 調査の概要	8
2. 調査の方法	8
3. 調査の結果	8
4. 調査の意義	8
【9】調査の結果	9
1. 調査の概要	9
2. 調査の方法	9
3. 調査の結果	9
4. 調査の意義	9
【10】調査の結果	10
1. 調査の概要	10
2. 調査の方法	10
3. 調査の結果	10
4. 調査の意義	10
【11】調査の結果	11
1. 調査の概要	11
2. 調査の方法	11
3. 調査の結果	11
4. 調査の意義	11
【12】調査の結果	12
1. 調査の概要	12
2. 調査の方法	12
3. 調査の結果	12
4. 調査の意義	12
【13】調査の結果	13
1. 調査の概要	13
2. 調査の方法	13
3. 調査の結果	13
4. 調査の意義	13
【14】調査の結果	14
1. 調査の概要	14
2. 調査の方法	14
3. 調査の結果	14
4. 調査の意義	14
【15】調査の結果	15
1. 調査の概要	15
2. 調査の方法	15
3. 調査の結果	15
4. 調査の意義	15
【16】調査の結果	16
1. 調査の概要	16
2. 調査の方法	16
3. 調査の結果	16
4. 調査の意義	16
【17】調査の結果	17
1. 調査の概要	17
2. 調査の方法	17
3. 調査の結果	17
4. 調査の意義	17
【18】調査の結果	18
1. 調査の概要	18
2. 調査の方法	18
3. 調査の結果	18
4. 調査の意義	18
【19】調査の結果	19
1. 調査の概要	19
2. 調査の方法	19
3. 調査の結果	19
4. 調査の意義	19
【20】調査の結果	20
1. 調査の概要	20
2. 調査の方法	20
3. 調査の結果	20
4. 調査の意義	20
【21】調査の結果	21
1. 調査の概要	21
2. 調査の方法	21
3. 調査の結果	21
4. 調査の意義	21
【22】調査の結果	22
1. 調査の概要	22
2. 調査の方法	22
3. 調査の結果	22
4. 調査の意義	22
【23】調査の結果	23
1. 調査の概要	23
2. 調査の方法	23
3. 調査の結果	23
4. 調査の意義	23
【24】調査の結果	24
1. 調査の概要	24
2. 調査の方法	24
3. 調査の結果	24
4. 調査の意義	24
【25】調査の結果	25
1. 調査の概要	25
2. 調査の方法	25
3. 調査の結果	25
4. 調査の意義	25
【26】調査の結果	26
1. 調査の概要	26
2. 調査の方法	26
3. 調査の結果	26
4. 調査の意義	26
【27】調査の結果	27
1. 調査の概要	27
2. 調査の方法	27
3. 調査の結果	27
4. 調査の意義	27
【28】調査の結果	28
1. 調査の概要	28
2. 調査の方法	28
3. 調査の結果	28
4. 調査の意義	28
【29】調査の結果	29
1. 調査の概要	29
2. 調査の方法	29
3. 調査の結果	29
4. 調査の意義	29
【30】調査の結果	30
1. 調査の概要	30
2. 調査の方法	30
3. 調査の結果	30
4. 調査の意義	30

松村一男・平藤喜久子・山田仁史編『神の文化史事典』

(白水社、2013年2月)

内容紹介

世界の900余りの神々の名前や属性、能力をまとめた事典。

各項目では、神の名前の由来、属性と能力にかかわる概要をまとめ、詳細な出典を記している。すべての項目に「英雄」や「美男」、「戦士」、「王」といったキーワードを付し、巻末にキーワード索引を掲載する。これにより世界中の神話を横断的に研究することが可能となる。巻末には、キーワード索引、地域別出典一覧、参考文献一覧が付く。全650頁。

編者に本研究所の平藤喜久子が加わり、共同研究員の今井信治、小堀馨子も項目を執筆している。



高橋典史・塚田穂高・岡本亮輔編著

『宗教と社会のフロンティア—宗教社会学からみる現代日本—』

(勁草書房、2012年8月)

内容紹介

現代日本の「宗教」に関わるトピックを幅広く取り上げた論集であり、大学生向けの「宗教社会学」や「現代宗教論」といった授業の教科書を想定して編まれたものである。全体は、13の章と3つのコラムから構成され、若手の宗教学・宗教社会学者14人が分担して執筆している。神道・仏教・キリスト教などの宗教伝統ごとや、宗教社会学の学説史・理論ごとではなく、カルト問題・スピリチュアル・社会参加・聖地巡礼ツーリズム・民俗・墓と葬送・生命倫理とスピリチュアルケア・政治と宗教・宗教教育・グローバル化と宗教などといったテーマごとに論じている点が最大の特徴であり、現代日本社会のさまざまな領域に「宗教」が関わっていることを理解できる内容となっている。



山中弘編『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続—』

(世界思想社、2012年7月)

内容紹介

近年の世界的な巡礼ブーム、世界遺産ブームを反映して宗教施設をめぐるツーリズムが盛んになっている。本書では、これまで宗教研究の側からクローズアップされていなかった宗教（聖地）とツーリズムとの関わりを宗教学的視点から論じた著書で、第1部「聖地とツーリズム」、第2部「巡礼とツーリズム」、第3部「世界遺産とツーリズム」の3部構成となっている。

本研究所スタッフでは、山中弘を編者として、加藤久子が「負の文化遺産のツーリズム—〈アウシュヴィッツ〉への旅」、今井信治が「ファンが日常を「聖化」する—絵馬に懸けられた願い—」を執筆している。全279頁。



山中弘・星野英紀・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』

(弘文堂、2012年11月)

内容紹介

宗教的行為「聖地巡礼」を「観光」という補助線で読み解きアニメの聖地から世界宗教の聖地、さらには負の聖地アウシュヴィッツなどの国内外52の聖地をとりあげ、それぞれの聖地の歴史と時代の流れによる変遷を分析・解説したものの。

本研究所スタッフでは、星野英紀、山中弘らを編者として加藤久子が「アウシュヴィッツ—それは誰の歴史か」、天田顕徳が「熊野 霊場と観光地のはざまに揺れ動く聖地」、村上晶が「富士山—「信仰の山」への回帰—」、今井信治が「鷲宮神社」を執筆している。全272頁。



テレビ放映・番組紹介

本研究所主催の過去の国際研究フォーラムの様子が、衛星放送「スカパー！」の「ベターライフチャンネル」(216Ch)の番組「精神文化の時間」(撮影・制作：株式会社 精神文化映像社)において、下記の通り放映された。

○国際研究フォーラム「デジタル映像時代の宗教文化教育—開かれたネットワークによる取り組み—」(2011年10月16日開催)

放映日時：2012年4月11日(水) 21:30～22:30

2012年5月9日(水) 21:30～22:30

○国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」(2010年10月3日開催)

放映日時：2012年6月13日(水) 21:30～22:30

○国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐる—」(2012年9月29日開催)

放映日時：前編：2012年10月31日(水) 21:30～22:30

2013年2月13日(水) 21:30～22:30

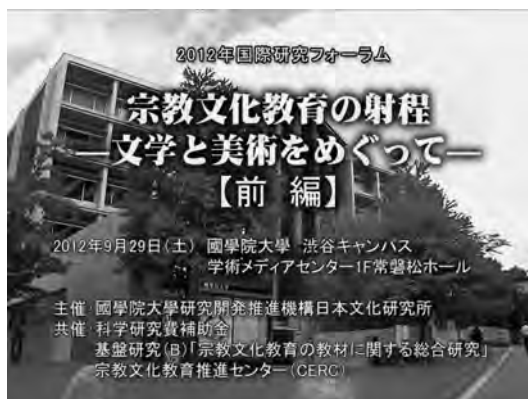
後編：2012年11月7日(水) 21:30～22:15

2013年1月9日(水) 21:30～22:15

2013年3月13日(水) 21:30～22:15

本フォーラムの様子は、精神文化映像社の並川汎社長の判断により、特別に前編60分・後編45分の拡大版として編集され放送された。

なお、同番組は、iPhoneアプリの「stylecast viewer」、Androidアプリの「ivy」をダウンロードすることで、オンタイムで視聴が可能である。



放映番組の様子：「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐる—」より

國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報 第6号

平成 25 年 9 月 30 日 発行

発行者 井上順孝

編集担当 星野靖二

鈴木聡子

印刷者 株式会社 デイグ

発行所 國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所

東京都渋谷区東 4 丁目10番28号

郵便番号 150-8440

電話 03-5466-0162

FAX 03-5466-9237

